

特別史跡讃岐国分寺跡Ⅰ

― 保存整備事業に伴う発掘調査報告書 ―

遺物編②

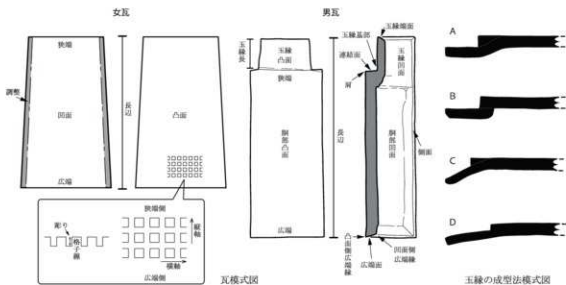


2020年3月

高松市教育委員会

例 言

- 1 本書は特別史跡讃岐国分寺跡の保存整備事業に伴う発掘調査報告書・遺物編②・で、前冊で報告できなかった土器類と瓦埴類について報告するものである。
- 2 本書に伴う整理作業、特に瓦埴類について平成22年度より断続的に実施し、高松市創造都市推進局文化・観光・スポーツ部文化財課が行った。整理作業は文化財専門員の香川将慶並びに渡邊誠（現・香川県教育委員会）・同課非常勤嘱託職員の岡本治代（現・徳島県立博物館）が実施し、高松市文化財課非常勤嘱託職員の上原ふみ、磯崎福子、森原奈々の補助を得た。本書の執筆は香川・渡邊が行い、香川が編集した。
- 3 執筆は第2章第1節土器類、第3章第2節鉈瓦の中近世の型式、第3章第3節宇瓦の中近世の型式は渡邊が、その他は香川が担当した。
- 4 本報告の標高は東京湾平均海面高度を基準とし、方位は座標北を示す。なお、調査区の国土座標については、調査当時のもの（日本測地系）を使用している。
- 5 本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB：礎石建物跡、掘立柱建物跡 SA：築地塼、基壇 SK：土坑
SX：抜き取り痕跡若しくは性格不明遺構 SP：柱穴 SD：溝
- 6 本書に掲載した遺物のほとんどは高松市教育委員会で保管しているが、他所の資料に関してはキャプション等で所在を記す。
- 7 瓦の呼称や男瓦や女瓦の部位に関しては以下のように呼称・表記する。
鉈瓦（軒丸瓦）、宇瓦（軒平瓦）、男瓦（丸瓦）、女瓦（平瓦）



- 8 文字瓦の表現は以下のようである
[] 前後に文字の続きが推測されるもの ■ 解説不明な文字
- 9 発掘調査から整理作業、報告書の執筆を実施するにあたって、下記の方々及び、関係機関から御協力と御教示を得た。記して厚く謝意を表する（敬称略）。
文化庁、香川県教育委員会、香川県埋蔵文化財センター、古代寺院史研究会、讃岐国分寺、九亀市立郡家小学校、上杉和央、上原眞人、岡島陽子、岡本治代、小澤毅、大塚純司、梶原義実、亀田修一、金玄耿、古閑正浩、鈴木景二、須田勉、須藤聖子、妹尾周三、竹内亮、菅井幸男、花谷浩、菱田哲郎、松本和彦、松本忠幸、三舟隆之、吉川真司、吉川敏子、吉野秋二、渡部明夫

目 次

第1章 整理作業について	1
第1節 出土遺物の調査時の取り上げと整理時の認識と作業の方法	1
第2章 土器類	13
第1節 土器類	13
第3章 瓦埴類	28
第1節 瓦埴類の概要と特徴	28
第2節 鍔瓦	28
第3節 宇瓦	50
第4節 男瓦	77
1) 玉縁式男瓦	77
2) 行基式男瓦	79
3) 小結	79
第5節 女瓦	104
1) 格子叩き	104
2) 平行叩き	120
3) 縄目叩き	129
4) その他の女瓦	138
5) 小結	138
第6節 道具瓦	139
1) 鬼瓦	139
2) 熨斗瓦	139
3) 隅木蓋瓦	139
4) 面戸瓦	142
5) 雁振瓦	142
6) 鳥衾瓦	142
7) 隅切瓦	145
第7節 埴	145
第8節 文字瓦	151
第9節 その他の瓦埴類及び石製品	151
第4章 総括	154
第1節 胎土・色調・焼成状況から見る瓦の分類	154
第2節 創建期における瓦の技法について	156
第3節 国分寺瓦の生産地について	157
第4節 讃岐国分僧寺の瓦編年について（案）	157
1) 編年（案）の前提について	157
2) これまでの讃岐国分寺の年代観について	158
3) 瓦の変遷について	158
4) 各期の年代観について	162

挿 図 目 次

第1図 調査区グリッド名	2
第2図 昭和58年度調査遺構図 (S=1/600)	3
第3図 昭和59年度調査遺構図① (S=1/200)	4
第4図 昭和59年度調査遺構図② (S=1/200)	5
第5図 昭和60年度調査遺構図 (S=1/250)	6
第6図 講堂跡西方地区 (S=1/200)	7
第7図 僧房跡北側地区 (S=1/200)	8
第8図 僧房跡覆屋排水地区 (S=1/200)	9
第9図 北面・西面築地崩跡地区・金堂跡西方地区 (S=1/250)	10
第10図 平成3年度調査区寺城北東地区 (S=1/200)	11
第11図 平成3年度調査区塔跡南東地区 (S=1/200)	12
第12図 81・83年度 出土遺物 (S=1/3)	14
第13図 83年度 出土遺物② (S=1/3)	15
第14図 83年度 出土遺物③ (S=1/3)	16
第15図 83年度 出土遺物④ (S=1/3・1/4)	17
第16図 84年度 出土遺物① (S=1/3)	18
第17図 84年度出土遺物② (S=1/3)	19
第18図 85年度出土遺物① (S=1/3)	21
第19図 85年度出土遺物② (S=1/3)	22
第20図 85年度出土遺物③ (S=1/3・1/2)	23
第21図 85年度出土遺物④ (S=1/3)	24
第22図 86年度出土遺物 (S=1/3・1/2)	25
第23図 88・91年度出土遺物 (S=1/3)	26
第24図 91年度出土遺物② (S=1/3・1/2)	27
第25図 鍔瓦 SKM01～03A (S=1/4)	31
第26図 鍔瓦 SKM03A～04 (S=1/4)	32
第27図 鍔瓦 SKM05～08 (S=1/4)	34
第28図 鍔瓦 SKM09～16 (S=1/4)	35
第29図 鍔瓦 SKM17～22 (S=1/4)	38
第30図 鍔瓦 SKM23～31 (S=1/4)	39
第31図 鍔瓦 SKM32～35 (S=1/4)	42
第32図 鍔瓦 SKM35～50 (S=1/4)	43
第33図 鍔瓦出土位置図 SKM01 (S=1/4000)	44
第34図 鍔瓦出土位置図 SKM02・03A (S=1/4000)	45
第35図 鍔瓦出土位置図 SKM04・05 (S=1/4000)	46
第36図 鍔瓦出土位置図 SKM06・07 (S=1/4000)	47

第37図 鍔瓦出土位置図 SKM08・09 (S=1/4000)	48
第38図 鍔瓦出土位置図 SKM15・17 (S=1/4000)	49
第39図 宇瓦 SKH01A (S=1/4)	52
第40図 宇瓦 SKH01B① (S=1/4)	53
第41図 宇瓦 SKH01B② (S=1/4)	54
第42図 宇瓦 SKH01C① (S=1/4)	55
第43図 宇瓦 SKH01C② (S=1/4)	56
第44図 宇瓦 SKH01C③～03 (S=1/4)	57
第45図 宇瓦 SKH03② (S=1/4)	58
第46図 宇瓦 SKH04～06 (S=1/4)	59
第47図 宇瓦 SKH07～12 (S=1/4)	62
第48図 宇瓦 SKH13～18 (S=1/4)	64
第49図 宇瓦 SKH19～25 (S=1/4)	65
第50図 宇瓦 SKH26～37 (S=1/4)	66
第51図 宇瓦 SKH38～45 (S=1/4)	69
第52図 宇瓦 SKH46～55 (S=1/4)	70
第53図 宇瓦出土位置図 SKH01A・01B (S=1/4000)	72
第54図 宇瓦出土位置図 SKH01C・02 (S=1/4000)	73
第55図 宇瓦出土位置図 SKH03・05 (S=1/4000)	74
第56図 宇瓦出土位置図 SKH06・07 (S=1/4000)	75
第57図 男瓦① (S=1/4)	81
第58図 男瓦② (S=1/4)	82
第59図 男瓦③ (S=1/4)	83
第60図 男瓦④ (S=1/4)	84
第61図 男瓦⑤ (S=1/4)	85
第62図 男瓦⑥ (S=1/4)	86
第63図 男瓦⑦ (S=1/4)	87
第64図 男瓦⑧ (S=1/4)	88
第65図 男瓦⑨ (S=1/4)	89
第66図 男瓦⑩ (S=1/4)	90
第67図 男瓦⑪ (S=1/4)	91
第68図 男瓦⑫ (S=1/4)	92
第69図 男瓦⑬ (S=1/4)	93
第70図 男瓦⑭ (S=1/4)	94
第71図 男瓦⑮ (S=1/4)	95
第72図 男瓦⑯ (S=1/4)	96
第73図 男瓦⑰ (S=1/4)	97
第74図 男瓦⑱ (S=1/4)	98

第75図 男瓦③ (S=1/4)	99
第76図 男瓦④ (S=1/4)	100
第77図 行基A (S=1/4)	101
第78図 行基B・C (S=1/4)	102
第79図 行基C・不明 (S=1/4)	103
第80図 女瓦 正格子A・B (S=1/4)	106
第81図 女瓦 正格子B・C (S=1/4)	107
第82図 女瓦 正格子D～H (S=1/4)	108
第83図 女瓦 正格子I～L (S=1/4)	109
第84図 女瓦 正格子L～O・斜格子A・B (S=1/4)	110
第85図 女瓦 斜格子B・C (S=1/4)	111
第86図 女瓦 斜格子C～F (S=1/4)	112
第87図 女瓦 斜格子F・G・長格子A (S=1/4)	113
第88図 女瓦 長格子A～C (S=1/4)	114
第89図 女瓦 長格子A・D (S=1/4)	115
第90図 女瓦 長格子D～G (S=1/4)	116
第91図 女瓦 長格子H・平行A・B (S=1/4)	117
第92図 女瓦 平行C (S=1/4)	118
第93図 女瓦 平行D・E (S=1/4)	121
第94図 女瓦 平行F・G (S=1/4)	122
第95図 女瓦 平行G・H (S=1/4)	123
第96図 女瓦 平行I～L (S=1/4)	124
第97図 女瓦 縄縦A・B (S=1/4)	125
第98図 女瓦 縄縦D・E (S=1/4)	126

第99図 女瓦 縄縦F・G (S=1/4)	127
第100図 女瓦 縄縦G・H (S=1/4)	128
第101図 女瓦 縄縦H (S=1/4)	130
第102図 女瓦 縄縦I (S=1/4)	131
第103図 女瓦 縄縦I・J (S=1/4)	132
第104図 女瓦 縄縦K (S=1/4)	133
第105図 女瓦 縄斜A・B (S=1/4)	134
第106図 女瓦 縄斜C～E (S=1/4)	135
第107図 女瓦 縄斜F・G・その他 (S=1/4)	136
第108図 女瓦 その他 (S=1/4)	137
第109図 鬼瓦① (S=1/4)	140
第110図 鬼瓦② (S=1/4)	141
第111図 鬼瓦③ (S=1/4)	142
第112図 熨斗瓦・隅木蓋瓦 (S=1/4)	143
第113図 面戸瓦・雁振瓦 (S=1/4)	144
第114図 鳥衾瓦 (S=1/4)	145
第115図 隅切瓦 (S=1/4)	146
第116図 埴① (S=1/4)	147
第117図 埴② (S=1/4)	148
第118図 埴③ (S=1/4)	149
第119図 埴④ (S=1/6)	150
第120図 文字瓦 (S=1/4)	152
第121図 その他の瓦埴類・石製品 (S=1/4)	153
第122図 胎土別・焼成状況相関図	155
第123図 唐招提寺・弘安寺出土瓦 (S=1/4)	159
第124図 讃岐国分僧寺瓦変遷図	160

挿 表 目 次

第1表 鏡瓦出土位置一覧表	50
第2表 字瓦出土位置一覧表	76
第3表 男瓦分類別出土量一覧表	80
第4表 男瓦玉縁長別出土量一覧表	80
第5表 男瓦玉縁幅別出土量一覧表	80
第6表 胎土・焼成等分類一覧表	154
遺物観察表	164
土器	165
鏡瓦	173
字瓦	177
男瓦	182
女瓦	185

道具瓦

1) 鬼瓦	189
2) 熨斗瓦	189
3) 隅木蓋瓦	190
4) 面斗瓦	190
5) 雁振瓦	190
6) 鳥衾瓦	190
7) 隅切瓦	190
埴	191
文字瓦	192
その他の瓦埴類	192
石製品	192

写真図版

- | | | | |
|------|----------------|-------|------------|
| 1 | 特別史跡讃岐国分寺跡出土軒瓦 | 7-6 | 鍍瓦 SKM40 |
| 2 | 特別史跡讃岐国分寺跡出土埴 | 7-7 | 鍍瓦 SKM41 |
| 3-1 | 鍍瓦 SKM01 | 7-8 | 鍍瓦 SKM48 |
| 3-2 | 鍍瓦 SKM02A | 7-9 | 鍍瓦 SKM49 |
| 3-3 | 鍍瓦 SKM03A | 7-10 | 鍍瓦 凹面 |
| 4-1 | 鍍瓦 SKM04 | 7-11 | 鍍瓦 凸面 |
| 4-2 | 鍍瓦 SKM05 | 8 | 府中・山内瓦窯跡出土 |
| 4-3 | 鍍瓦 SKM06 | 9-1 | 字瓦 SKH01A |
| 4-4 | 鍍瓦 SKM07 | 9-2 | 字瓦 SKH01B |
| 4-5 | 鍍瓦 SKM08 | 9-3 | 字瓦 SKH01C |
| 4-6 | 鍍瓦 SKM09 | 10-1 | 字瓦 SKH01C |
| 4-7 | 鍍瓦 SKM10A | 10-2 | 字瓦 SKH01D |
| 4-8 | 鍍瓦 SKM11 | 10-3 | 字瓦 SKH02 |
| 5-1 | 鍍瓦 SKM12 | 10-4 | 字瓦 SKH03 |
| 5-2 | 鍍瓦 SKM13 | 10-5 | 字瓦 SKH04 |
| 5-3 | 鍍瓦 SKM14 | 10-6 | 字瓦 SKH05A |
| 5-4 | 鍍瓦 SKM15 | 10-7 | 字瓦 SKH05B |
| 5-5 | 鍍瓦 SKM16 | 11-1 | 字瓦 SKH06 |
| 5-6 | 鍍瓦 SKM17 | 11-2 | 字瓦 SKH07 |
| 5-7 | 鍍瓦 SKM18 | 11-3 | 字瓦 SKH08 |
| 5-8 | 鍍瓦 SKM19 | 11-4 | 字瓦 SKH09 |
| 5-9 | 鍍瓦 SKM20 | 11-5 | 字瓦 SKH10 |
| 5-10 | 鍍瓦 SKM21A | 11-6 | 字瓦 SKH11A |
| 5-11 | 鍍瓦 SKM21R | 11-7 | 字瓦 SKH12 |
| 6-1 | 鍍瓦 SKM22 | 11-8 | 字瓦 SKH13 |
| 6-2 | 鍍瓦 SKM23 | 11-9 | 字瓦 SKH15 |
| 6-3 | 鍍瓦 SKM24A | 12-1 | 字瓦 SKH16 |
| 6-4 | 鍍瓦 SKM24B | 12-2 | 字瓦 SKH17 |
| 6-5 | 鍍瓦 SKM25 | 12-3 | 字瓦 SKH18 |
| 6-6 | 鍍瓦 SKM27 | 12-4 | 字瓦 SKH19 |
| 6-7 | 鍍瓦 SKM28 | 12-5 | 字瓦 SKH20 |
| 6-8 | 鍍瓦 SKM29 | 12-6 | 字瓦 SKH21 |
| 6-9 | 鍍瓦 SKM30 | 12-7 | 字瓦 SKH22 |
| 6-10 | 鍍瓦 SKM31 | 12-8 | 字瓦 SKH23 |
| 6-11 | 鍍瓦 SKM32 | 12-9 | 字瓦 SKH24 |
| 6-12 | 鍍瓦 SKM33 | 12-10 | 字瓦 SKH25 |
| 6-13 | 鍍瓦 SKM34 | 12-11 | 字瓦 SKH26 |
| 7-1 | 鍍瓦 SKM35 | 12-12 | 字瓦 SKH27 |
| 7-2 | 鍍瓦 SKM36 | 12-13 | 字瓦 SKH30 |
| 7-3 | 鍍瓦 SKM37 | 13-1 | 字瓦 SKH33 |
| 7-4 | 鍍瓦 SKM38 | 13-2 | 字瓦 SKH35 |
| 7-5 | 鍍瓦 SKM39 | 13-3 | 字瓦 SKH38 |

- 13-4 字瓦 SKH39
 13-5 字瓦 SKH40
 13-6 字瓦 SKH41
 13-7 字瓦 SKH42
 13-8 字瓦 SKH43
 13-9 字瓦 SKH44
 13-10 字瓦 SKH45
 13-11 字瓦 SKH47
 13-12 字瓦 SKH48
 13-13 字瓦 SKH55
 14-1 正格子A
 14-2 正格子B
 14-3 正格子B
 14-4 正格子C
 14-5 正格子D
 14-6 正格子E
 14-7 正格子F
 14-8 正格子G
 15-1 正格子H
 15-2 正格子I
 15-3 正格子J
 15-4 正格子K
 15-5 正格子M
 15-6 正格子N
 15-7 正格子O
 15-8 斜格子A
 16-1 斜格子B
 16-2 斜格子B 傷あり
 16-3 斜格子C
 16-4 斜格子D
 16-5 斜格子E
 16-6 斜格子F
 16-7 斜格子G
 16-8 長格子A
 17-1 長格子B
 17-2 長格子D
 17-3 長格子E
 17-4 長格子F
 17-5 長格子G
 17-6 長格子H
 18-1 平行A
 18-2 平行C
 18-3 平行E
 18-4 平行F
 18-5 平行G
 18-6 平行H
 18-7 平行I
 18-8 平行J
 18-9 平行K
 19-1 女瓦側面 布目痕とバリ状の痕跡
 19-2 女瓦凹面 布目痕・糸切り痕・模骨痕・
 模骨止め痕
 19-3 女瓦凸面 種子付着
 20 鬼瓦A
 21-1 鬼瓦B
 21-2 鬼瓦B
 22-1 熨斗瓦
 22-2 隅木蓋瓦
 22-3 鳥衾瓦
 22-4 隅切り瓦
 23-1 塼 台形
 23-2 塼 長方形
 23-3 塼 凹面側
 23-4 塼 凸面側
 24-1 塼 「キ」
 24-2 塼 「」ろ石ノ心」?
 24-3 塼 「一千」
 24-4 塼 「山■」?
 24-5 塼 「水」?
 24-6 塼 布目匠痕
 25-1 文字瓦 「イ大瓦」
 25-2 文字瓦 「」十歳」
 25-3 文字瓦 「大■」
 25-4 文字瓦 「●●」
 25-5 文字瓦 「一」
 25-6 文字瓦 「国分金光明」
 26-1 瓦製品
 26-2 瓦製品
 26-3 唐居敷座に加工した石製品
 27-1 僧房跡東第二房南側唐屋敷座（台形塼）
 と切石（南から）
 27-2 僧房内排水溝 SD6005 瓦使用状況①
 （北から）
 28-1 僧房基壇外装瓦使用状況（北から）
 28-2 僧房内排水溝 SD6005 瓦使用状況②
 （南から）

第1章 整理作業について

第1節 出土遺物の調査時の取り上げと整理時の認識と作業の方法

本書は、昭和58年度から平成3年度にかけて実施した特別史跡讃岐国分寺跡の保存整備事業に伴う発掘調査で出土した遺物で前回刊行時（2019年刊行『特別史跡讃岐国分寺跡～遺物編①～』）に掲載できなかった土器と瓦埴類等について報告するものである。

前冊でも記述したが、調査時の遺物の取り上げ方法について改めて記述する。出土した遺物は基本的にグリッド別に取り上げられ、遺構出土のものに関しても同様な手続きで取り上げがなされているため、グリッド間に横断する遺構は別に遺物が取り上げられている。また、遺構番号が調査時に付与されていないため、同一グリッド内に同種の遺構が確認されている場合、帰属遺構が特定できないものが認められ、一方、グリッドを横断する遺構は、複数の取り上げを統合する必要がある。

これらの出土遺物の整理作業については、既報告（2018年刊行『特別史跡讃岐国分寺跡～遺構編～』）の年度別に実施した。

まず、土器に関しては既報告（2019年刊行・遺物編①～）と同様に記された注記（調査区、グリッド、出土地情報（層位、遺構、日付））ごとで選別作業を実施した。注記情報別に時期を示す遺物（最も新しい時期のもの）を選別した後、同一グリッドや遺構別に突合し、さらに時期を示す遺物の抽出を実施して、報告している。注記等の出土情報については、調査後の時間の経過等によって判読不可となったり、誤注記（該当グリッドに該当遺構が存在しない場合や調査区外となるもの）による場所の特定が難しいものなどが多数認められ、残された注記の表記（グリッド名や遺構名）から判読・解釈し、出土箇所・遺構を推定して実施しているものもある点は明記しておく。特に、この作業が必要であったのは、昭和60年度の僧房跡で、個別遺構として本書で報告するものの中にも遺構の場所が特定できないものや、複数の候補がある場合等があり、後者についてはグリッド名をもとに遺構想定箇所を破線にて表現することとした。なお、遺物観察表における調査区等の表記については、調査時のものと、本報告で付与した新遺構番号を併記することとし、調査時の情報を残

すようにしている。

本書で報告する遺構出土の遺物の出土状況に関する記録（平面図、断面図、写真）は残されていないことから、これまで編年資料等として使用されてきたものもあるが、所見は記載していない。混入等の判断も難しく、混入の可能性の遺物も掲載するとともに、多くの遺構で、やや幅のある抽出となっている。また、概報などで既に報告されている遺構出土についても、再度、上記の作業をやり直しして時期比定等を行っている。

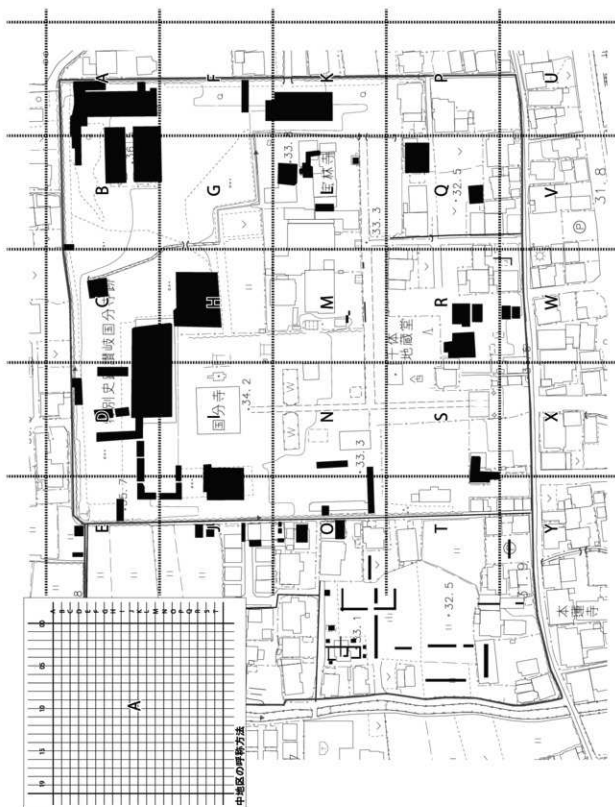
報告に当たっては、遺構編と別冊となったため、再度、遺構全体図のみを掲載し、遺構名を表示している。なお、既述のとおり、厳密な対照ができなかった遺構については、破線で範囲を示しており、その範囲の遺構が候補として考えられる。本来は上記のような遺物については報告すべきではないかもしれないが、今後の調査に備えて、可能な限り情報を提示することを意図したものである。

一連の調査では、覆土などから多くの完形品や半完形品が出土しているが、遺構や遺跡形成等の検討に必要なもののみを掲載している。ただし、土師質土器、須恵器のうち、胎土、器形の点で特殊な器種、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器等の搬入品については、出土状況を問わず、報告している。図化できない資料についても本書報告遺物とともに抽出のみは行っている。

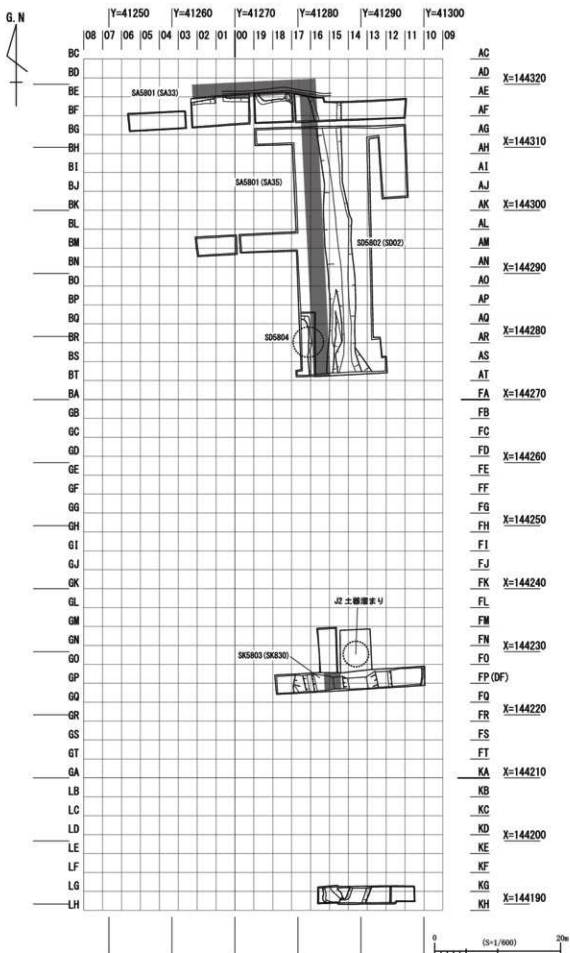
本書で報告する土器類の遺物番号は、出土年度が分かるように、昭和58（1983）年度出土遺物は西暦の下二桁の数字を冒頭に使用し、83□□□という5ケタの番号で表現している。遺物番号は既報告からの連番で付与している。遺物の記載については、特徴的な器種や製作技法、遺構の時期について、本文中で報告し、基本的には、個別の遺物については巻末の遺物観察表において報告することとする。本報告では遺構上面の堆積層（遺物包含層等）の年代を示す遺物（土器）について掲載する。

以下、年度別に遺構出土等の遺物について詳述していくが、本書の報告では、個別に引用を示していないが、土器の器種や呼称、年代観等に関する記述については巻末に参考文献をもとに行っていることを明記しておく。

瓦埴類の整理作業は発掘調査時から主に軒瓦を中心



第1図 調査区グリッド名



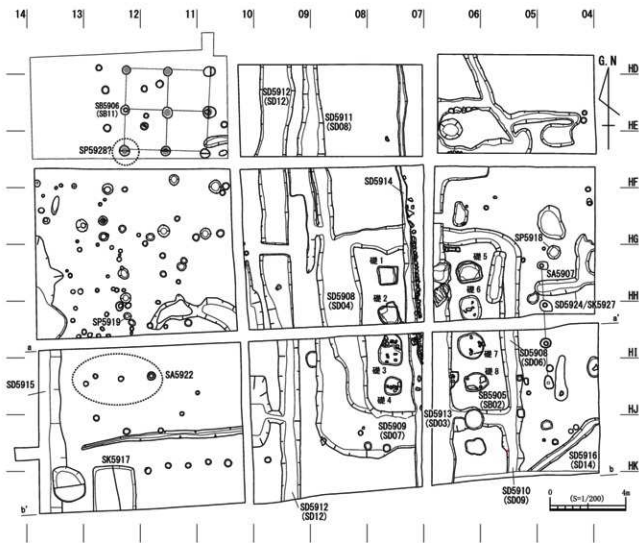
第2図 昭和58年度調査遺構図 (S=1/600)

作業を系統的に実施し、分類、実測、写真撮影等を行った。

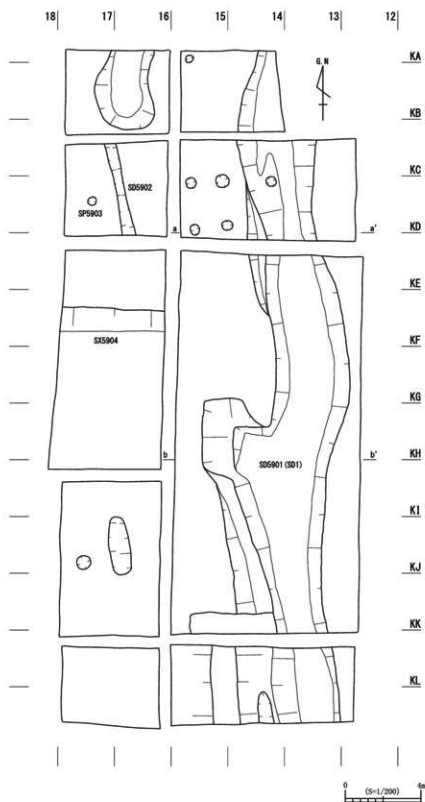
瓦埵類の分類作業でも土器類と同様に注記（調査区、グリッド、出土地情報（層位、遺構、日付））ごとで選別作業を行った上で、鎧瓦・宇瓦は文様ごとに、女瓦は叩き貝ごと、男瓦は法量ごとに分類した。遺物の取り上げ状況等の問題点は土器類と同様である。しかし、出土量が膨大であったため、器種・年度別に分類の際に女瓦の縄叩きのもの、男瓦は残存率の良いものをピックアップした後叩き貝等の分析を実施した。叩き貝等の型式別の分類作業は遺物の残存状況を基準に選別作業を行っているため、総点数を対象とした分類作業を行えなかったものがある。そのほか、軒瓦類、女瓦の格子・平行叩きのもの、道具瓦類は出土遺物全点を対象に分類作業を行っている。

分類作業を行った上で、報告書には各型式ごとに代表的なものを掲載している。報告書に掲載できず、型式ごとの詳細な技法等について判明できる事項はその都度記述している。技法や調整等は可能な限り、実測図や拓本で示しているが、図化が困難なものはその都度記述している。また、型式ごとの数量等の割合は膨大な出土量であるため、そのすべての提示はできないが、可能な限り、記述や表化したものを提示している。型式番号は発掘調査概報時と同様の番号を表記し、新型式のものは連番で番号を付与する。番号は発見した順であり、必ずしも年代順になっていないのでご容赦願いたい。

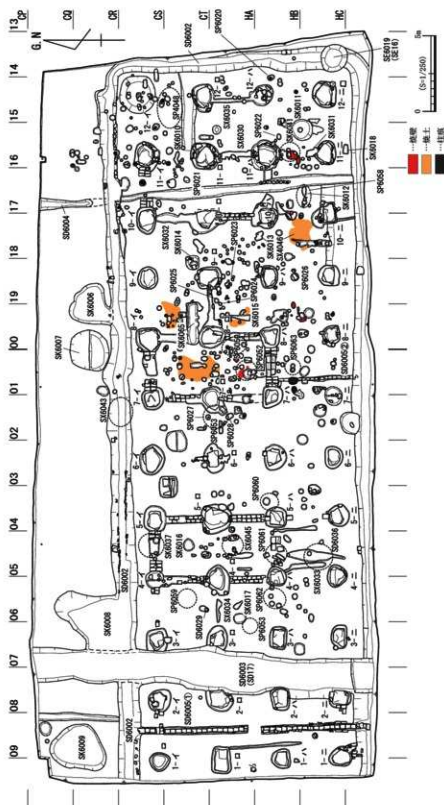
以下、瓦埵類の技法や年代等に関する記述は巻末の参考文献をもとに行っているので明記しておく。



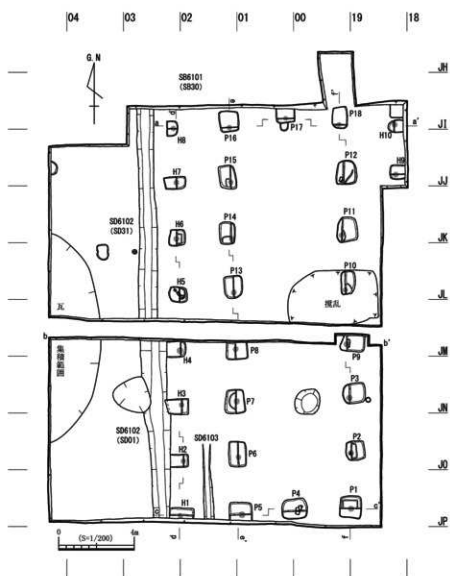
第3図 昭和59年度調査遺構図① (S=1/200)



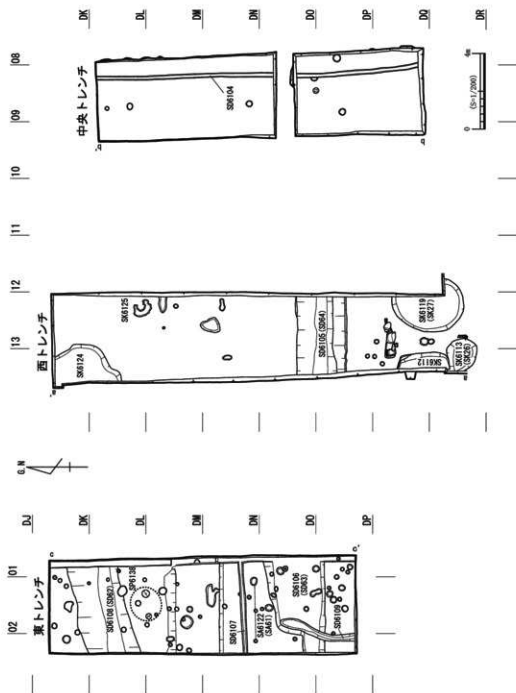
第4図 昭和59年度調査遺構図② (S=1/200)



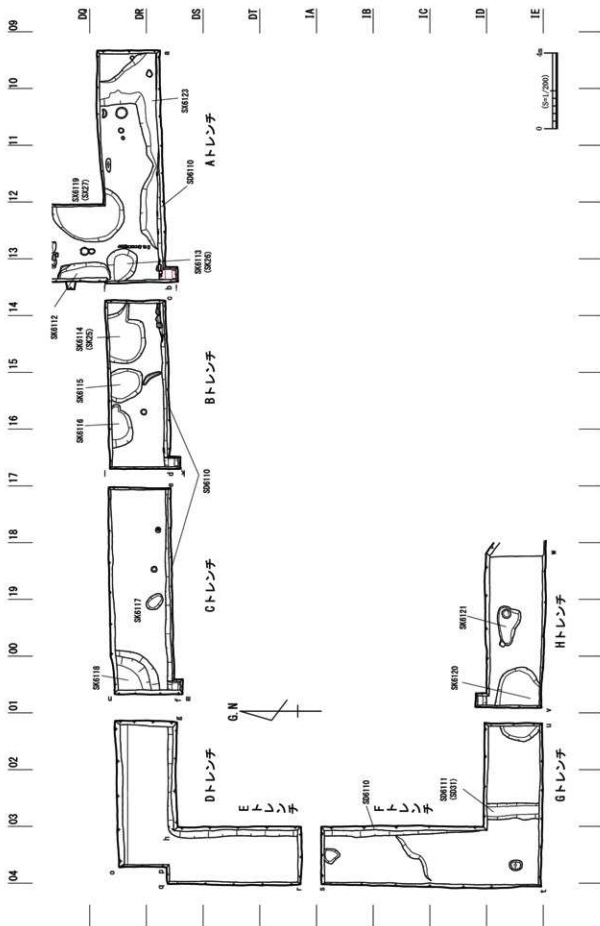
第5図 昭和60年度調査遺構図 (S=1/250)



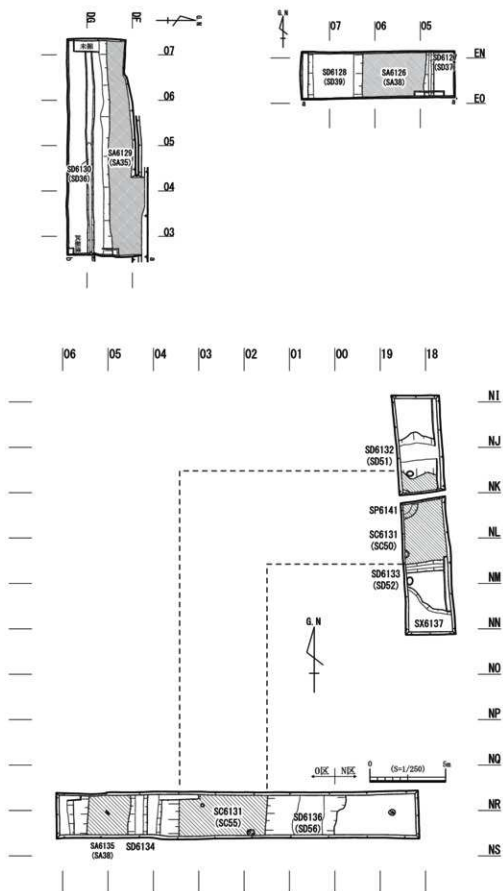
第6図 講堂跡西方地区 (S=1/200)



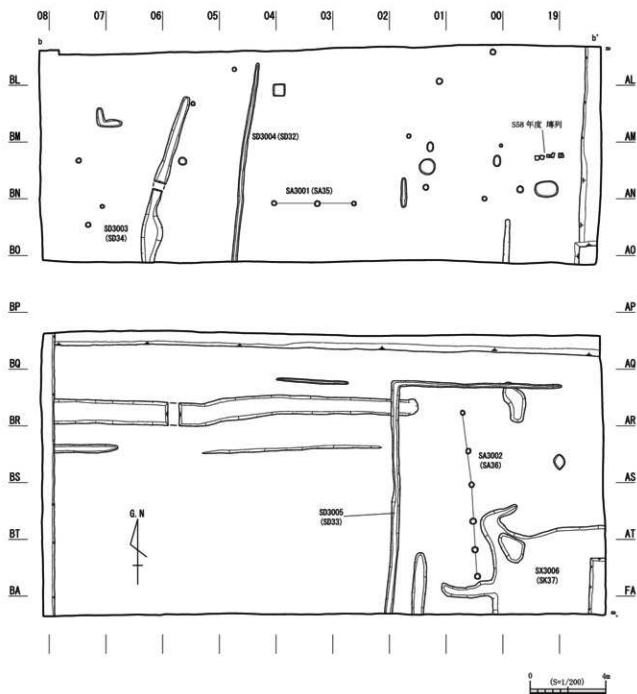
第7図 僧房跡北側地区 (S=1/200)



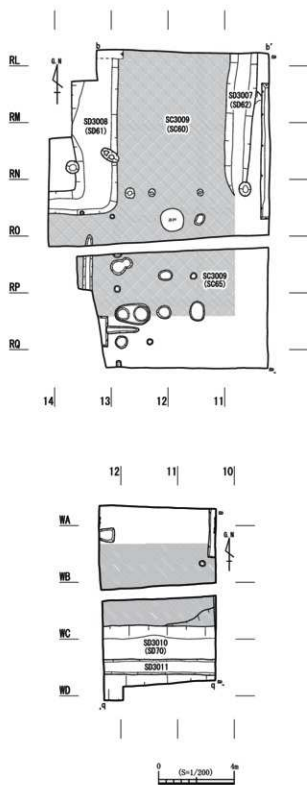
第8図 僧房跡覆屋排水地区 (S=1/200)



第9図 北面・西面築地堀跡地区・金堂跡西方地区 (S=1/250)



第 10 図 平成 3 年度調査区寺域北東地区 (S=1/200)



第 11 図 平成 3 年度調査区塔跡南東地区 (S=1/200)

第2章 土器類

第1節 土器類

本報告は、『特別史跡讃岐国分寺跡』1遺物編①(以下、既報告という)に引き続き、各調査区の堆積土土器を報告するものである。既報告において一部報告済であるが、本報告は、堆積土の年代を示す資料を報告することを目的としている。ただし、報告遺物の中には希少品やまとまって出土したもの、完形品等の点掲載しているものもある。

調査時の取り上げに当たってはグリッドごとで行われているが、報告に当たっては、同一層で最も新しい遺物を抽出している。取り上げ層位については、基本的には調査時の記載に従って行っており、実際の報告層位と一致しないものや該当層位が不明なものもある。そのため、層位名は異なるが可能な限り報告しており、今後の調査・研究のため、参考資料としての位置づけが強い点は否めないが、寺院の長い歴史を考える上では、こうした資料も重要になることから、報告を行っている。既報告の出土遺物の年代からも明らかであるが、基本的には堆積土出土のものは16世紀末以降のものとなっており、一部幕末以降から現代に至るものもある。

なお、遺物番号は、年度別に既報告の遺物番号に継続して付与している。

【81年度】

83年度調査の予備調査の出土遺物である。

2トレンチ溝

81001は弥生土器の鉢で、口縁部周辺は指押ええを行った後、口縁部をヨコナデで仕上げる。

【83年度】

第1層

83171は灰釉陶器の碗である。時期は、堆積層の時期を示すものではない。

第2層

83172～73179は土師質土器である。83172・83173は土師質土器の御厩系焙烙の口縁部片である。83174は播鉢の口縁部片である。83175・83176は鉢で、口縁部の形状が内側につまみ出すものと、平坦に仕上げるものである。83177は火鉢状の口縁部片で、隅丸形状の穿孔が認められる。83178・

83179は井側若しくは肥溜めなどに使用される大型品である。83178は取っ手状の突起を有する。83179は口唇部が肥厚し、口縁部よりやや下にヘラ描きによる斜格子文を施す。83180～83188は陶器である。83180は備前焼(須恵器)の播鉢で、端部を平坦にし、内面側にわずかにつまみ出すもので、14世紀中頃である。83181・83182は、埴・明石系播鉢で直立する口縁端部で、外面に3条の凹線と口唇部内面を凹ますものである。83183は施釉陶器鉢、83184は急須の蓋、83185は蓋である。83186は施釉陶器の火入れと考えられる。83187は京・信楽系陶器碗で、外面は、高台内側には「小松 吉」というスタンプが施される。83188は瀬戸・美濃系施釉陶器の皿で、内面見込み部に片彫りによる装飾を施す。高台内面は露体である。83189～83193は肥前系磁器である。83189は仏飯器、83190～83193は碗である。83193は内面見込みに重ね焼きの痕跡が残る。83194・83195は大型の皿若しくは鉢である。83196～83198は肥前系の皿で、高台内面は蛇の目凹形で、83197は菊花皿である。83198は重ね焼きの痕跡が見込み部に残る。83199は表面が瓦質状を呈する脚部片である。

以上から堆積層の時期は83181等から18世紀末から19世紀頃と考えられる。

第2層疎層

83200は備前焼の壺の口縁部片である。

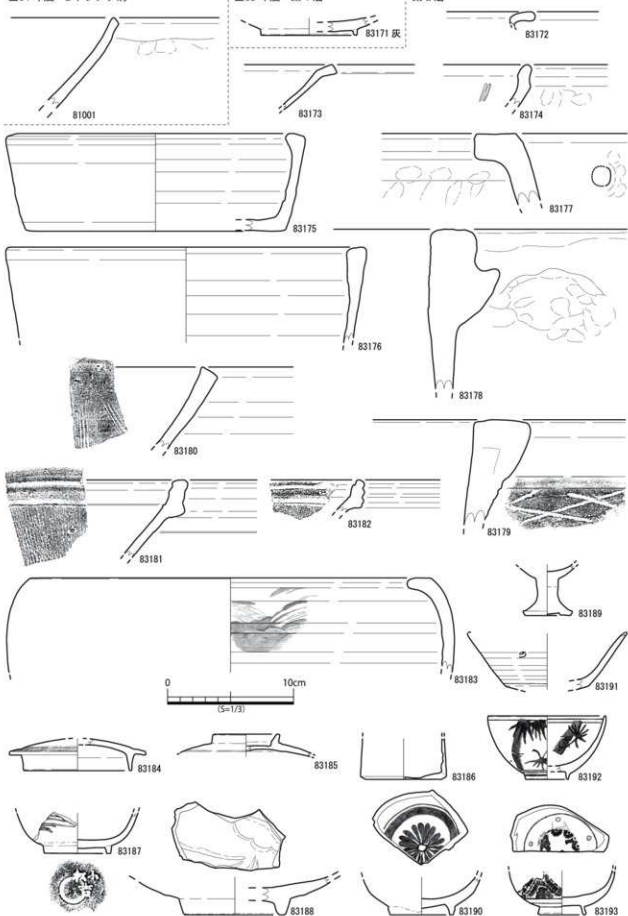
第3層

83201は弥生土器の甕で、外面の凹線文は顕著ではなく、中期後葉と考えられる。83202～83208は土師質土器で、83202・83203は杯若しくは皿の破片である。特に後者は口縁部端部を外反させる。83204・83205は碗と碗の高台である。83206は土師質土器の内耳のつく足釜である。83207・83209は井側若しくは肥溜めなどに使用されるものの口縁部片である。83208は土師質土器の鉢若しくは、コンロなどの大型品で、外面は丁寧な磨き調整で仕上げている。83210～83212は須恵器で、83210は小型の短頸壺、83211は蓋、83212は高台付の皿若しくは鉢片である。83213は備前焼の播鉢である。すり目の磨滅が著しい。83214～83217は施釉陶器で、83214・83215は碗で、83216・83217は鉢である。83218～83220は肥前系磁器碗である。83221は

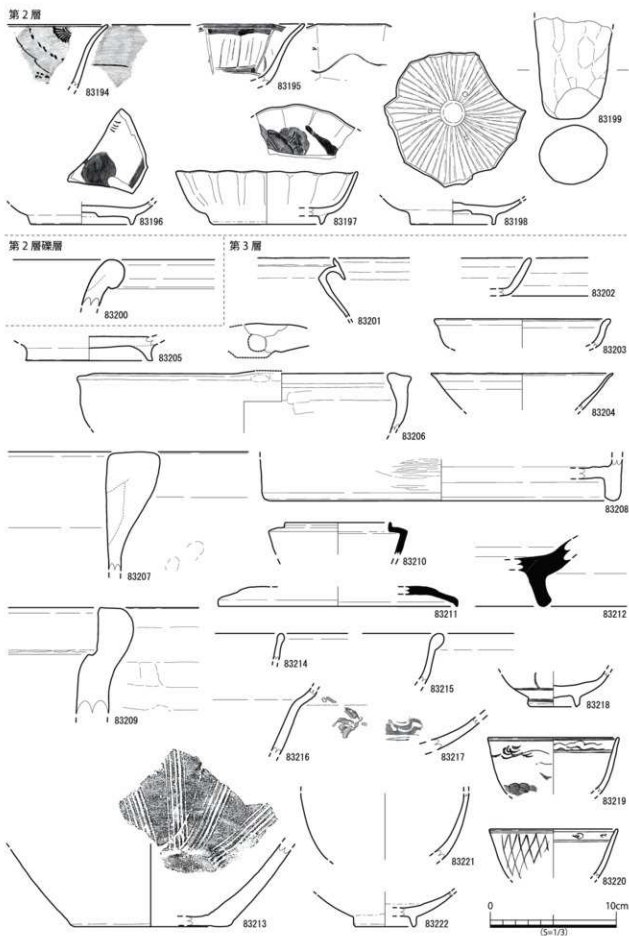
■81年度 2トレンチ溝

■83年度 第1層

第2層



第12図 81・83年度 出土遺物 (S=1/3)



第13図 83年度出土遺物② (S=1/3)

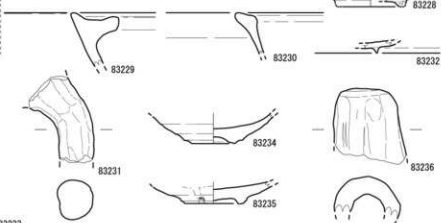
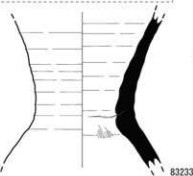
第3層礫層



第4層



第3層礫混入



第5層



第5層築地から落ちた瓦



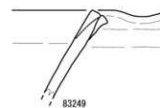
第12層上面



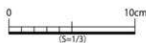
赤褐色灰色層



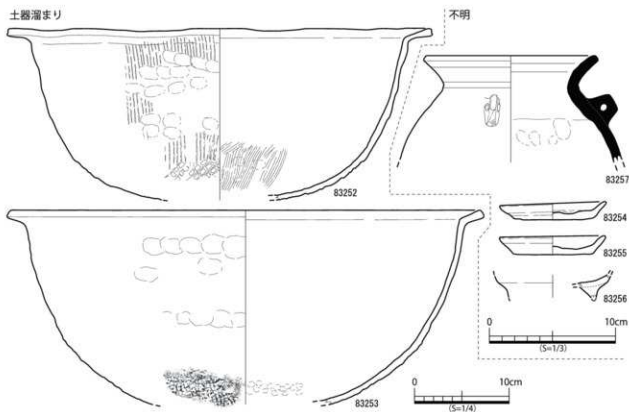
第6層



淡灰白粘質土



第14図 83年度出土遺物③ (S=1/3)



第15図 83年度出土遺物④ (S=1/3・1/4)

肥前系の青磁碗である。83222は磁器碗で、内面見込み部は輪状に軸剥ぎを行い、高台は露胎である。

以上から堆積層の時期は83218・83219等から18世紀末から19世紀頃と考えられる。

第3層礫層

83223は土師質土器の皿である。形状から堆積層の時期は13世紀以降と考えられる。

第3層礫混入

83224は瓦器碗である。高台が断面三角形を呈する。体部は指押さえによって整形している。

以上から堆積層の時期は13世紀以降である。

第4層

83225～83231は土師質土器で、83225・83226は小皿で、83227は脚付付杯である。83228は碗の高台部片である。83229は土釜、83230は足釜、83231は足釜の脚部片である。83232は瓦器碗である。83233は須恵器壺で、十瓶山産と考えられる。83234・83235は肥前系陶器碗・皿である。83236は土製品で、ふいごの羽口と考えられる。外面は面取り状に整形している。

83230や83234から堆積層の時期は17世紀前半以降である。

第5層

83237は土師質土器の小皿である。83238は土師

質土器の搦鉢である。83239は須恵器の杯蓋である。83240は黒色土器A類の碗である。83241は瓦質土器の火鉢などの器種と考えられる。

83238から堆積層の時期は17世紀以降と考えられる。

第5層築地から落ちた瓦

83242は土師質土器の大型の鉢と考えられるが、口縁部片で詳細は不明である。堆積層の時期は19世紀以降と考えられる。混入の可能性もある。

第6層

83243・83244は土師質土器である。83243は杯で灯明に使用されている。83244は土釜で、内面側に口縁端部を大きくつまみ出す。83245は瓦質土器の片口捏鉢である。

83244や83245から堆積層の時期は12世紀後半以降と考えられる。

第12層上面

83246は土師質土器碗で、内面見込みに煤が付着する。堆積層の時期は13世紀以降と考えられる。

赤褐色灰色層

83247は須恵器碗の高台部片である。83248は瓦器碗、83249は片口の鉢である。

以上の遺物から堆積層の時期は13世紀以降と考えられる。

淡灰白粘質土

83250・83251は土師質土器の杯で、いずれもヘラ切りで、これから堆積層の時期は13世紀頃である。

土器溜まり

『特別史跡讃岐国分寺跡』1遺物編①での「2-3」の土器溜りの報告漏れである。83252・83253は土師質土器の土鍋である。83252は外面に粘土帯接合の指押さきが顕著で、底部周辺は丸底化に伴う格子目叩きが残る。外面は粗い刷毛目調整で仕上げている。内面は底部周辺のみ、粗い刷毛目調整で仕上げ、基本的にはナデ調整で仕上げる。83253も、83252と同様な製作技法であるが、外面の粗い刷毛目が顕著でない。既報告と併せて、13世紀後半以降と考えられる。不明

83254～83256は土師質土器である。83254・83255は小皿で、83256は高台付杯と考えられる。83257は須恵器壺で、四耳壺と考えられる。

【堆積層の形成】

以上の出土遺物から、築地崩周辺の堆積土は13世紀以降に形成されたと考えられる。土器溜まりの時期から考えると13世紀後半までに東限の大溝が埋められ、その後、土器廃棄が行われたと考えられる。土器の表面があまり磨滅していないことから、土器廃棄後には土が被覆していたものと考えられ、築地崩周辺は堆積が進んでいたと考えられる。14～16世紀の遺物が希薄であり、第2～5層出土遺物に17～19世

紀の遺物を含んでおり、江戸時代に周辺が農地等と整地されたことが考えられる。

【84年度】

東大門推定地区

灰褐色粘質土

84202は篠産須恵器の鉢で、口唇部を肥厚する。

以上から堆積層の時期は11世紀以降と考えられる。

灰色粘質土

84203・84204は堺・明石系の播鉢である。

84205・84206は肥前系磁器の椀である。84207・84208は瓦質土器である。84207・84208は火鉢状風炉の一種と考えられる。いずれも外面はミガキ調整によって丁寧に仕上げる。内面は規則正しい斜方向若しくは横方向の粗い刷毛目調整で仕上げ、口縁部周辺は丁寧にヨコナデ調整で仕上げる。外底面にも同様な痕跡が認められ、轆轤の回転作用を利用した調整と考えられる。84209は形状が異なるが、同様なものと考えられる。

以上から堆積層の時期は19世紀以降と考えられる。

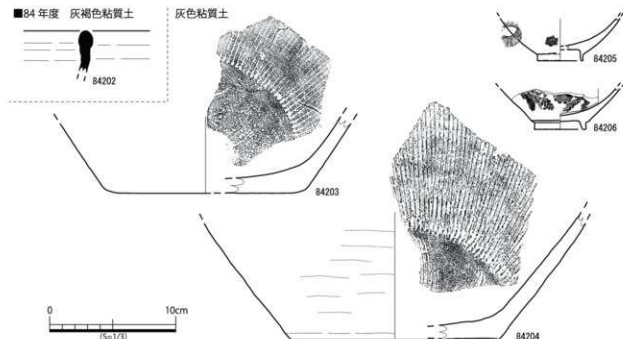
最下層

84210は肥前系磁器の紅猪口と考えられる。

以上から堆積層の時期は18世紀後半以降と考えられる。

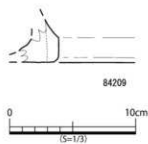
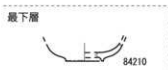
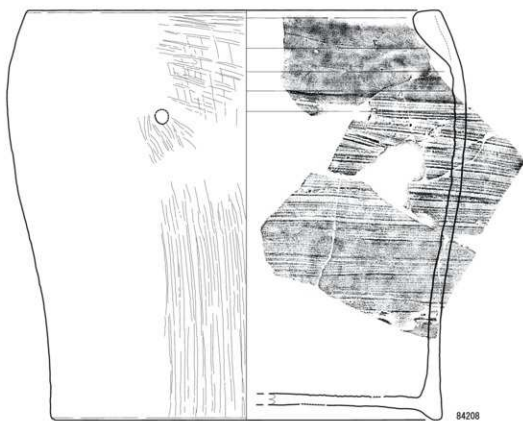
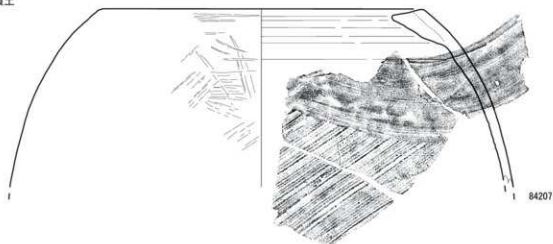
【堆積層の形成】

調査区の土層との対応関係が不明であるが、2018



第16図 84年度 出土遺物① (S=1/3)

灰色粘質土



第 17 図 84 年度出土遺物② (S=1/3)

年報告の第28図b-b'の第4層にあたるのであれば、溝埋没後に19世紀頃に廃棄土坑等が形成された可能性も考えられる。いずれにしても詳細は不明である。

【85年度】

僧房跡地区

灰茶色粘質土

85718～85721は土師質土器の杯である。口径は9～10cm程度である。胎土焼成は良好で、85721は灯明皿である。12世紀以降と考えられる。

黒褐色土

85722は施釉陶器片で、外面に緑釉状の釉薬が施される。外底部は回転系切りである。

第2層

85723～85776は土師質土器である。85723は小皿で、口径6.9cm、高さ1.1cm程度である。85724～85743は小皿で、口径10～11cm、器高2cm弱と2cm強に分かれる。85744～85760は杯で、口径10.5～11.5cm、器高が約3cm程度のものと口径12.5～13.5cm、器高3～4cmのものがある。サイズ及び形態、底部形状等でヴァリエーションがあり、10世紀後半から12世紀の時期幅がある。85761は椀状を呈する杯で、底部が円盤状高台を呈することが特徴である。85728、85730、85731、85736、85737、85741、85751、85758、85759、85760、85762は灯明皿である。85763は蓋状を呈する。85764～85768は台付杯で、杯部と脚部の形状にヴァリエーションが認められる。85767は灯明に使用されている。85769は深い椀状を呈する杯で、底部外面は静止系切りである。精良な胎土を使用している。85770は口縁部がくの字を呈する甕若しくは短頸甕である。85771は焙烙の口縁部片である。85772は掬鉢で、85773は甕の口縁部片で、85774は十能の取っ手部分である。85775は火鉢と考えられる。85776は高杯の脚部と考えられる。85777～85785は須恵器である。85777は小型の椀で、形態的には珍しい。煤が付着しており、灯明皿として使用されている。85778は杯、85779は鉢形土器、85780・85781は甕で、いずれも肩部にある小型の口縁部は確認できていないが、突帯がめぐることから、多口甕と考えられる。85782～85785は硯で、85784は風字硯で、それ以外は猿面硯である。猿面硯は内面に青海波文が残る。85782は硯ではない可能性があり、『特別史跡讃岐国分寺跡』I遺物編①85547～85549と同じ

ものである可能性がある。85786～85789は黒色土器で、85786・85787はA類の椀である。85788が耳皿、85789がB類の小皿である。85790は瓦質土器で、奈良火鉢の中の浅鉢と考えられる。口縁部から肩部にかけて2条の突帯を廻らし、突帯の間に文様を施す。外面は体部最大径に横方向の磨き調整を施し、体部下半は縦方向の磨き調整を施す。内面の口縁部周辺はヨコナデ調整で仕上げ、最大径の内面は横方向の刷毛目調整で仕上げる。15世紀頃である。85791～85798は陶器である。85791は備前焼の灯明皿、85792は施釉陶器の徳利若しくは瓶である。85793は備前焼の徳利である。85794は備前焼の壺である。85795～85798は施釉陶器の椀である。85795は京・信楽系の椀の高台で、「寶」というスタンプが認められる。85799～85802は磁器で、85799は紅猪口、85800は肥前系磁器の椀、85801は椀、85802は白磁椀若しくは鉢である。外面下半は露胎である。85803・85804は緑釉陶器で、いずれも京都近郊産である。85805は土製品で、脚部若しくは支脚状のものと考えられる。外面は指押で形状を整形している。85806は土製品で、脚状を呈する。85807は甕の一部である。S9はサヌカイトのスクレイパーと考えられる。

85796～85801から堆積層の時期は18世紀前半以降と考えられる。

畦第2層

85808は黒色土器A類の椀である。外面は磨き調整で仕上げる。85809は須恵器の風字硯と考えられる。

以上から10世紀以降と考えられるが、堆積層の時期を示すものではない。

第2・3層

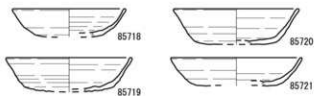
85810は土師質土器の杯である。

第3層

85811～85814は土師質土器である。85811は小皿、85812は台付杯、85813は掬鉢、85814は取手付甕である。85815は須恵器の口縁部片である。85816は京・信楽系陶器の丸椀、85817～85819は磁器で、85817は椀、85818・85819は皿である。85820は脚状を呈する土製品である。85821は土製品で、円形状に加工されている。

85816・85817等から堆積層の時期は18世紀以降と考えられる。

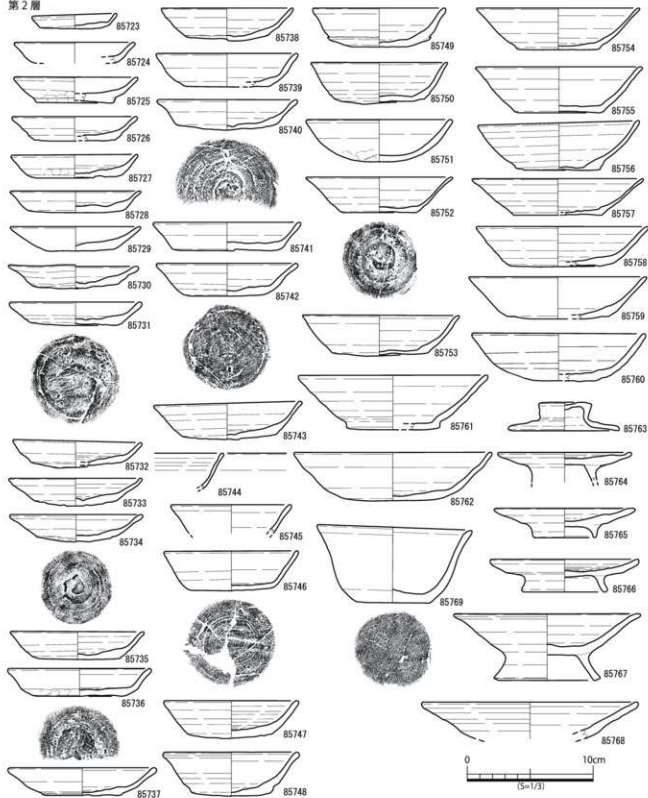
■85年度 灰茶色粘質土



■黒褐色土

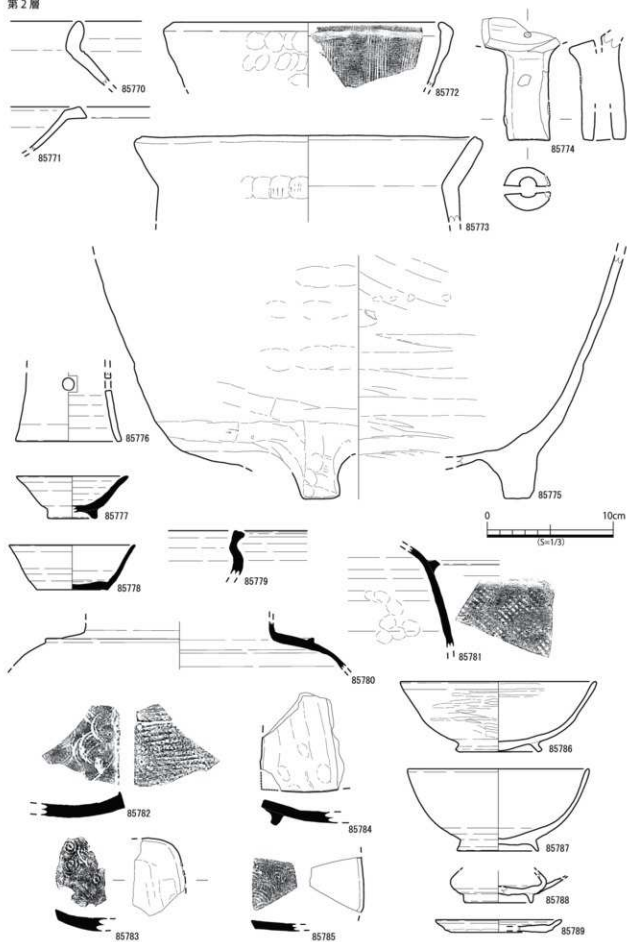


第2層



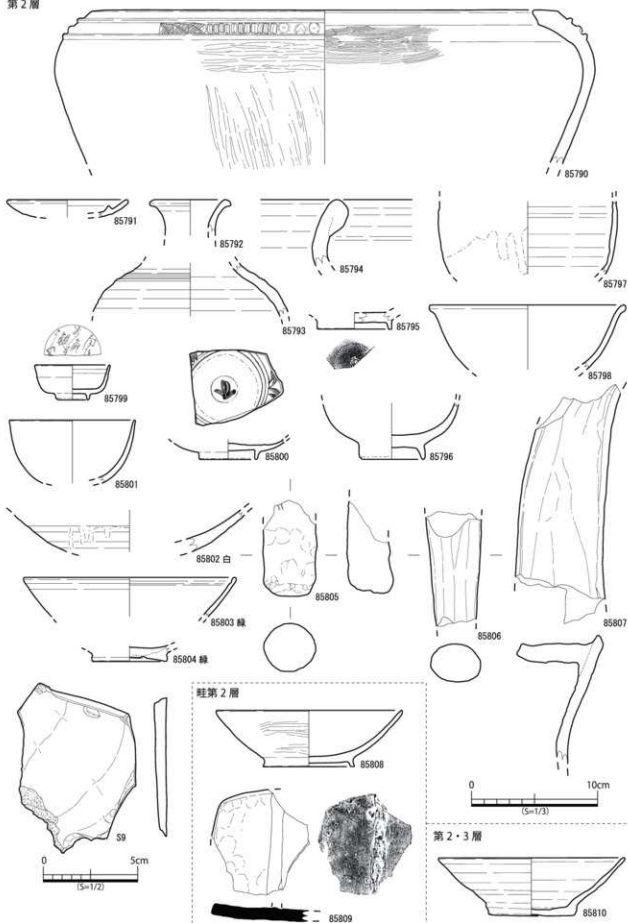
第18図 85年度出土遺物① (S=1/3)

第2層



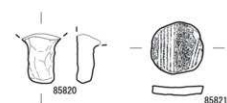
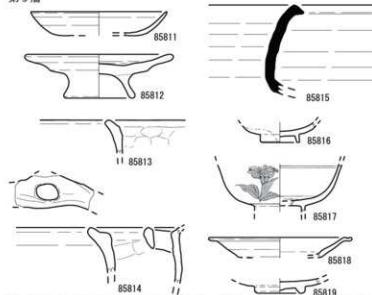
第19図 85年度出土遺物② (S=1/3)

第2層

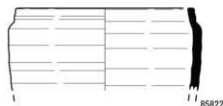


第20図 85年度出土遺物③ (S=1/3・1/2)

第3層



第4層



地山直上



第21図 85年度出土遺物④ (S=1/3)

第4層

85822は須恵質の器種不明品である。時期も不明である。

地山直上

85823・85824は須恵器の杯である。これから9世紀後半と考えられる。

【堆積層の形成】

既報告の井戸SE6019の存在から、13世紀後半には僧房は存在しておらず、新たな土地利用がなされたものと考えられる。調査区の堆積状況は、僧房跡の第2・3層出土遺物から、少なくとも18世紀以降には、礎石が見えなくなってしまっていたものと考えられる。

【86年度】

講堂跡西方地区

黒褐色土

86381～86386は須恵器で、86381は蓋、86382～86385は杯、86386は皿若しくは盤である。

86387は畿内系土師器の皿と考えられる。

第2層

86388は須恵器の杯である。

僧房跡北方地区・僧房覆屋排水路地区

86389は須恵質の猿面硯である。時期は不明である。

第2層

86390～86394は土師質土器である。86390・86391は杯である。86392は小型の甕若しくは鉢である。86393は鉢と考えられ、外面は粗い刷毛目仕上げ。86394は播鉢である。86395は須恵器の鉢である。86396は黒色土器B類の杯と考えられる。86397～86399は陶器である。86397は大谷焼の灯明皿、86398は備前焼の徳利である。86399は施釉陶器の椀である。S10はサヌカイト製の石庖丁である。

86397から堆積層の時期は19世紀以降と考えられる。

第3層暗褐色土

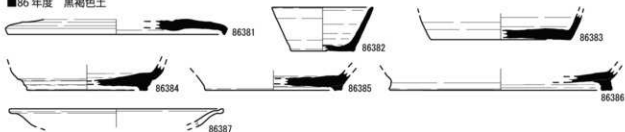
86400は土師質土器で、甕若しくは鍋の取っ手である。86401は黒色土器A類の椀で、86402は磁器端反椀である。

86402から堆積層の時期は19世紀以降と考えられる。

第3層灰色粘質土

86403は土師質土器の捏鉢である。

■86年度 黒褐色土



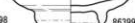
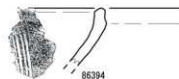
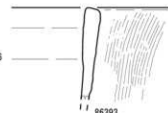
第2層



第2層



僧房跡



第3層 暗褐色土



第3層 灰色粘質土



第2層



第2層 灰褐色土

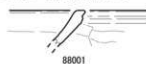


第4層 整地層

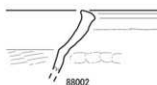


第22図 86年度出土遺物 (S=1/3・1/2)

■88年度 山波南北トレンチ



88001

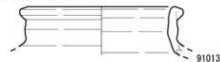


88002



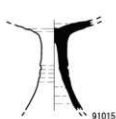
88003

■91年度 第2層

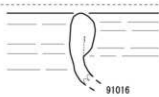


91013

不明



91015



91016

第3層



91014



91017



91018



91019



91021



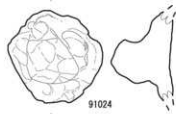
91020



91022



91023 縁



91024

南端築地試掘灰褐色粘質土



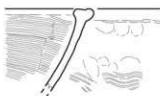
91025



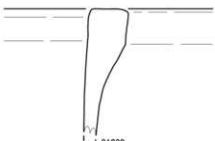
91029



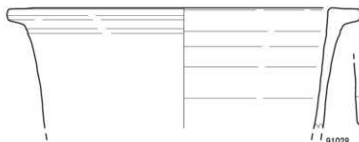
91026



91027



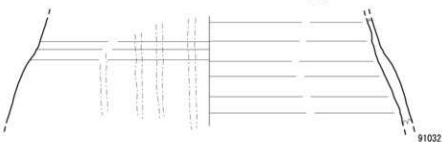
91030



91028



91031

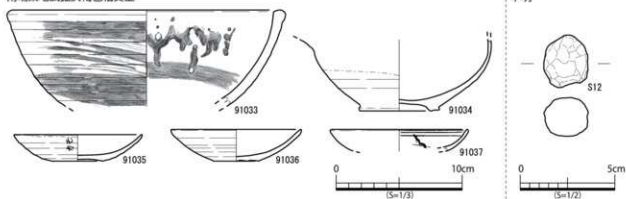


91032



第23図 88・91年度出土遺物 (S=1/3)

南端築地試掘灰褐色粘質土



第24図 91年度出土遺物② (S=1/3・1/2)

以上から堆積層の時期は17世紀以降と考えられる。

金堂跡西方地区（回廊地区）

第2層

86404は土師質土器の杯である。

第2層灰褐色土

86405・86406は陶器で、86405は備前焼の徳利、86406は施釉陶器の火入、86407は肥前系磁器の皿である。S11は砥石状を呈するが、材質は不明である。

86407から堆積層の時期は19世紀以降と考えられる。

第4層整地層

86408は土師質土器の焙烙である。以上から堆積層の時期は17世紀前半頃と考えられる。

【堆積層の形成】

以上から金堂跡西方地区は、17世紀前半以降に造成等の改変若しくは土地利用が行われたと考えられる。

【88年度】

88001～88003は土師質土器である。88001は鉢型土器と考えられる。88002は土鍋である。88003は足釜である。

これらの遺物から13世紀中頃以降と考えられる。

【91年度】

寺域北東地区

第2層

91013は備前の陶器の壺である。14世紀初頭頃と考えられ、当該調査区の堆積層の時期を示すものではないと考えられる。

第3層

91014は白磁の皿で、内面見込みは蛇の目状に軸剥ぎを行う。以上から堆積層の時期は18世紀前半以

降と考えられる。

不明

91015は須恵器で、古墳時代の高杯である。91016は備前焼の壺の口縁部片である。91017～91019は陶器で、91017は備前焼の播鉢、91018は瀬戸美濃系陶器の鉢、91019は備前焼の灯明皿である。91020・91021は京・信楽系陶器の椀で、91022は肥前系磁器の仏飯器である。91023は平安京近郊産緑釉陶器の椀と考えられる。91024は土師質土器の甕若しくは鍋の取っ手である。

【堆積層の形成】

当該調査区は18～19世紀には農地等として利用される中で、一部が廃棄場所などとして利用されていた可能性がある。

寺域南端地区

灰褐色粘質土（第2層）

91025～91030は土師質土器である。91025は焙烙、91026・91027は鉢で、91027は外面に波状文を施し、内面は刷毛目調整で仕上げる。91028・91031は植木鉢、91029は皿、91030は井割若しくは肥溜めなどに使用される大型品である。91032・91033は瀬戸美濃系、91035・91036は京・信楽系陶器である。91032は大型の甕、91033は鉢で、91034は急須、91035・91036は灯明皿で、91035の外面には「カモ」と墨書がある。91037は磁器の皿で、付着物が確認できる。

以上から堆積層は19世紀以降に整地等がなされ、現状に至った状況を確認することができる。

【不明】

S12は不明石製品で、大きさ4.1cm、厚み3cmで、細かな加工で垂形状である。石材は砂岩か。

第3章 瓦埴類

第1節 瓦埴類の概要と特徴

本事業で行った発掘調査では膨大な量の瓦埴類が出土し、鉦先瓦・宇瓦・男瓦・女瓦・道具瓦（鬼瓦・隅切瓦・熨斗瓦・鳥衾瓦・面戸瓦・雁振瓦）・埴等が出土した。軒先瓦・男瓦・女瓦・埴の総重量は約37023.4kgである。年度ごとでは1982（昭和57）年度以前で約687kg、1983（昭和58）年度で約3788kg、1984（昭和59）年度で約2319kg、1985（昭和60）年度で15826.8kg、1986（昭和61）年度で13906.5kg、1991（平成3）年度で1896kg、年度不明のものが約137.9kgである。全体の出土傾向としては1985年度の僧房跡地区の調査と、1986年度に実施された僧房跡周辺の調査時の出土量が圧倒的に多い。周辺の築地塀や鐘楼跡の調査でも瓦類は一定量確認でき、各施設が瓦葺きであったと考えられる。

軒先瓦類の出土量は創建期に位置づけられる型式のもの割合が高く、再整備期等に位置づけられる型式が欠いて多い。小規模な修理時期等の上記の時期にあてはまらない型式のものは出土量としては少ない。また、時期によって胎土や焼成に差異が見られ、型式ごとの特徴として示せることも明らかにできた。瓦類全般的に古代以前の型式が多数出土しているが、中近世の瓦類も古代種ではないが多数出土しており、現在も法灯を伝えている寺院の足跡を辿る上で重要な資料と考えられる。

昭和58～61年度の概要報告で、鉦瓦25型式29種、宇瓦24型式28種を紹介した。今回の報告では古代の新型式や中近世の軒先瓦も報告する。本報告書に収録した讃岐国分寺跡出土の鉦瓦は、50型式59種、宇瓦は55型式62種となる。出土点数は可能な限り、接合できるか照合し、点数のカウントを行っているが、作業の都合上、古代を中心としたもののみ提示する。

女瓦は第3章第5節で述べたように凸面に縄目叩き整形する個体が膨大であり、平行叩きや格子叩きの個体の割合は低い状況である。平行叩きの種類は12種類であるが、格子叩きは30種類と倍の種類を確認し、種類で焼成や胎土が異なり、年代や生産地に差異が見られると考えられ、今後、生産地との比較を行い、国分寺の造瓦体制を明らかにする必要がある。

男瓦は行基式、玉縁式いずれも出土するが、玉縁式

の割合が圧倒的に高い。玉縁式の分類作業は単純な長辺と短辺の法量で分類は行わずに、男瓦の組み合わせ状況等加味し、狭端面の幅と玉縁の長さを基準に分類した。その結果、狭端面幅が14～16cm台のものが圧倒的に多いことが明らかになった。

道具瓦に関しては鬼瓦に平城宮系のものが確認されている。熨斗瓦にも大まかに大小に分類でき、大棟や降棟に使い分けていた可能性がある。

瓦埴類全体の焼成や胎土を見ると、基本的にどの型式のものにも白色粒が大小粗密あるが含まれている。創建期頃に位置づけられるものは、色調は灰色系で焼きが硬質なものが多く、胎土が粗くないものが多い。一方、大規模な修理期に時期が下るものは、色調がにぶい黄橙色系で焼きが軟質になる傾向にあり、胎土が粗くなり赤色粒を含むようになる。

これまでの研究で、生産地は高松市と坂出市の市境に位置する府中・山内瓦窯跡で生産されたと考えられ、国分寺と同范瓦が出土している。一方で、胎土や焼成、型式のヴァリエーションが多彩である点を考慮すると、生産時期や生産地を再考する必要があると考え、今回の報告が周辺の十瀬山窯跡群（綾川町等）と比較、研究の参考資料となれば幸いである。

第2節 鉦瓦（第25～32図）

SKM01（第25図-1～4）

複弁8葉蓮華文鉦瓦。22点出土した。突出した中房に1+6の丸目の蓮子を置く。花弁は立体的な子葉をもち、外区内縁には二重の圓線内に22個の丸目の珠文、外縁（斜縁）には線刻蓮文が廻る。男瓦部側面と瓦当裏面との境は、ケズリによって直角的に整形する。瓦当径は約16.5cm前後である。色調は灰色～青灰色を呈し、焼成は良～良好で硬質である。胎土は砂粒を多く含むものほとんど含まないものがある。前者は接合式（旧分類A技法）（1・4）で、瓦当外周は縦ケズリで整形する。後者は横置き型一本作り（蒲鉾状型木）（旧分類B技法）（2・3）で、瓦当外周の上半部は縦ケズリ、下半部は横ケズリで整形する。一本作りの瓦当裏面はナデ整形され、布目の痕跡は残っていない。一本作りの瓦当面にはアバタ状の凹凸が見られ、これはノコクス（オガクス）を「離れ砂」として

用いたものと考えられる(妹尾 2017)。ただし、全点にあるわけではないので瓦範から離れにくくなるとノコクズを塗すものと推測される。又は、粘土クズをまいても同様なアバタ状の凹凸ができると指摘された¹⁾。このノコクズは他の横置き型一本作り(SKM03・06)やSKM04にも見られる。横置き型一本作りのものは鋸歯文と珠文帯に范傷が見られるものがあり、接合式のものは鋸歯文にしか范傷が見られないことから接合式から横置き型一本作りに技法が変化することが既に指摘されている(妹尾 2017)。また、前者と後者では瓦当の天地が90度異なり、瓦範が方形であった可能性が高い。

SKM01は、丸亀市に所在する宝幢寺系鎧瓦の文様系譜下にあると考えられている。製作技法を比較すると、両者とも男瓦部は瓦当裏面の比較的高い位置にとりつき、補強粘土は主に、外面に施している。ただし、宝幢寺系鎧瓦は男瓦部と瓦当部との接合に際し、男瓦縁端部凸面にヘラ状工具で刻み目を入れ、粘土の接合をよくしているが、SKM01は男瓦部に何の加工も加えられていない。国分僧寺以外での同范例の出土を聞かない。出土位置は第33図で詳細は示しているが、僧房跡や鐘樓跡、回廊跡等で出土している。Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる。

SKM02A (第25図・5～8)

素弁8葉蓮華文鎧瓦。58点出土した。突出した中房に1+6の蓮子を置く。花弁の中央が高く、稜となる。間弁は中房に達する。周縁には大ぶりの線鋸歯文14個が廻る。色調は灰色～暗灰色を呈し、焼成は良～良好で硬質である。胎土に黒色粒を含む。男瓦部は瓦当裏面のやや低い位置にとりつき、瓦当裏面に支持土を多量に張り付ける。瓦範に使用した粘土が柔らかいためか范全体に小さな凹凸が見られる。他の鎧瓦に比べ瓦当の厚さが約3.5cm～5.0cmとかなり厚くばらつきがある。瓦当径は約17.0cmであるが、前後1cmの縮小・拡大が見られ、須恵質のものは径が小さく、瓦質ものは大きく、焼成の状況によって変化すると考えられる。男瓦部側面と瓦当裏面との境は曲線的に仕上げている(旧C分類)。男瓦と瓦当の貼り付けはヴァリエーションがある。SKM04よりは接合状態が雑になる。瓦当外周は横ケズリで整形する。色調は灰色～暗灰色系で焼成は硬質ものが多い。出土位置は第34図で示している。国分僧寺以外での同范例の出土を聞かない。これまでSKM24の系譜をひくと考えられていたが(渡

部 2013)、文様構成や技法が類似することから弘安寺KA103の影響を受けたと考えられる。Ⅱ期に位置づけられる。

SKM02L (第114図・367)

素弁8葉蓮華文鎧瓦。鳥衾瓦と考えられる種類である。4点出土した。SKM02Aの大型品だが外区の構成が異なる。突出した中房の蓮子は1+8とSKM02Aより増える。花弁の形状はSKM02Aと同様である。間弁は中房に達する。外区は周縁によって区画され、外区、周縁には21個ずつの珠文、線鋸歯文が廻る。色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。瓦当径は約23.8cmである。范抜けが非常に良い。胎土・焼成が鬼瓦とよく似ており、鳥衾のように棟端に使用したと考えられる。SKM03Lと外区の構成が似ることも特徴である。断面に男瓦部が見られることから接合式と考えられるが、支持土が見られず、男瓦は別作りでも瓦当と一体で作られ、一本作りの可能性もある。Ⅱ期に位置づけられる。

SKM03A (第25・26図・9～13)

複弁8葉蓮華文鎧瓦。58点出土した。周縁に囲まれ、平坦な中房に1+6の尖った蓮子を置く。花弁はSKM01より平面的でこれを模倣したものと思われ、子葉も細くなる。外区は二重周縁内に32個の珠文が廻る。珠文は尖がっている。周縁の線鋸歯文は省略されている。色調は灰色～暗灰色系で、焼成は硬質であるが一部いぶし焼状のものもある。製作技法は、全て横置き型一本作り(蒲鉾状型木)である。玉縁端まで残る資料が2点あり、長辺は約40cmである。玉縁長は6.5cm。瓦当径は約17.0cm前後である。

いずれの個体にも中房と花弁、珠文帯に范傷が見られる。全点ではないが瓦当面にノコクズが見られる。瓦当側面に木製の櫛型の痕跡が見られる。出土位置は第34図で詳細は示しているが、僧房等で出土している。同范の軒瓦は香川県丸亀市宝幢寺跡、大阪府小坂合遺跡、生産地と考えられる高松市と坂出市の市境に位置する府中・山内瓦窯跡から出土している。Ⅱ期に位置づけられる。

SKM03L (第114図・368)

複弁8葉蓮華文鎧瓦。鳥衾瓦と考えられる種類である。4点出土した。SKM02Lと同様に中房の蓮子が1+8と増え、外区外縁に線鋸歯文をめぐらせる点が異

なる。色調はにぶい黄橙色～灰色で、焼成は良である。補強粘土は専ら外面に施されるが、男瓦部は瓦当裏面のやや低い位置にとりつく。珠文と線鋸歯文は弁と対応する。また、縦断面が、瓦当上端にむかって反り上がった形状に成型される。瓦当径は約 23.0cm である。男瓦上部の粘土が分厚く斜めになっていることや、接合溝を掘ったことから接合式の可能性がある。一方で、瓦当裏面に支持土が認められないので接合式を呈する一本作りの可能性もある。SKM02L と同様に鳥衾のように棟端に使用したと考えられる。Ⅱ期に位置づけられる。

SKM04 (第 26 図 - 14 ~ 16)

単弁 8 葉蓮華文鏡瓦。55 点出土した。圏線に囲まれ、平坦な中房で 1+6 の蓮子を置く。花卉の子葉は一枚の単弁であるが、弁全体の形状は SKM03A とよく似ており、花卉の中央部分は照りむくっている。外区は二重圏線内に珠文帯を置き、周縁に鋸歯文を置く。柳型があるもの 16 とないもの 14・15 が見られる。当初は柳型があるが加工し、外区周縁も調整したため、全径が僅かに小さくなる⁽²⁾。柳型を除去後、中房の范割れがあるもの 15 とないもの 14 に変化する。范割れは柳型がある 16 は見られないことから、16→15→14 と変遷することが分かる。范割れしているものはノコグズがまかれていたが范抜けが悪いものが多い。ノコグズは一本作りのものと比べるとアバタが大きく、使用している材質が異なる可能性がある。技法は全て接合式である。瓦当径は約 17 ~ 18cm 前後である。

男瓦部は瓦当裏面の低い位置にとりつき、補強粘土は内・外面とも多量に施す。男瓦部側面と瓦当裏面との境にも支持土を施し、境は曲線的に仕上っている。男瓦は凹面に糸切り痕が見られることから粘土板作りである。色調は灰色を中心としたものであり、焼成は硬質である。わずかであるが灰被りしているものもある。

出土位置は第 35 図で示しているが、僧房跡や回廊跡等で出土している。讃岐国分尼寺 (KB106) でも出土しており、尼寺では一本作りに変化する。Ⅰ～Ⅱ期に位置づけられる。

SKM05 (第 27 図 - 17・18)

複弁 6 葉蓮華文鏡瓦。21 点出土した。平坦な中房に 1+6 の蓮子を置く。花卉は端部や輪郭線も含めて

丸みを帯びた印象である。間弁は中房に達し、間弁同士がつながっている。外区は二重圏線内に 20 個の珠文、周縁には 26 個の線鋸歯文が廻る。瓦当径は約 15cm 前後である。技法は接合式である。瓦范に接合溝を掘り、瓦当裏面に支持土を大量に張り付ける。色調は暗灰色系で焼成は硬質である。また、この范種は灰被りを受けているものが多い。

出土位置は第 35 図で示しているが、僧房跡等で出土している。同范瓦は坂出市醍醐寺跡から出土している。妹尾氏は平城宮・京の鏡瓦と比較し、花卉の弁数が 6 葉と少ないが、連続した間弁の足の長い B 系統の間弁 (連続間弁) (6284、304 型式等) で囲まれており、基本的な文様意匠が似ることを指摘している (妹尾 2017)。Ⅱ期に位置づけられる。

SKM06 (第 27 図 - 19 ~ 22)

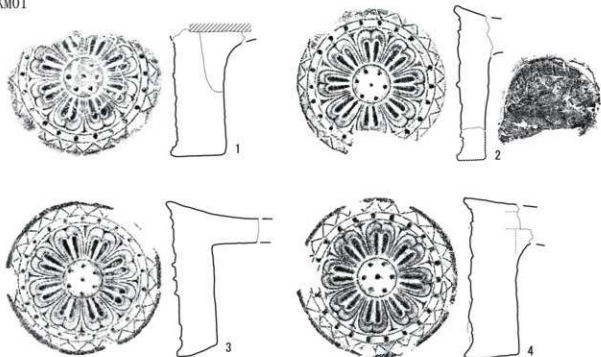
複弁 8 葉蓮華文鏡瓦。25 点出土した。やや突出した圏線で囲んだ平坦な中房に、1+6 の尖った蓮子を置く。花卉の輪郭線が三角形で鋭利になっている。外区は二重圏線内に 21 個の尖った珠文、周縁には線鋸歯文が廻る。SKM01、03A と同様に横置き型一本作りである (蒲鉾状型木) による一本作りである。粘土塊が横積み方向で確認されているものがあることから積み上げ式と考えられる。一本作りで使用した成型台の影響から瓦当厚は外周から中房に向けて薄くなり、男瓦部と瓦当裏面の淵に切り見込みのような痕跡が見られる。瓦当裏面は全てナデ整形されている。瓦当径は約 16.5cm である。男瓦部が残っているものの凹面は布目をナデ消すものが多い。色調は灰色系で焼成は硬質である。瓦当外周上半部は縦ケズリ、下半部は横ケズリで整形する。

出土位置は第 36 図で示すが、僧房跡等から出土している。Ⅱ期に位置づけられる。

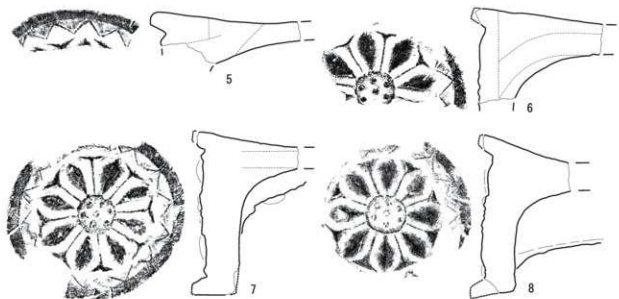
SKM07 (第 27 図 - 23)

複弁 7 葉蓮華文鏡瓦。39 点出土した。太めの圏線に囲まれ、平坦な中房に 1+5 の蓮子を置く。弁頂は内外区を分ける圏線と一体化している。外区には圏線の外側に 20 個の珠文、外縁には大ぶりの線鋸歯文 11 個が廻る。外区外縁はゆるやかな斜線をなし、内縁との間に段差がある。珠文帯に数か所范傷が見られる。技法は接合式で、確認できるものは接合溝を設ける。瓦当部は厚く、補強粘土が少量のためか、男瓦部と瓦当部とが剥離した個体がほとんどである。瓦当径

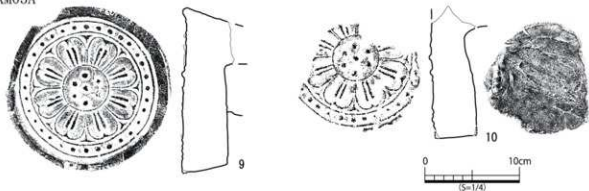
SKM01



SKM02A

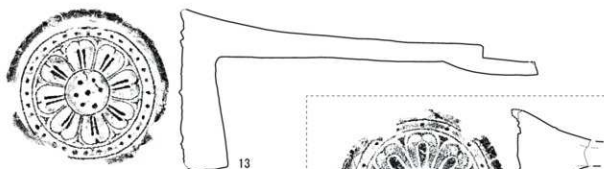
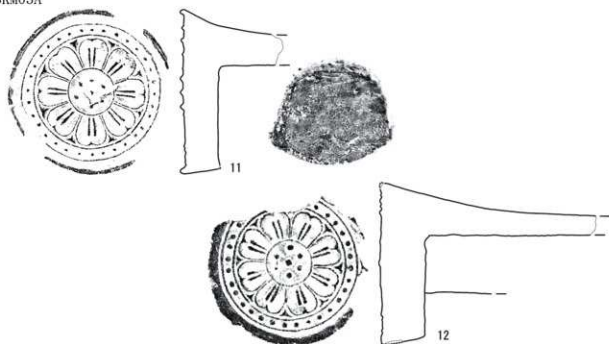


SKM03A



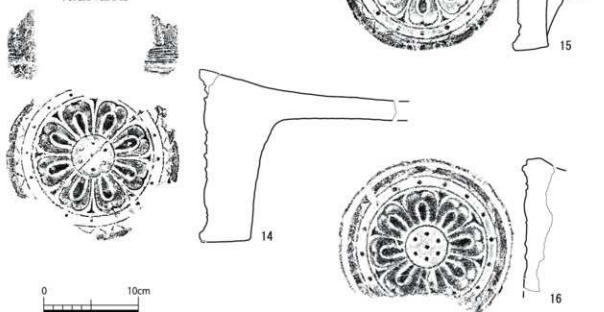
第25図 鐘瓦 SKM01～03A (S=1/4)

SKM03A



SKM04

両側面の掻き傷



第26図 鍮瓦 SKM03A～04 (S=1/4)

は確認できるもので約 18.0cm である。色調はにぶい黄褐色～淡橙色を呈し、焼成は軟質である。また、胎土に赤色粒が多く入るのも特徴である。赤色粒が入るものは後述する編年案のⅣ期に位置づけられるものに多く見られ、軟質であることも併せてこの時期の瓦の特徴として示せると考えられる。二次焼成を受けているものもある。

出土位置は第 36 図で示しているが、僧房跡等で出土している。同范の鍔瓦は生産地と考えられる府中・山内瓦窯跡と高松市拝師庵寺、さぬき市長尾町長尾寺から出土している。同文の瓦が百相庵寺から出土している。また、花卉の形状の類似点から高松市中山庵寺 NY101 と関連があると指摘されている（渡部 2014）。Ⅳ期に位置づけられる。

SKM08（第 27 図 - 24）

単弁 16 葉蓮華文鍔瓦。19 点出土した。圏線で囲んだ中房に 1+5 の蓮子を置く。花卉の形態はかなり崩れており、丸みを帯びている。水滴上の間弁が見られるが、それぞれ形状が安定していない。SKM07 を模倣した文様と考えられる周縁には線鋸歯文が廻る。技法は接合式で確認できるものは接合溝を掘っている。また、接合が甘いのが男瓦部が残存しているものはなかった。色調は、外面は暗灰色～黒色を呈しており、内面はにぶい黄褐色系で、焼し状態のものが多い。SKM07 と同様に赤色粒を含んでいる。焼成は軟質である。二次焼成が見られるものもある。

出土位置は第 37 図で示している。Ⅳ期に位置づけられる。

SKM09（第 28 図 - 25）

単弁 8 葉蓮華文鍔瓦。46 点出土した。突出した中房に 1+4 の蓮子を置く。花卉は輪郭線が丸み帯びて立体感があり、子葉は中房に達せず、粒状である。間弁は弁端に接し、外区との分割線の役割を成している。外区は周縁側に圏線を 1 条配し、32 区画に区分して 1 区画おきに計 16 個の珠文を配す。外縁（斜縁）にはゆるやかな波状文が廻る。瓦当径は確認できるもので約 17.0cm である。技法は接合式で、接合溝を設ける。瓦当裏面と男瓦部側面との境にも支持土を施し、曲線的に仕上げている。色調は、外面は暗灰色～黒色を呈し、内面はにぶい黄褐色となるものが多い。胎土が雑で、赤色粒を含む。焼成はやや軟質で、焼し焼きに近いものである。出土位置は第 37 図で示している。

同范の鍔瓦は坂出市府中開法寺跡（KH110）、讃岐国分尼寺（KB106）から出土している。Ⅳ期に位置づけられる。

SKM10A（第 28 図 - 26）

複弁 8 葉蓮華文鍔瓦。7 点出土した。圏線で囲んだ中房に 1+7 の蓮子を置く。花卉は全体的に平坦で輪郭を線状で表している。花卉の形状がハート形になる。間弁は中房に達し、連続したものになる。花卉のハート形になっている部分にも間弁が入り込んでいる。外区は二重圏線内に珠文を配し、周縁は無文である。技法は接合式で深めの接合溝を設ける。瓦当厚は厚いもので約 6.5cm と厚く、木製極型の痕跡が見られる。男瓦部凹面と瓦当裏面との接合線は円弧状をなし、男瓦部側面との境は、ケズリによって曲線的に仕上げている。色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。瓦当外周下半部は横ケズリで整形する。

出土位置は第 1 表で示している。文様・構成や焼成状況、点数からⅢ期に位置づけられると考えられる。

SKM10B（第 28 図 - 27）

複弁 8 葉蓮華文鍔瓦。1 点出土している。SKM10A を模倣したものと考えられる。しかし、蓮子は丸く平坦に近くなり、中房の圏線も太く丸くなる。花卉の形状は SKM10A と近似するが、間弁が丸み帯びた立体的なものになる。外区は圏線 1 条と珠文が確認できるが少量であるため、全縁は不明である。周縁は平周縁である。今後の調査での出土例も考慮する必要があるが、SKM10A の改範した可能性もある。SKM10A と同様にⅢ期に位置づけられると考えられる。

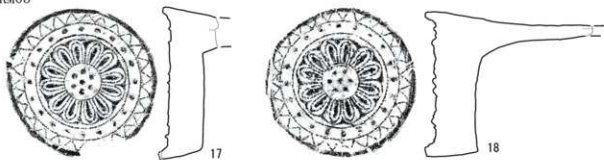
SKM11（第 28 図 - 28）

単弁 6 葉蓮華文鍔瓦。3 点出土している。1 段くばんだ中房に、1+6 の蓮子を置く。弁頂に切り込みがあり、複弁が変形したものかも知れない。同文例（大塚・黒川 1975）を参照すると、外区内縁には珠文、外縁（斜縁）には線鋸歯文が廻る。技法は接合式である。色調は淡茶色を呈し、焼成はやや軟質である。詳細な年代は不明であるが、Ⅳ期と推測される。

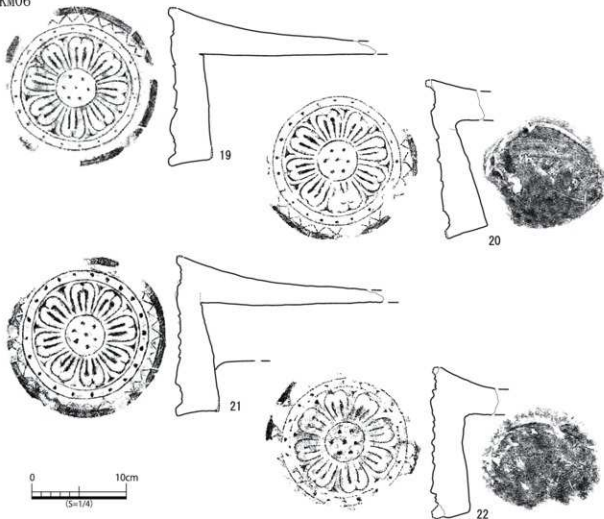
SKM12（第 28 図 - 29）

単弁 8 葉蓮華文鍔瓦。1 点出土した。突出した中房に 1+4 の蓮子を置く。間弁も主弁と同じ形態をとる。外区には珠文を粗に配し、周縁には線鋸歯文が廻る。

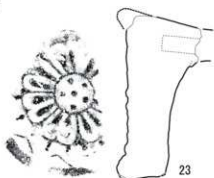
SKM05



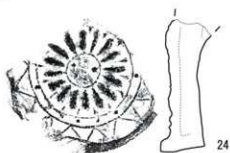
SKM06



SKM07

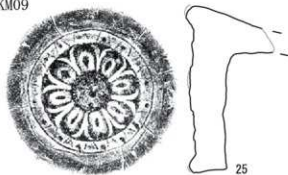


SKM08



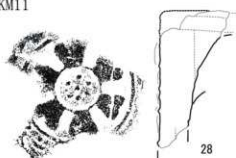
第 27 図 甕瓦 SKM05 ~ 08 (S=1/4)

SKM09



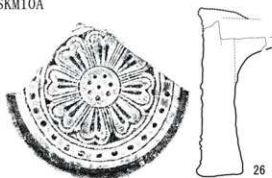
25

SKM11



28

SKM10A



26

SKM10B



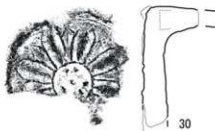
27

SKM12



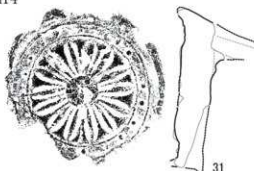
29

SKM13



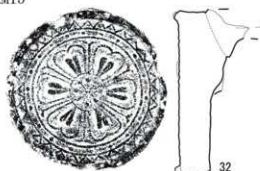
30

SKM14



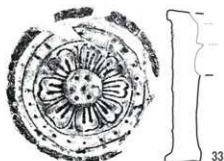
31

SKM15



32

SKM16



33



34



第28図 鑑瓦 SKM09～16 (S=1/4)

外周縁は他の範種に比べ、厚みがある。暗青色を呈し、焼成はやや軟質である。詳細な年代は不明であるが、Ⅲ期と推測される。

SKM13 (第28図 - 30)

単弁 8 葉蓮華文鏡瓦。1 点出土している。圏線で囲んだ中房に蓮子を置く。SKM12 を簡略化した文様と考えられる。間弁は外向きの矢印状に変形している。外区を欠き、周縁が僅かに高まる。技法は接合式である。色調は淡橙色を呈し、焼成は軟質である。

SKM14 (第28図 - 31)

細弁 14 葉蓮華文鏡瓦。2 点出土している。突出した中房に 1+5 の蓮子を置く。花卉は先の尖った細弁を巡らす。間弁は中房まで達し、大きさは細弁とほぼ同じである。外区内縁には 20 個の珠文、外区斜縁には 29 個の線鋸歯文が廻る。技法は接合式である。瓦当面に離れ砂かノコクズの痕跡が見られる。瓦当外周は横ケズリで整形する。瓦当裏面から男瓦凹面に向けて、補強粘土の上を縦ナデで整形し、両者の接合線は円弧状をなす。瓦当裏面と男瓦部側面との境にも補強粘土を施し、曲線的に仕上げる。色調は灰色を呈し、焼成は硬質である。

外区等の文様構成は違うが、花卉の形状だけ比較すると讃岐国分尼寺 KB101 に類似する。Ⅲ期に位置づけられると考えられる。

SKM15 (第28図 - 32)

複弁 6 葉蓮華文鏡瓦。12 点出土している。圏線で囲んだ中房に 1+8 の蓮子を置き、対角にある蓮子は直線で結び合っている。花卉は線状で表し、SKM10A のようにハート形である。間弁は中房まで達するが、SKM10A と違い独立している。外区には二重圏線内に 20 個の珠文、平周縁には 29 個の線鋸歯文が廻る。男瓦部は瓦当裏面の比較的高い位置にとりつく。色調は灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

讃岐国分尼寺跡 (KB105)、坂出市西庄町の醍醐寺跡から同範と思われる鏡瓦が出土している。Ⅲ期に位置づけられると考えられる。

SKM16 (第28図 - 33・34)

複弁 8 葉蓮華文鏡瓦。2 点出土している。圏線で囲んだ中房に 1+6 の蓮子を置く。花卉はハート形で輪郭は線状で表現されている。間弁は三角形形状である。

外区は二重圏線内には 22 個の珠文を配し、周縁は無文である。瓦当裏面はナデ整形されているが、外周に沿って高まりが見られる。小片であるため今後詳しく分析する必要があるが、縦置き型一本作りの痕跡の可能性はある。男瓦部は瓦当裏面の比較的高い位置にとりつき、男瓦部凹面と瓦当裏面との接合線は円弧状をなす。男瓦部側面と瓦当裏面との境は、曲線的に仕上げる。色調は赤褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に赤色粒を含む。Ⅲ期に位置づけられるが、赤色粒を含むことから、Ⅳ期に下る可能性も考えられる。

SKM17 (第29図 - 35)

素弁 8 葉蓮華文鏡瓦。11 点出土した。圏線で囲んだ中房に 1+4 の蓮子を置く。間弁は Y 状を呈し、間弁位置に対応して外区に各 3 個ずつの珠文を置く。色調は暗赤褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に赤色粒を含む。出土状況、胎土、色調、瓦当文様から SKH12 との組み合わせが考えられる。Ⅳ期と考えられる。

SKM18 (第29図 - 36)

複弁 8 葉蓮華文鏡瓦。1 点出土した。突出した中房に 1+8 の蓮子を置く。花卉は子葉が膨らみ立体感がある。間弁は三角形形状であるが、子葉の間にも小型のものを配する。外区は二重圏線内に珠文は 16 個、周縁は平周縁に近いもので、無文である。技法は讃岐国分尼寺の出土例を参考にすると、縦置き型一本作りと考えられる。色調は青灰色を呈し、焼成は硬質である。

讃岐国分僧寺跡では出土量は多くないが、同範瓦は讃岐国分尼寺跡 (KB104) で主体的に出土する。1 点のみであるが、製作技法や尼寺での位置づけから創建期 (Ⅱ期) と推測する。

SKM19 (第29図 - 37)

複弁 8 葉蓮華文鏡瓦。2 点出土した。突出した中房に 1+8 の蓮子を置く。花卉の輪郭は線状に表現され、子葉は大きく、立体的である。間弁は連続して繋がっている。外区は太めの圏線が 1 条巡り、珠文、線鋸歯文は省略されている。平周縁と考えられる。瓦当径は約 13.5cm と小型である。瓦当裏面は指頭圧痕が多数見られ、中心部に向け丸く高まる。この特徴は SKM20・21A・21R で見られる。接合部の補強粘土は主に外面に施す。男瓦部凹面と瓦当裏面との境に沿ってで、両者の接合面は円弧状をなす。技法は接

合式である。男瓦が残存しているのを見ると孔が開いている。色調は暗灰色を呈し、焼成は硬質である。Ⅳ期と考えられるが、より中世に近い頃と考えられる。

SKM20 (第29図 - 38・39)

複弁8葉蓮華文鏡瓦。3点出土した。突出した中房に1+8の蓮子を置く。文様構成はSKM19と近似するが、外区に圈線を設けない。外区は珠文・線鋸歯文とも省略されている。瓦当裏面は中心部に向かい丸く高まる。色調は黒褐色を呈し、焼成はやや軟質である。技法は接合式である。

SKM21A (第29図 - 40)

単弁6葉蓮華文鏡瓦。2点出土した。圈線で囲んだ中房に1+6の蓮子を置く。花卉は子葉も含め太い線状で表現し、輪端を紡錘状に表現する。瓦当裏面は中心部に向かい丸く高まる。技法は接合式である。色調は赤褐色を呈し、焼成は軟質である。

SKM21R (第29図 - 41)

単弁6葉蓮華文鏡瓦。2点出土した。SKM21Aの瓦当を瓦范として使って作られており、外縁には一部線鋸歯文がのこる。色調は淡灰色を呈し、焼成は軟質である。瓦当裏面は中心部に向かい丸く高まる。男瓦が残存しているのを見ると男瓦の製作技法は粘土組作りである可能性がある。

出土状況、胎土、色調、製作技法からSKH20との組み合わせが考えられる。Ⅳ期と考えられる。

SKM22 (第29図 - 42)

素弁10葉蓮華文鏡瓦。2点出土している。SKM17を模倣した文様であろう。間弁は棒状に簡略され、その上外区に珠文を1個ずつ置く。色調は黄褐色を呈し、焼成は軟質である。基本的に製作技術はSKM17と共通するものと思われる。

SKM23 (第30図 - 43)

素弁10葉蓮華文鏡瓦。1段くぼんだ中房に1個の蓮子を置く。各花卉の中央近くに1個ずつ珠文を置く。瓦范の形状が三角錐であったと考えられ、中房に向かい凹んでいく。男瓦部は瓦当裏面の比較的高い位置にとりつく。技法は接合式である。接合に際し、男瓦部の根元を指先で押し込んだ痕跡が残る。男瓦部凹面と瓦当裏面との接合線は円弧上をなす。瓦当裏面はいつ

たん粗くナデつけ、さらに瓦当裏面下端部に粘土塊を貼り付けた後ナデを施している。色調は黒褐色を呈し、焼成は軟質である。

SKM24A (第30図 - 44)

素弁8葉蓮華文鏡瓦。4点出土した。圈線で囲んだ中房に1+6の蓮子を置く。花卉の中央になだらかな稜を持つ。外区や周縁は無文である。周縁は粘土紐状の単位が見えるものがあり、一塊の粘土を范に詰めずにいくつかの単位に分けて范詰めしたと考えられる。文様は全体的に雑な作りになり、胎土も粗くなる。技法は接合式であるが、接合溝をほとんど掘らず、貼り付けに近いもので、支持土で支えたと考えられる。

製作技術はSKM23とほぼ共通し、瓦当裏面下端部に粘土塊を貼り付けている。色調は灰褐色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土に砂粒を多く含む。Ⅲ期に位置づけられる。

SKM24B (第30図 - 45)

素弁8葉蓮華文鏡瓦。4点出土した。文様構成はSKM24Aと近似する。瓦当径は約16.0cmである。技法は接合式であるが、接合溝をほとんど掘らず、貼り付けに近いもので、支持土で支えたと考えられる。男瓦部は瓦当裏面の比較的高い位置に取り付くが、瓦当裏面下端部には粘土塊を貼り付けておらず、断面形は弧状に近い形態である。色調は暗灰色を呈し、焼成はやや軟質で、胎土も雑である。

SKM25 (第30図 - 46)

素弁6葉蓮華文鏡瓦。6点出土した。1段くぼんだ中房に蓮子を置く。間弁は棒状に表現されている。外区内縁には珠文と線鋸歯文が廻る。周縁は無文である。技法は接合式である。色調は赤褐色を呈し、焼成は軟質である。Ⅳ期と考えられる。

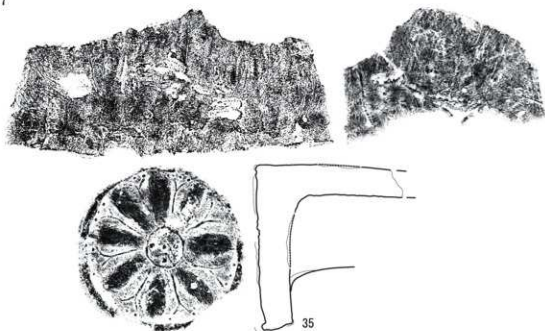
SKM26 (第30図 - 47)

素弁蓮華文鏡瓦。全体の様相は不明であるが、開法寺出土のKH103の花卉形状に類似する。

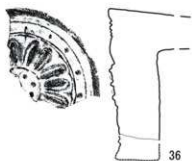
SKM27 (第30図 - 48)

複弁蓮華文鏡瓦。全体の様相は不明で、外区は無文の平周縁である。技法は接合式である。色調は灰白色で焼成は良である。

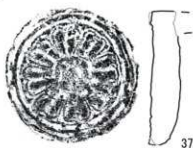
SKM17



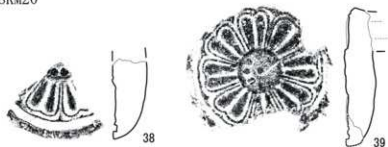
SKM18



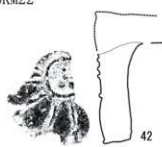
SKM19



SKM20



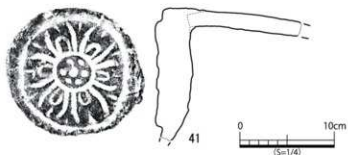
SKM22



SKM21A

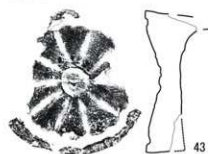


SKM21R



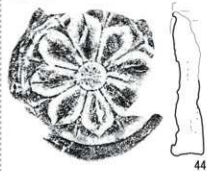
第 29 図 鍍瓦 SKM17 ~ 22 (S=1/4)

SKM23



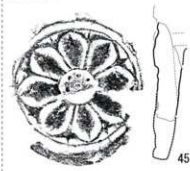
43

SKM24A



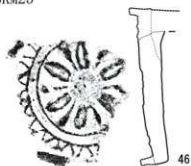
44

SKM24B



45

SKM25



46

SKM26



47

SKM28



49

SKM27



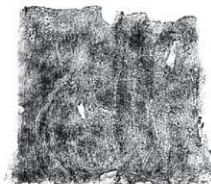
48

SKM29



50

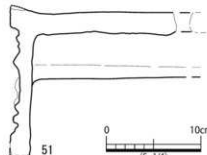
SKM30



SKM31



52



51



第30図 鐘瓦SKM23～31 (S=1/4)

SKM28 (第30図 - 49)

細弁と推測される釐瓦。1点出土した。内区は破損しており全体の様相は不明である。外区は露出文を配し、その外側に珠文を置く。このタイプのものは讃岐国分尼寺跡(KB101)で見られ、同文の可能性はある。色調は灰色で焼成は硬質である。

SKM29 (第30図 - 50)

単弁又は重弁と考えられる釐瓦。全体の様相は不明であるが、外区に圈線が2重に回る。周縁は無文である。

SKM30 (第30図 - 51)

巴文釐瓦である。珠文は12個で、巴頭は不整形なやや尖り気味で、巴尾は太く短い。いずれも立体的で、巴は断面三角形である。瓦当裏面調整は佐川分産Cである。男瓦部は凸面側が縦方向のナデ調整、凹面は布目が残るが、非常に荒れている。釘孔は凸面側からの穿孔によって行われる。

焼成は良好で、胎土はやや密であり、1~2mm程度の白色、黒色砂粒を多量に含む。

SKM31 (第30図 - 52)

大型の巴文釐瓦である。珠文数は不明で、巴頭は不整形なやや尖り気味で、巴尾は細く長く、隣の巴に接続する。いずれも立体的で、巴は断面台形である。瓦当裏面はナデ調整である。

焼成はやや不良で表面のみ焼されている。胎土は密で、1~2mm程度の白色砂粒を多量に均質に含む。

SKM32 (第31図 - 53・54)

大型の巴文釐瓦である。珠文数は不明で、巴頭は不整形なやや尖り気味で、巴尾は細く長い。いずれも立体的で、巴は断面台形である。接合式で、瓦当面には離れ砂を多量に残存している。瓦当裏面は成型台の痕跡と考えられる段が中央部に認められる。断面には粘土板の痕跡が確認でき、2枚の粘土板で瓦当面を構築している。瓦当裏面は全体に粗いナデ調整を施した後、男瓦部の下位にあたる個所を一度に横方向のナデ調整を施す。男瓦部の端部を接合後にナデ等によって調整を行っている。

焼成はやや不良で、胎土は1~2mm程度の茶褐色の砂粒を均質に含む。

SKM33 (第31図 - 55)

巴文釐瓦である。珠文数は25個で、非常に小さい。巴頭は不整形なやや尖り気味で、中央部で接する。巴尾は細く非常に長い。いずれも立体的で、巴は断面三角形である。男瓦部の凸面側は縦方向の丁寧なナデ調整で、凹面側は布目と考えられる。瓦当裏面は全体にナデ調整を施した後、男瓦部の下位にあたる個所を一度に横方向のナデ調整を施す。男瓦部の端部の接合箇所は不明確で、瓦当構築後にほぼ同時に男瓦部を一体的に構築したものと考えられる。

焼成はやや不良であるが表面は焼されている。胎土は密で、1~2mm程度の白色、無色の砂粒を均質に含む。

SKM34 (第31図 - 56)

巴文釐瓦である。珠文数は不明だが、小さく多いタイプである。巴頭は不整形で不揃いで、巴尾は細く非常に長い。いずれも立体的である。瓦当面は范抜けが良く、離れ砂が多量に残存している。瓦当裏面はナデ調整によって仕上げている。男瓦部の端部の接合箇所は明確で、一見接合式に見えるが、断面として男瓦部は不明確で、瓦当構築とともに一体的に構築したものと考えられる。

焼成は良好で、胎土は粗く、1~2mm程度の白色砂粒を多数含む。

SKM35 (第31・32図 - 57~60)

57・58・59・60は巴文釐瓦で、珠文の形状から同文異范であるが、57と59は同范である可能性がある。珠文数は20個で、巴頭は形は整っているが、3つとも異なっている。巴尾は細く長い。いずれも立体的で、巴は断面台形である。57から接合式と考えられる。男瓦部は、凸面側は縦方向のナデ調整で、凹面は条切りで、細かな布目が残る。瓦当裏面は全体に板状工具で粗いナデ調整を施した後男瓦部の下位にあたる個所を一度に横方向のナデ調整を施す。男瓦部の端部を接合後にナデ等によって調整を行っている。

焼成は良好であるが、いぶしは均質ではない。胎土は密で、均質で、1~3mm程度の白色や茶色、黒色の砂粒を含む。

SKM36 (第32図 - 61)

小形の巴文釐瓦である。珠文数は不明だが、大きく円形が整っている。巴頭は不整形でやや尖り気味で、

巴尾は細く長い。いずれも立体的である。焼成は良好で、胎土は密で1mm以下の白色砂粒を均質に含む。男瓦部は、凸面側は縦方向のナデ調整で、凹面は非常に緻密な布目が残る。瓦当裏面は円形状にナデ調整を施す。

SKM37 (第32図 - 62)

巴文鏡瓦である。珠文数は不明だが、非常に少ないタイプである。巴頭はやや不整形だが円形を呈し、巴尾は太く短い。いずれも立体的で、巴は断面台形である。瓦当裏面調整は佐川分類Cで、中央部に瓦范に押し当てた痕跡が残る。

焼成は非常に軟質で、胎土は密で、1～3mm程度の白色砂粒を多量に含んでいる。

SKM38 (第32図 - 63)

巴文鏡瓦である。珠文数は9個で、巴頭は不整形な円形で、巴尾は太く短い。文様は非常に平面的な表現である。瓦当裏面はナデ調整で仕上げる。一見接合式に見えるが、断面として男瓦部は不明確で、瓦当構築とともに一体的に構築したものと考えられる。

焼成はやや不良で、胎土は粗く、1～3mm程度の白色、黒色の砂粒を多量に均質に含む。

SKM39 (第32図 - 64)

巴文鏡瓦である。珠文数は不明だが大きい。巴頭は整った円形で、巴尾は太く短い。いずれも立体的で、巴は断面台形である。剥離材としてキラ粉を使用する。瓦当裏面調整は佐川分類Cで、中央部に瓦范に押し当てた痕跡が残る。

焼成は良好で、焼されている。胎土は密で、1mm以下の茶色の砂粒を均質に含む。

SKM40 (第32図 - 65)

巴文鏡瓦である。珠文数は不明で、巴頭は不整形なやや尖り気味で、巴尾は細く長い。いずれも立体的である。キラ粉を剥離材として使用しており、瓦当裏面調整は佐川分類Cである。男瓦部は、凸面側は縦方向の丁寧なナデ調整で、凹面は粗い布目状の痕跡が一部認められる。棒状叩き痕跡が残る。瓦当裏面は丁寧なナデ調整で仕上げる。特に接合部は丁寧にナデ調整を施す。

焼成は良好で、胎土は密で、1mm以下の白色砂粒が均質に含む。

SKM41 (第32図 - 66)

巴文鏡瓦である。珠文数は不明だが、大きな整った円形を呈する。巴頭はやや不ぞろいな円形で、巴尾は細く短い。瓦当面には范の板状痕跡が残る。いずれも立体的である。剥離材はキラ粉を使用している。瓦当裏面調整は佐川分類Cで、中央部に瓦范に押し当てた痕跡が残る。断面として男瓦部は不明確で、瓦当構築とともに一体的に構築したものと考えられる。

焼成は良好で、胎土は密であり、1mm以下の白色砂粒を均質に含む。

SKM42 (第32図 - 67)

巴文鏡瓦で、珠文の形状が整っており、大きいが少ない。巴頭は比較的整っており、細く長く伸びる。非常に范抜けが良い。瓦当裏面は板状の工具で丁寧にナデ調整を施す。表面は焼されており、焼成は良好である。胎土は密で、砂粒はほとんど含まない。

SKM43 (第32図 - 68)

巴文鏡瓦で、珠文の形状は整っており、小さい。巴の詳細は不明であるが、巴尾は長い。瓦当裏面は丁寧にナデ調整を施す。表面は焼されているが、焼成は良好である。胎土は密だが、1mm以下の白色砂粒を均質に含む。

SKM44 (第32図 - 69)

巴文鏡瓦で、珠文は小さく少ない。巴頭は整っており、巴尾が長く、隣接する巴と接続する。瓦当は離れ砂が用いられている。瓦当裏面はナデ調整である。表面は焼されているが、焼成は軟質である。胎土は密で、1mm以下の白色、黒色の砂粒が均質に含まれる。

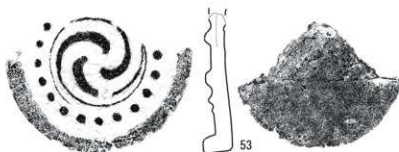
SKM45 (第32図 - 70)

巴文鏡瓦で、詳細は破片のため不明であるが、同様なものはない。瓦当裏面は粗いナデ調整である。表面は焼されるが、焼成は軟質である。胎土は1～5mm程度の砂粒を多量に含む。

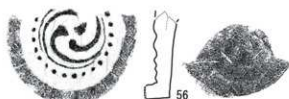
SKM46 (第32図 - 71)

巴文鏡瓦で、珠文の形状は整っており、大きい。巴の詳細は不明である。表面は焼されているが、焼成は軟質である。胎土は密だが、1mm以下の白色砂粒を均質に含む。

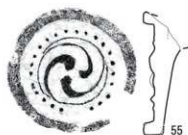
SKM32



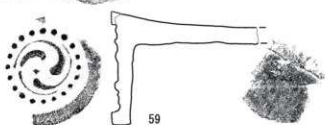
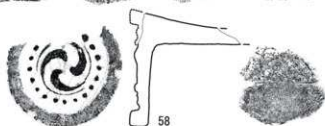
SKM34



SKM33



SKM35



第 31 図 甕瓦 SKM32 ~ 35 (S=1/4)

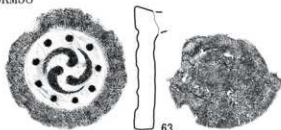
SKM35



SKM37



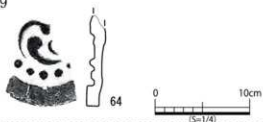
SKM38



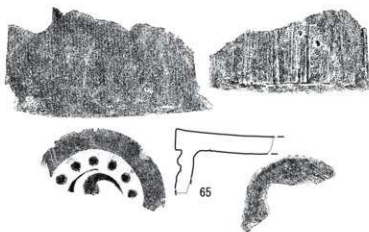
SKM36



SKM39



SKM40



SKM41



SKM42



SKM43



SKM44



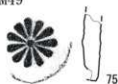
SKM45



SKM46



SKM49



SKM47



SKM48



SKM50



第32図 甕瓦 SKM35～50 (S=1/4)

SKM47 (第32図 - 72・73)

菊丸瓦である。文様は摩滅する。裏面はナデ調整によって仕上げる。焼成は軟質で、胎土は粗で、1～3mm程度の白色、茶色の砂粒を含む。

SKM48 (第32図 - 74)

菊丸瓦で、半分以上が欠損している。大きさや花卉数は異なるが高松城分類の菊丸瓦23に類似している。剥離材としてキラ粉を使用している。瓦当裏面は丁寧なナデ調整によって仕上げる。男瓦部は凸面側を横方向のナデ調整によって仕上げ、凹面には桶巻状の圧痕が残る。焼成は良好で、胎土は密で白色砂粒を僅かに含む。

SKM49 (第32図 - 75)

小型の菊丸瓦で、外縁は欠損している。菊花は11

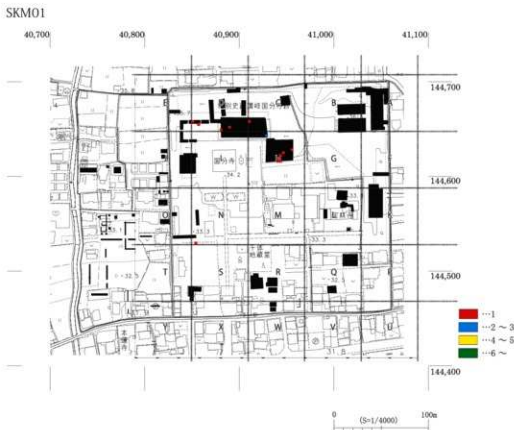
である。高松城分類の菊丸瓦23に類似している。瓦当裏面はナデ調整である。焼成は良好で、胎土は密で1～2mm程度の白色砂粒と5mm程度の砂粒を僅かに含む。

SKM50 (第32図 - 76)

重弁と推測される鉦瓦。破片であるため、詳細は不明であるが盛りあがる弁に対して花卉の輪郭は線状に表現されている。

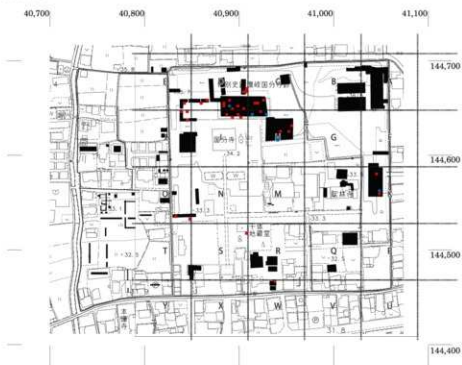
註

- (1) 上原貞人氏の御教示による。
- (2) 小澤毅氏の御教示による。

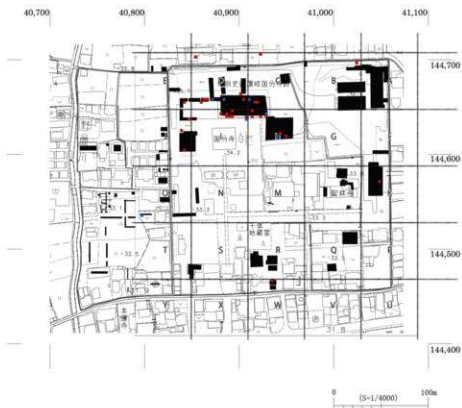


第33図 鉦瓦出土位置図 SKM01 (S=1/4000)

SKM02



SKM03A

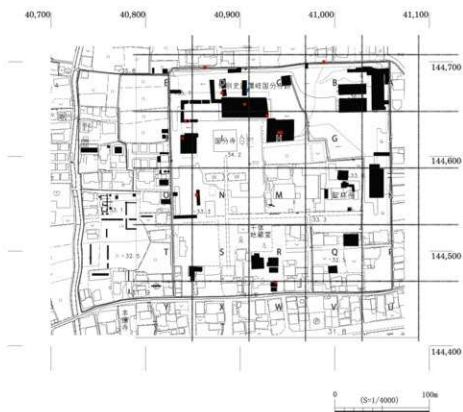


第 34 図 鏡瓦出土位置図 SKM02・03A (S=1/4000)

SKM04

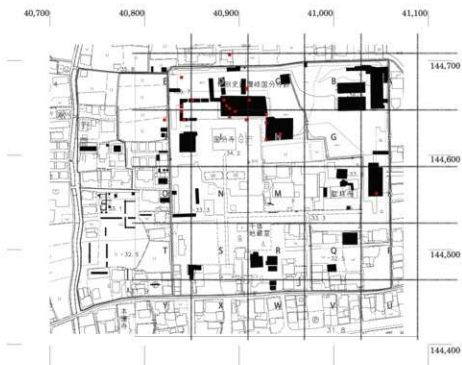


SKM05

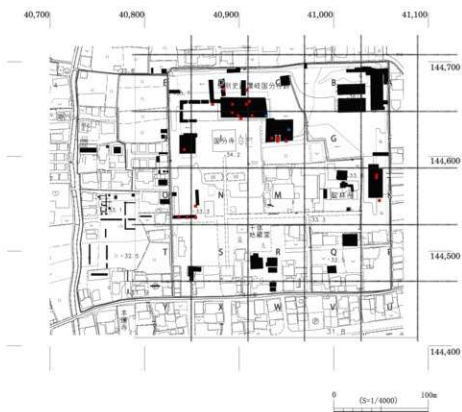


第 35 図 鍔瓦出土位置図 SKM04・05 (S=1/4000)

SKM06



SKM07

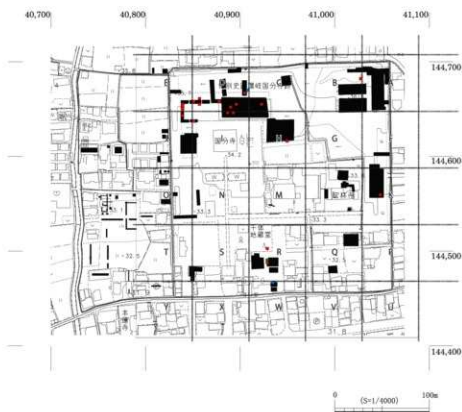


第36図 甕瓦出土位置図 SKM06・07 (S=1/4000)

SKM08

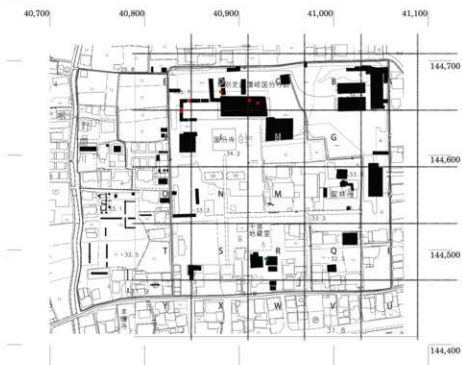


SKM09

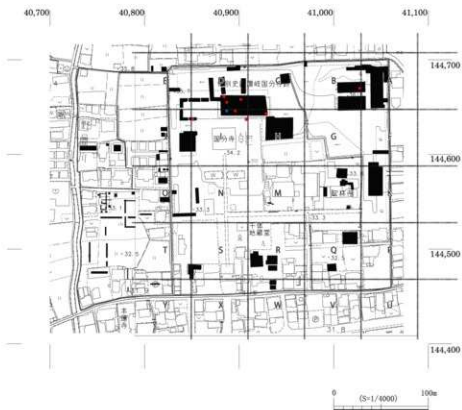


第 37 図 瓦出土位置図 SKM08・09 (S=1/4000)

SKM15



SKM17



第38図 甕瓦出土位置図 SKM15・17 (S=1/4000)

第1表 鋸瓦出土位置一覧表

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM10A	DS-04	2
2	SKM10A	IC-09	1
3	SKM10A	DS-06	1
4	SKM10A	DR-03	1
5	SKM10A	DR-17	1
6	SKM10A	不明	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM10B	DA-53	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM11	IB-03	1
2	SKM11	HB-13	1
3	SKM11	CE-53	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM12	DR-02	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM13	FB-13	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM14	IB-02	1
2	SKM14	IA-03	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM16	CR-13	2

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM18	DT-03	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM19	IC-08	1
2	SKM19	DR-13	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM20	IB-03	1
2	SKM20	DS-03	1
3	SKM20	HB-18	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM21A	IC-09	1
2	SKM21A	HC-18	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM21B	不明	2

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM22	不明	1
2	SKM22	HC18	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM23	DL-09	1
2	SKM23	DK-03	1
3	SKM23	IO-00	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM24A	ID-00	1
2	SKM24A	JD-02	2
3	SKM24A	不明	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM24B	JM-02	1
2	SKM24B	不明	1
3	SKM24B	DT-06	1
4	SKM24B	不明	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM25	DK-13	1
2	SKM25	DA-49	1
3	SKM25	DQ-13	1
4	SKM25	IA-03	1
5	SKM25	QH-47	1
6	SKM25	不明	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKM28	CF-25	1

第3節 宇瓦

SKH01の特徴

SKH01は4種類に分類され、文様構成や凹面調整等の差異が見受けられる。判別は中心飾りの形状がいずれの種類でも異なること、SKH01Cの下外区の鋸歯文が脇区を超える等が挙げられる。製作過程では、いずれの種類も凹面凸面をナデ又はケズリによる整形が見られる。しかし、顎の貼り付けはSKH01Bは明瞭に見えるものが多いが、他種には接合状況が見られないものが多い。凹面調整や側面成型で各種で差異が見られることから、工人や時期差があると考えられる。各型式の詳細は以下の通りである。

SKH01A (第39図・77～82)

均整唐草文字瓦。160点出土した。対葉花文を中心飾とし、背向する蕨手2葉を左右に各2転させ、空間を、楔形あるいはコマ状の小葉で埋める。背向する蕨手2葉の分岐点には、鐮形の尊を置く。上外区には13個の珠文、下外区には線鋸歯文が廻る。対葉花文を中心飾とする均整唐草文字瓦としては、大和東大寺式宇瓦(平城京6732系宇瓦)が有名であるが、

東大寺式宇瓦は通例の平城京式宇瓦と同様、同じ方向に弯曲した蕨手4もしくは5葉を左右に3転しており、讃岐国分寺の単位文様の観念に相違がある。また、下外区に鋸歯文を配する点も、顕著な違いである。技法は桶巻作り(80)と一枚作り(82)が確認できる。点数は破片であるものが多く、詳細な数は不明だが、桶巻作りよりも一枚作りがかなり多い。SKH01Aは范の掘り直しが見られることが分かった⁽¹⁾。写真図版9-1の下外区を見ると、81と82ともに粘土板一枚づくりであるが、81には彫り直しがなく、82には彫り直しが見られる。このことから桶巻作りの点数が少ない点は考慮する必要があるが、80等の桶巻作りの個体には掘り直しの范のものは見られないことから桶巻作りから一枚作りへ変化したと考えられる。また、下外区の彫り直しの段階で瓦范全体の彫り直しがあった可能性があり、全体的に角がとれ丸み帯びたものになると考えられる。顎の形状は、分類が難しいものもあるが曲線顎と直線顎がある。顎の貼り付けは明瞭でないものが多い。女瓦部も含めた法量は、長辺32.5～34.5cm×広端幅27.5～28.0cm×狭端幅26.5cmである。長辺は34.5cm程度のものが多い。凸面凹面ともにナデやケズリ調整するものが多く、技法

の痕跡が残らないものが多い。中でも凸面には平行叩きによる整形があるもの(77)や、朱が付着しているものがある。朱の痕跡から軒出は約6cmと考えられ、他の瓦で朱が見られるものも6cm前後である。凹面は側面の成型はケズリを1～2度行う。色調は青灰色～灰色系で焼成は良好なものが多いが、一部に黒褐色で内面が赤褐色で胎土に赤色粒を含むものが見受けられる。そのほかの特徴で、かなり少量であるがSKM03A等の横置き型一本作りで見られたノコクズのような痕跡が瓦当面に見られる。

出土位置は第53図で示している。同范瓦は讃岐国分尼寺(KB201C)で出土している。讃岐国府跡でも出土しているがごく少量である。時期はⅠ～Ⅱ期である。

SKH01B (第40・41図 - 83～89)

文様構成はSKH01Aに等しい。101点出土した。技法は確認できるものは一枚作りである。布端痕が確認できるものもある(85)。粘土板合わせ目痕等の桶巻作りを示すものは確認されていない。顎の形状は判断に難しいものもあるが曲線顎である。顎の貼り付けは明瞭に見られるものが多い。顎部の割れ口に、糸切痕のある曲面を持った粘土剥離面が現れているものがある点などから、厚手の粘土板をベースに粘土裁断時のクズ等を継ぎ足して、瓦当部を成型したと推定できる。残存している個体の法量は長辺32.5cm×広端面25.5～27.0cmである。凹凸面は両面ともにナデやケズリ調整するものが多く技法の痕跡が残らないものが多い。凹面に痕跡が残るものとして85のように平行叩き又はハケ目のような痕跡が見られるものもある。朱が付着しているものがあり、軒出は約6～8cmである。凹面には側面側に調整を入れる。側面の成型はケズリ1度である。色調は灰色～暗灰色系で焼成は良好である。他のSKH01に比べ胎土に砂粒を多く含む傾向にある。そのほかの特徴として鐘樓跡からは焼成後に製品を凹面の両側面に連続的敲打を加えているものも出土している。

出土位置は第53図で示している。同范瓦は讃岐国分尼寺跡(KB201B)から出土している。時期はⅠ～Ⅱ期である。

SKH01C (第42～44図 - 90～99)

文様構成はSKH01A・Bに等しいが、下外区の鋸歯文が脇区に食い込む。176点出土した。技法は粘土

板桶巻作り(96・98)と一枚作り(95)が確認できる。出土割合はSKH01Aと同様で一枚作りの割合がかなり高い。94は桶巻作りであり、側面に分割線が見られるが、文様を切っており、桶巻に巻いている状態で叩きを行っていると考えられる。技法における前後関係は范傷の進行具合を見ると、桶巻作りのものは左側の内区端に范傷がなく、一枚作りの段階で范傷が見られることから、SKH01Aと同様に桶巻作りから一枚作りへ変化する。顎の形状は判断に難しいものもあるが曲線顎である。顎の貼り付けはSKH01Aと同様に確認できるものはほとんどない。残存しているものの法量は長辺34.5～41cm×広端幅27.0cm台である。凹凸面は他のSKH01と同様でナデ又はケズリによる整形をしているものが多いが、90・95・99のように格子叩きや平行叩きの痕跡が残るものがある。また、朱が残っているものがあり(92・93)、軒出が約6～8cmと考えられる。凹面には側面側に調整を入れていたものが半数近くある。側面の成型はケズリ1～2度を施す。女瓦部は粘土板を2枚重ねているものがある。色調は灰色～暗灰色系で焼成は良好である。僧房跡北西で隅切瓦を確認した。

出土位置は第54図で示している。讃岐国分尼寺跡(KB201A)から同范瓦が出土している。讃岐国府跡でも出土するが、1点のみである。時期はⅠ～Ⅱ期である。

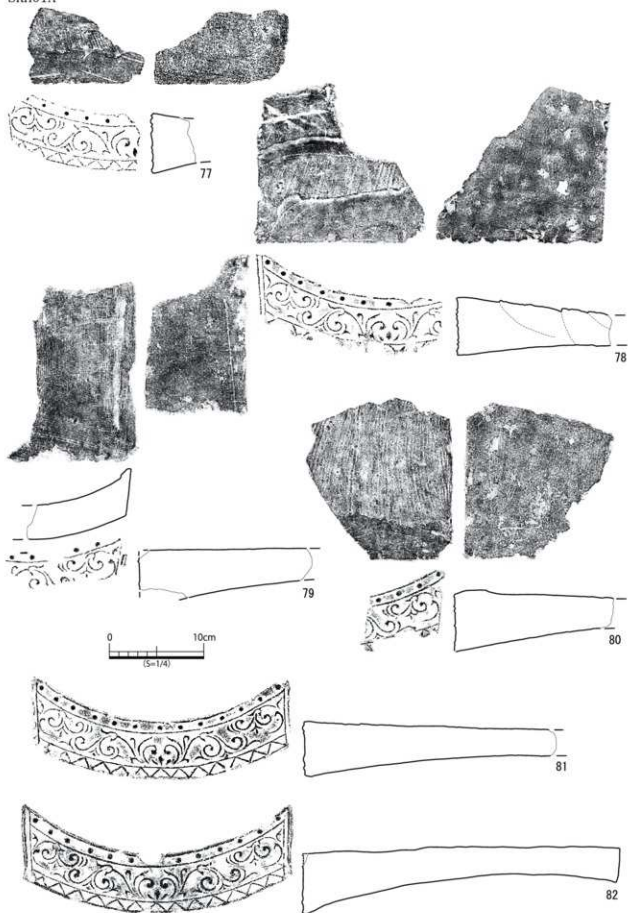
SKH01D (第44図 - 100)

均整唐草文宇瓦。2点出土している。文様構成はSKH01A・B・Cに等しい。ただし、上下外区に線鋸歯文が廻る点でA・B・Cと異なる。文様の細部は形態化し、崩れている。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好である。凹面の瓦当近くは、横ケズリを施している。時期はⅡ～Ⅲ期である。

SKH02 (第44図 - 101)

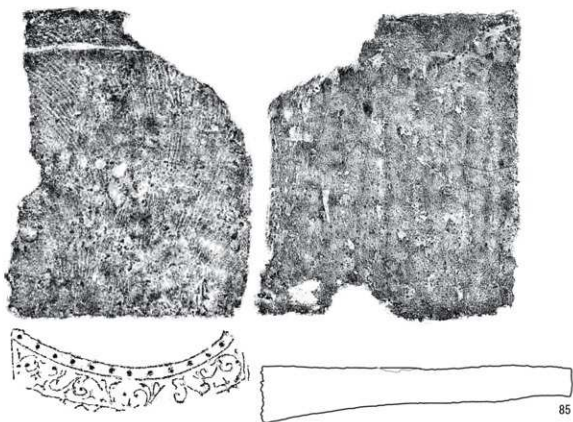
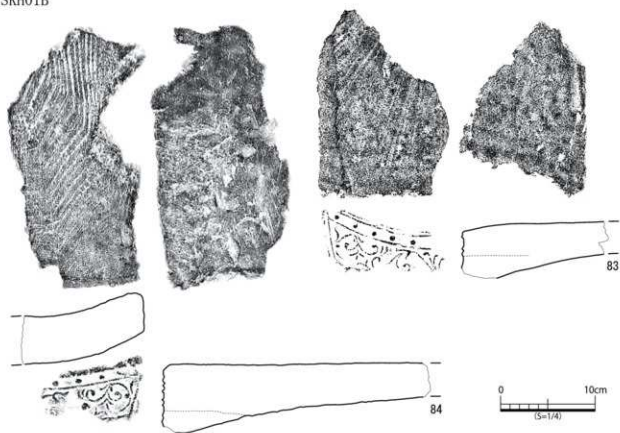
均整唐草文宇瓦。16点出土した。SKH01の文様系譜下にあると考えられるもので上外区と下外区の構成は同じである。中心飾りもSKH01Bと近似し、対葉花文が形態化したものである。蔵手は渦巻き状に変化する等SKH01に比べ形態化したものと考えられる。素地は判明できるものはなかったが、糸切痕が見られることから粘土板作りである。顎の形状で確認できるものは曲線顎である。顎は女瓦広端面凸面に別粘土を貼りつけて瓦当部を成型している。

SKH01A



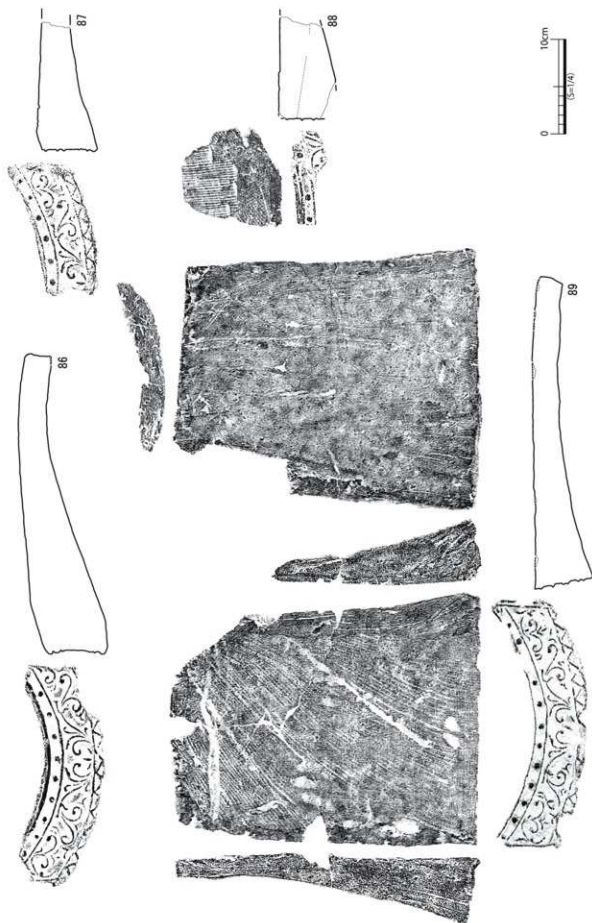
第 39 図 宇瓦 SKH01A (S=1/4)

SKH01B



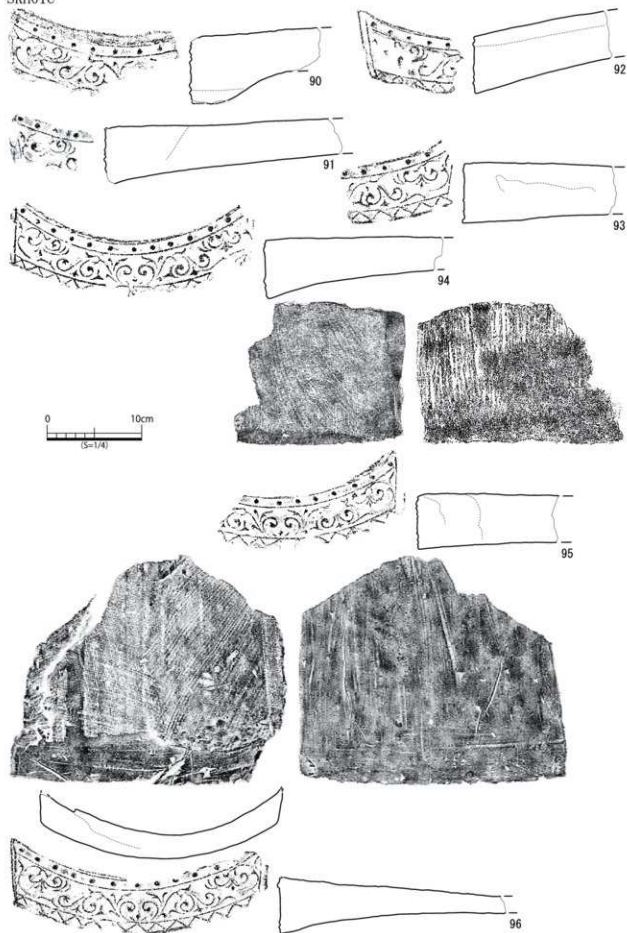
第40図 字瓦SKH01B ① (S=1/4)

SKH01B

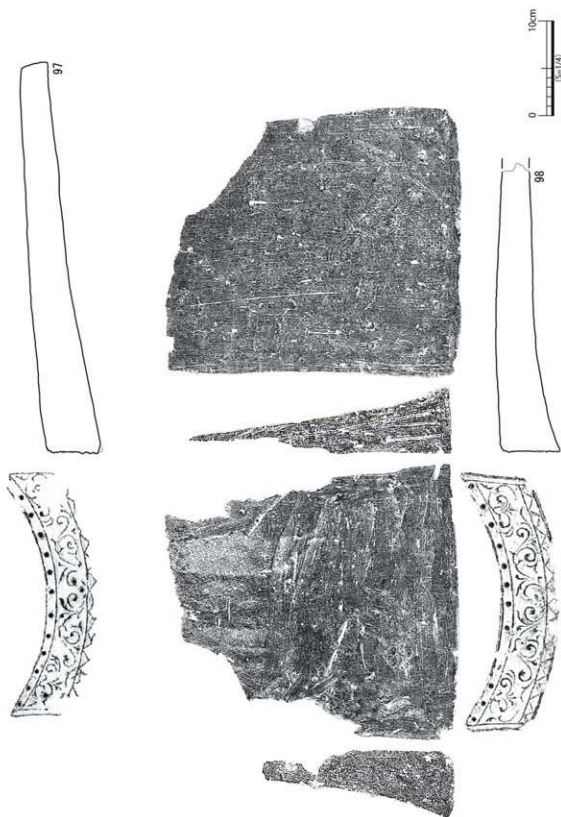


第 41 圖 宇瓦 SKH01B ② (S-1/4)

SKH01C

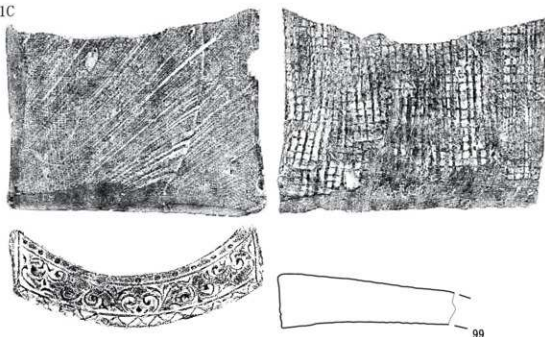


第42図 宇瓦 SKH01C ① (S=1/4)

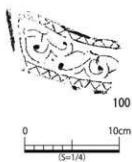


第 43 圖 宇瓦 SKH01C ② (S=1/4)

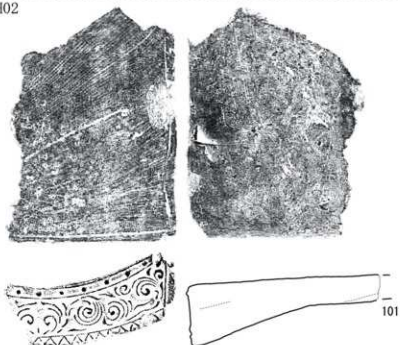
SKH01C



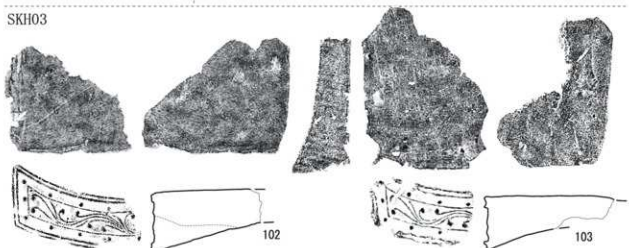
SKH01D



SKH02

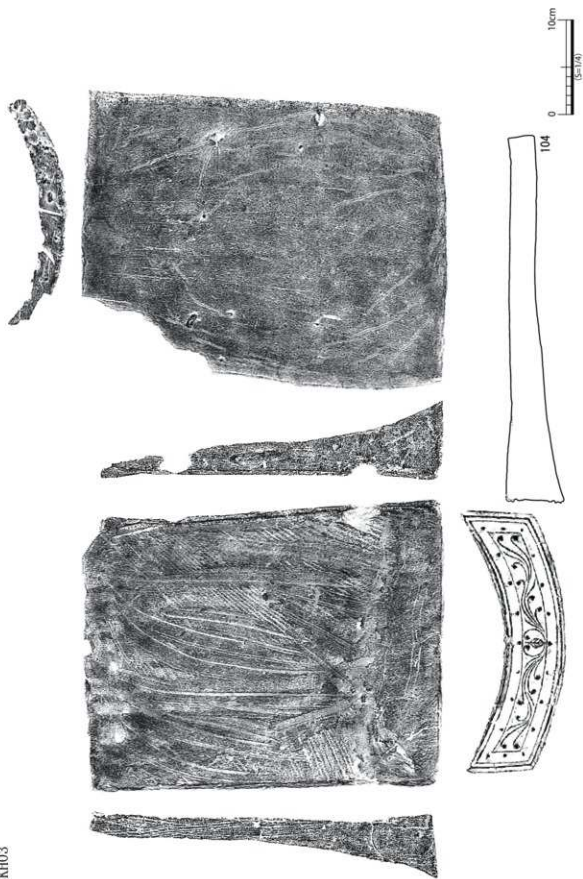


SKH03



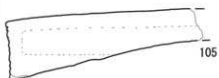
第44図 字瓦 SKH01C ③～03 (S=1/4)

SKH03



第45図 字瓦 SKH03 ② (S=1/4)

SKH04



105

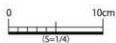


106

SKH05A



107

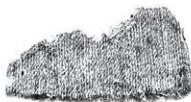
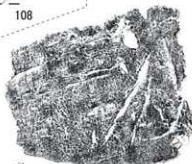


SKH05B

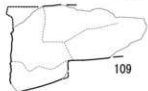


108

SKH06



110



109

第46図 宇瓦 SKH04～06 (S=1/4)

色調は灰色～淡赤色のものが多く、焼成は軟質である。

出土位置は第54図で示している。時期はⅡ期である。

SKH03 (第44・45図 - 102～104)

均整唐草文宇瓦。108点出土した。SKH01型式よりも出土量が多い。中心飾はC字上向型内に木葉状文を垂下し、長くのびた蕨手3葉を左右に各3転させ、先端に珠文状の突起がつく。上外区・下外区に各9個、左右両脇区に各1個の珠文を配す。外区脇区に額線がつく。技法は模骨痕が確認できるもの(104)があり、粘土板桶巻作りと考えられるが、SKH01と同様に凹凸面をナデ又はケズリによる整形で痕跡を消されていることから一枚作りも存在する可能性は十分にある。額の形状は曲線額が主流であるが、直線額と考えられるものもある。色調は青灰色を呈し、焼成は堅緻である。この範種の特徴は灰被りをしているものが多く、この状況はSKM05やSKH06にも同様に見られる。僧房跡南東隅からは隅切瓦が1個体出土しており、その凹面には粘土板合せ目痕が確認できる。

出土位置は第55図に示している。同范瓦は普通寺市金倉寺から出土している。文様が唐招提寺605Aと類似すると考えられる。時期はⅡ期である。

SKH04 (第46図 - 105・106)

均整唐草文宇瓦。6点出土した。中心飾は異なるが、左右に反転する蕨手の形状はSKH03に似る。また、蕨手先端は円形の浮文ではなく渦巻き状になる。技法は粘土板合わせ目痕が見られることから粘土板桶巻作りと考えられる。また、105のように女瓦部に粘土板を積み込んで包み込みするいわゆる「包み込み技法」と推測されるものもある。額の形状は曲線額である。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。同范瓦は讃岐国分尼寺跡(KB208)で出土している。時期はⅢ期と考えられる。

SKH05A (第46図 - 107)

均整唐草文宇瓦。84点出土した。長方形内に納めた綾形文を中心飾とし、蕨手3葉を左右に各4転させる。蕨手は独立せず、一連で連結している。上下外区・脇区に珠文が廻る。額の形状は曲線額である。曲線部分の額を粘土板で張り合わせている。凸面はナデ整形する。朱が残っているものがあり、軒出が約6.0cmである。凹面は側面側等に調整する。

色調は灰色～淡橙色を呈し、焼成は軟質である。胎土に赤色粒を含んでおり鎔瓦SKM07と類似した胎土焼成である。上弦幅が大きいため、凹面瓦当部右角の瓦当側5cm内外を焼成前に切り落としているものが多いが、焼成後に打ち欠いているものもある。

出土位置は第55図で示している。時期はⅣ期である。

SKH05B (第46図 - 108)

文様構成はSKH05Aに等しい。9点出土した。点数はSKH05Aより少ない。SKH05Aと異なる点は爲が独立する点である。額の形状は曲線額で粘土板を張り付けている。色調は淡橙色を呈するものと黒褐色を呈するものがあり、焼成は軟質である。凹面には整形を施さず、布目圧痕が残る。凹凸面の調整や焼成胎土はSKH05Aと近似する。

SKH06 (第46図 - 109・110)

均整唐草文宇瓦。9点出土した。SKH03と文様構成が類似し、大型化したものだが、若干文様が全体的に崩れている。瓦当の高さは約6.0cmである。瓦当の取りつきは女瓦の上面に粘土を付けたし瓦当と接合する。額の形状は讃岐国分僧寺の中で唯一創建期に採用された段額である。凹面は全体的にナデ整形し、布目や糸切痕が若干残る。凸面も基本的にはナデ整形を施すが、110は細い縄縞系の叩きが見られる。ほとんどのもので灰被りが見られる。色調は灰色～青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に小石粒や赤色粒を若干含む。

出土位置は第56図で示している。文様の特徴はSKH03と類似しており、唐招提寺605Aの類似品と考えられるが、段額であることや珠文が小さい事を考慮すると、他の型式を模倣した可能性もある。時期はⅡ期である。

SKH07 (第47図 - 111)

飛雲文系均整唐草文宇瓦か。16点出土した。内区の飛雲文は、単位が重なるように配置されている。上外区はなく、当該位置に小型の飛雲文と考えられる模様がある。下外区は2段に分けて構成されると考えられ、鋸歯文帯と珠文帯で構成される。鋸歯文帯は内区の飛雲文が食い込む。額の形状は曲線額である。額部を張り付けた痕跡が見られる。凸面はナデ整形するが、一部に細い縄縞叩きが見られる。凹面は布目痕が

見られる。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好な製品が多いが、表面が黒褐色、内部灰白色で焼成軟質のものもある。

出土位置は第56図で示している。時期はⅢ期と考えられる。

SKH08 (第47図 - 112・113)

文様は著しく崩れており、文様構成の理解が困難な字瓦。21点出土した。文様が崩れすぎているのか本来の文様構成であるかは不明であるが、幾何学模様と化している。上外区は突線をいれ、小区画を形成する。脇区は無文である。顎の形状は曲線顎であるが、湾曲が緩く直線顎に近いものもある。顎は粘土板を張り付けて成型している。色調は灰色～淡茶褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土に赤色粒を含む。時期はⅣ期である。

SKH09 (第47図 - 114)

均整唐草文字瓦。10点出土した。C字上向形の上と中に三葉文を置いた中心飾の左右に波状の蔓草が流れる。一段高い上外区は竹管瓦痕の珠文がめぐり、下外区は珠文が突線化して長方形の区画が連続しているように見える。また、内区文様帯の下端に突線裾文帯を置く。顎の形状は曲線顎であるが、湾曲が緩く直線顎に近いものもある。凹面に糸切痕が見られ粘土板作りである。色調は黒褐色を呈し、焼成は、軟質である。胎土に赤色粒を含む。時期はⅣ期である。

SKH10 (第47図 - 115)

均整唐草文様字瓦。10点出土した。SKH03やSKH06を模倣して作られたと考えられるが、文様が崩れ胎土の状態も含めて劣化する。C字上向形を中心飾とした緩やかな波状の蔓草が流れる。外区には二重圏線内に合計20個の珠文を置く。珠文の左側に突線を引く。脇区と下外区に珠文を置くが精円形に近い形状になる。下外区は圏線により区画されている。顎の形状は曲線顎が多いが、直線顎に近いものもあり、顎の形状が明確ではない。女瓦部広端部凸面に別粘土を貼りつけて瓦当部を成型している。色調は淡茶色を呈し、焼成は軟質である。胎土に赤色粒を含む。同范瓦は讃岐国分尼寺跡(KB209)から出土している。時期はⅢ～Ⅳ期である。

SKH11A (第47図 - 116)

瓦当面の左端を残すのみだが、重瓦文字瓦であると考えられる。1点出土した。SKH46に比べ作りが雑である。推定東大門付近から1点出土した。五重弧文と推測される。色調は淡茶色を呈し、焼成は軟質である。小片のため、製作技術は不明である。時期はⅢ期と推測される。

SKH11B (第47図 - 117)

瓦当面の左端を残すのみだが、重瓦文軒瓦と推測される。1点出土した。SKH46に比べ作りが雑である。推定東大門付近から1点出土した。四重弧文と推測されるが、圏線を設けた脇区を設定しており、重郭文の可能性もある。

SKH12 (第47図 - 118)

輪違文字瓦。8点出土した。半円弧文を上下交互に置き、それに対応して上区に3個、下区に1個の珠文を置く。凹面には瓦当側5cm内外に横位の粘土塊の合せ目線が見られ、糸切痕はその線を境にして連続しない。したがって、厚手の粘土板をベースに凹型台を使用し、粘土裁断時のクズ等を継ぎ足して瓦当部成型したと考えられる。顎の形状は曲線顎である。残存状況が良いものは、長辺約32cmである。凹面には、布目瓦痕・糸切痕が残る側面に調整を加える。凸面は縦ケズリで整形する。色調は暗赤褐色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に赤色粒を含む。時期はⅣ期か。

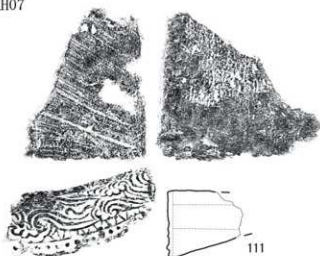
SKH13 (第48図 - 119)

均整唐草文様字瓦。9点出土した。中心飾りに長方形の区画に納めた4個の珠文を置き、背向する蔵手2葉を左右に各2転させる。上下外区には珠文が廻る。製作技法はSKH05Aと共通する。残存状況から瓦当幅は約30cmである。顎の形状は曲線顎である。凸面に朱が付着しているものがあり、軒出は約3.5cmと約5.0cmである。色調は褐灰色～淡黄色を呈し、焼成は軟質である。胎土に赤色粒を含む。時期はⅣ期である。

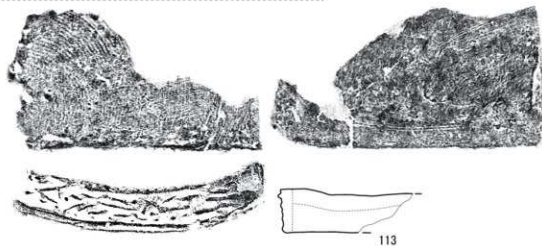
SKH14 (第48図 - 120)

瓦当面の中心部分を残すのみであり、文様構成は不明である。1点出土した。その中心飾はSKH13と似ている。しかし、左右で文様構成が異なることが特徴である。上外区は珠文帯があると推測される。色調は淡黄色を呈し、焼成は軟質である。時期はⅣ期である。

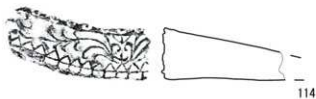
SKH07



SKH08



SKH09



SKH11A



SKH10



SKH11B



SKH12



第47図 宇瓦 SKH07 ~ 12 (S=1/4)

SKH15 (第48図 - 121)

均整唐草文字瓦。2点出土、採取されている。三葉文を入れたC字上向形を中心飾りとする。形骸化した蕨手が展開し、端の蕨手は綾杉文に近い模様になる。上外区・脇区には珠文を置き、下外区には線鋸歯文が廻る。しかしながら、右脇区は珠文がない可能性がある。凹面は調整を施さず布目圧痕が残る。凸面は縦ケズリで整形する。色調は灰色を呈し、焼成は堅緻である。

SKH16 (第48図 - 122)

唐草文字瓦。著しく崩れており、詳細な文様構成は不明である。7点出土した。瓦当面に糸切痕が見られることから折り曲げ式一枚作りの可能性もあるが、確認できる数量が少量であるため、断定できない。顎の形状は曲線顎である。法量が分かる部位で長辺約28.0cm×瓦当幅約27.9cmである。凹面は糸切痕と布目痕を残し、凸面は縦ケズリで整形する。色調は黒褐色を呈し、焼成はやや良好である。胎土に赤色粒を含む。

SKH17 (第48図 - 123)

均整唐草文字瓦。5点出土した。文様の細部は形骸化し、左右脇区の幅の法量が異なり、雑に製作された範種と考えられる。上外区に12個の珠文、下外区には線鋸歯文が廻る。瓦当幅は約22.0cmと他種に比べ小型である。凹面には布目圧痕を残し、模倣痕の見えるものがあることから、粘土板桶巻作りと考えられる。顎の形状は曲線顎である。色調は淡灰色を呈し、焼成はやや軟質である。

SKH18 (第48図 - 124・125)

唐草文字瓦。10点出土した。左右の蕨手の文様構成がやや崩れている。内区の唐草文は中心飾りがなく、左右で蕨手の展開が異なる。上下外区と脇区に鋸歯文を入れる。顎の形状は曲線顎と考えられるが、直線顎に近いものもあり、明確な顎の形状は定めなかった可能性がある。瓦当幅は約24.0cmである。凹面瓦当近くに調整を入れる。色調は橙～淡黄色を呈し、焼成は軟質である。胎土に赤色粒を含む。

SKH19 (第49図 - 126)

扁行唐草文字瓦。5点出土した。左から右へ蔓草が緩やかに流れる。蕨手の先端はいずれも丸みを帯び立

体感がある。上下外区・脇区には、珠文を配す。外区と脇区を設定する圏線は交差し、四隅に小区画を形成する。顎の形状は曲線顎である。顎部を粘土板で張り付けるものが見られる。凸面は基本的にナデやケズリ整形を施すが縄叩きの痕跡が見られるものが1点確認できる。色調は黄褐色を呈し、焼成は軟質である。同範瓦は西村遺跡、讃岐国分尼寺跡(KB211)から出土している。時期はIV期である。

SKH20 (第49図 - 127)

除刻花文を瓦当の上下から交互に覗かせた半載花文文字瓦。凹面には布目圧痕を残し、それが側面にまで回り込んでいる。凸面には粗い斜位の叩き目を施しており、十瓶山付近で焼かれたものであることが分かる。淡白色を呈し、焼成は軟質である。出土状況・胎土・色調・製作技術からSKM21Rと組み合わせ蓋然性がきわめて高いと思われる。

SKH21 (第49図 - 128)

連珠文字瓦で、11個の珠文を配するが、中心飾りとなる箇所は3個の珠文をまとめて配置し、その両側に4個の珠文を均等に配置する。その周りに界線をめぐらす。側面端部の形状等から凹面台による一枚作りと考えられる。凹面は布目をナデ調整によって消している。凸面は粗い縦方向のナデ調整である。焼成は良好で、やや燻されている。胎土は密で、1mm以下の白色砂粒を含む。

SKH22 (第49図 - 129)

均整唐草文字瓦。中心飾りは宝珠文で、蕨手状の唐草が1転し、さらに唐草が伸びやかに展開する。段顎である。瓦当顎部は丁寧なナデ調整によって仕上げる。女瓦部の凹面は細かな布目残り、凸面は縦方向の粗いナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で、胎土は密で、1mm以下の白色砂粒を均質に含む。

SKH23 (第49図 - 130)

均整唐草文字瓦。中心飾りは宝珠文で、蕨手状の唐草が2転し、さらに唐草が伸びやかに展開する。離れ砂が瓦当面に多量に残存している。段顎で折り曲げ技法と考えられる。女瓦部の凹面は糸切り痕跡と緻密な布目残る。凸面は粗い縦方向のナデ調整後、瓦当側のみ丁寧な縦方向のナデ調整、最後に顎部周辺を丁寧なヨコナデ調整となる。

SKH13



SKH14



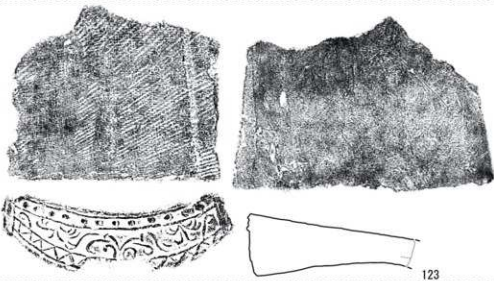
SKH15



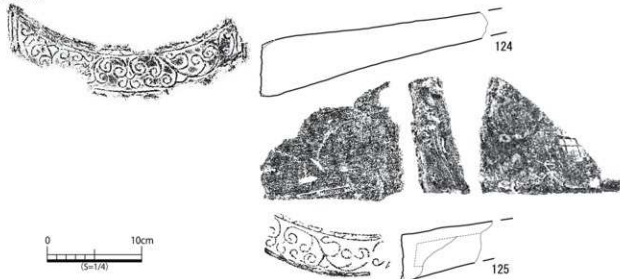
SKH16



SKH17



SKH18



第48図 宇瓦 SKH13～18 (S=1/4)

SKH19



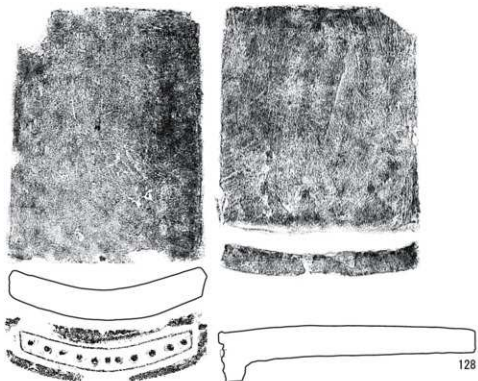
SKH20



SKH22



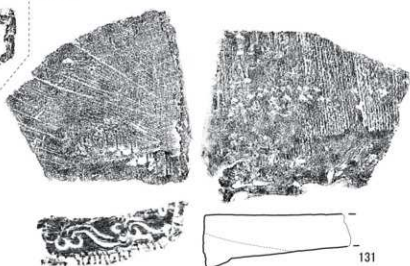
SKH21



SKH23



SKH24



SKH25



第49図 宇瓦 SKH19～25 (S=1/4)

SKH26



133

SKH27



134

SKH29



136

SKH28



135

SKH30



137

SKH31



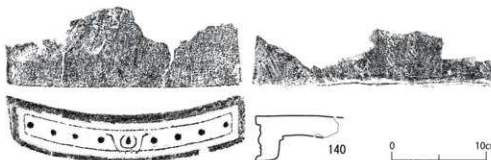
138

SKH32



139

SKH33



140



SKH34



141

SKH36



142

SKH35



143

SKH37



144

第50図 字瓦 SKH26～37 (S=1/4)

焼成は良好で、胎土はやや密である。

SKH24 (第49図 - 131)

陰刻飛雲文字瓦。文様構成はSKH07と似ているが、シンプルかつ形骸化したものになる。

凸面はナデ整形をするものが多いが縄斜系の縄目叩きが残るものがある。下外区は細かく尖った突線を入れる。顎の形状はにぶい曲線顎である。女瓦部下端部に別粘土を貼りつけ瓦当部を成型している。色調は灰色～暗灰色を呈し、焼成は良好である。

SKH25 (第49図 - 132)

扁行唐草文字瓦。全体の様相は不明であるが、外区に珠文帯を配置する。

SKH26 (第50図 - 133)

唐草文字瓦。SKH13に文様が類似し、均整唐草文になると推測される。色調はにぶい黄橙色で、焼成は良である。

SKH27 (第50図 - 134)

唐草文字瓦。瓦当面の磨滅が著しいため、判然としませんが、下外区側に稜線を4本配する。唐草文は弦の巻き方が強く、巴状になる。色調は灰白色で焼成は良であるが、軟質である。

SKH28 (第50図 - 135)

均整唐草文字瓦。内区は肥厚する主葉と小葉の唐草文が回り、上外区に稜線を配する。色調はにぶい黄色で、焼成は良である。

SKH29 (第50図 - 136)

均整唐草文字瓦。渦巻き状の唐草文であるが、非常に雑な瓦範である。色調は灰白色で焼成は良である。

SKH30 (第50図 - 137)

均整唐草文と考えられる字瓦。渦巻き状の唐草文である。同文が開法寺、双子山廃寺、妙音寺、道音寺、京都東寺、平安京内裏跡等から出土している(渡部2013)。

SKH31 (第50図 - 138)

字瓦であるが、小片であるため詳細は不明である。

SKH32 (第50図 - 139)

唐草文字瓦。小片であるため、詳細は不明であるが、上外区に珠文帯と鋸歯文を配置する。

SKH33 (第50図 - 140)

連珠文字瓦で、中心飾りは宝珠文である。中心飾りの両側に4個の珠文を配置する。その外側に界線をめぐらす。段顎である。顎後縁の面取りが認められる。瓦当面には多量に離れ砂が残存している。女瓦部の凹面は布目痕跡をナデ調整によって消している。凸面は粗いナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で、燻されている。胎土は密で、1～3mm程度の白色砂粒を多量に均質に含んでいる。

SKH34 (第50図 - 141)

連珠文字瓦で、中心飾りは宝珠文である。中心飾りの両側に5個の珠文を配置する。その外側に界線をめぐらす。SKH33と同系統の文様であるが、中心飾りの形状と珠文数が異なる。同系統の文様のものが坂出市白峯寺から出土している。段顎で、折り曲げ技法と考えられる。女瓦部の凹面は細かな布目が残る。凸面は縦方向の粗いナデ調整である。焼成は良好で、やや燻し気味である。胎土はやや粗で、1～2mm程度の白色砂粒を含む。

SKH35 (第50図 - 142)

中心飾りは宝珠文と考えられ宝珠唐草文字瓦と考えられる。両側に蕨手状の唐草が2転する。瓦当面には離れ砂が多量に残存している。段顎である。女瓦部の凹面は糸切り痕跡と緻密な布目痕跡が残る。凸面は縦方向のナデ調整によって仕上げる。顎部は丁寧な横方向のナデ調整によって仕上げる。焼成はやや軟質で、胎土は密で、1mm以下の白色砂粒を均質に含む。

SKH36 (第50図 - 143)

中心飾りは不明確であるが、宝珠文と考えられる。蕨手状の唐草が細かく左右に展開する。段顎で、瓦当貼り付け技法と考えられる。女瓦部の凹面は布目痕跡を横方向のナデ調整で消している。凸面は横方向の丁寧なナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で、黒く燻されている。胎土はやや粗で、1～2mm程度の白色、茶色の砂粒を含む。

SKH37 (第50図 - 144)

瓦当面の剥落が著しく、全体像は不明である。段額で、顎貼り付け技法と考えられる。女瓦部の凹面は丁寧なナデ調整によって仕上げる、凸面は縦方向のナデ調整である。焼成は良好で、やや燻し気味である。胎土は密で、1mm以下の白色砂粒を含む。

SKH38 (第51図 - 145)

均整唐草文字瓦で、中心飾りは不明である。蕨手が左右に展開し、唐草の上下に蕨手状のものが3つ配置されるが、上部は蕨手が范の外側に及んでいる。段額で、折り曲げ技法である。女瓦部は凹面は細かな布目が残し、凸面は粗いナデ後に、瓦当成型時の指押さえの痕跡が顕著に残る。焼成は良好で、胎土はやや粗で、1mm以下の白色砂粒を含む。

SKH39 (第51図 - 146)

均整唐草文字瓦で、中心飾りは宝珠文である。中心飾りも含め、文様は線状の表現である。蕨手状の唐草が2転以上する。直線型である。女瓦部は凹凸面ともにナデ調整によって仕上げている。焼成は良好で、胎土は密で、1～4mm程度の白色、黒色、茶色の砂粒を多量に含む。

SKH40 (第51図 - 147～149)

宝珠唐草文字瓦で、中心飾りは先端が丸みを帯びた宝珠文である。蕨手状の唐草が2転する。147～149は同范の可能性があり、文様の残存状況、焼成等が全く異なる。147は剥離材としてキラ粉を使用している。高松城分類の宇瓦89に類似するが唐草の表現が異なる。段額である。148・149は瓦当貼り付け技法と考えられ、顎部周辺はヨコナデ調整によって仕上げる。148の女瓦部は凹凸面ともにナデ調整によって仕上げる。焼成は良好で、胎土はやや粗で、1～5mm程度の白色、黒色、茶色の砂粒を多量に含む。

SKH41 (第51図 - 150)

均整唐草文字瓦で、中心飾りは「十」字状の文様で、その両側に唐草が3転する。高松城分類の歴博出土165と同文である。文様は平坦な表現で、瓦当面には離れ砂が認められる。段額で、顎貼り付け技法driveである。女瓦部の凹面側は横方向のナデ調整で仕上げる。凸面側はやや粗い横方向のナデ調整で仕上げる。焼成は良好で、胎土は密で、1mm程度の白色砂

粒を僅かに含む。

SKH42 (第51図 - 151)

均整唐草文字瓦で、中心飾りは突線で表現した花文若しくは三葉文と考えられる。その両側に唐草が3本を跼状に配置し、更に蕨手状の文様を外側に配置する。高松城分類の宇瓦11、東の丸跡出土107と同文である。段額である。女瓦部の凹面側は横方向のナデ調整で仕上げる。凸面側は粗い縦方向のナデ調整である。顎部は丁寧な横方向のナデ調整である。焼成は良好で燻されている。胎土は密で、1mm以下の白色砂粒を僅かに含む。

SKH43 (第51図 - 152)

均整唐草文字瓦で、中心飾りは「※」形の文様で、その両側に蕨手状の唐草が3転するが、左右で唐草の反転が上下逆になる。高松城分類の宇瓦35・36と同様な系列であるが、文様の詳細は異なる。段額で、顎貼り付け技法である。瓦当外縁はナデ調整によって仕上げている。女瓦部の凹面は横方向のナデ調整、凸面は縦方向のナデ調整で仕上げている。顎部は特に丁寧なナデ調整で仕上げている。焼成は良好で燻されている。胎土はやや粗で、1～2mm程度の白色砂粒を多量に含む。

SKH44 (第51図 - 153)

均整唐草文字瓦で、中心飾りは半截花菱文で、その両側に蕨手状の唐草が2転する。唐草は節が肥厚する形状をしている。檀紙・御紙系の半截花菱文で、高松城分類の宇瓦132・133系統であるが、文様の詳細が異なっている。剥離材としてキラ粉を使用している。段額で、顎貼り付け技法である。女瓦部の凹面側は横方向のナデ調整で仕上げる。凸面側も横方向のナデ調整である。焼成は良好で、燻されている。胎土は非常に密である。

SKH45 (第51図 - 154・155)

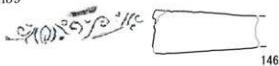
均整唐草文で、中心飾りは不明であるが、その両側に蕨手状の唐草が2転する。154・155は同范若しくは同文と考えられる。段額で、顎貼り付け技法である。女瓦部は凹凸面ともにナデ調整によって仕上げる。焼成はやや軟質で、胎土はやや粗で、1～3mm程度の白色、茶色の砂粒を含む。

SKH38



145

SKH39



146

SKH40

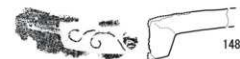


147

SKH41



150



148



149

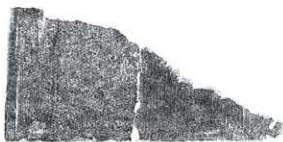
SKH42



151



SKH43



152

SKH44



153

SKH45



154



155

第51図 字瓦 SKH38～45 (S=1/4)

SKH46 (第52図 - 156)

四重弧文字瓦。採取されたのは1点のみで、現本堂の南東で採取されたものである。型引きである。頸の形状は曲線頸と考えられる。凸面は斜格子叩きが見られ、部分的にたたかれている。女瓦で分類した格子叩きには当てはまらない。凹面は模骨痕と推測される凹凸が見られる。色調は暗灰色で焼成は良である。

SKH47 (第52図 - 157)

上下反転する花文を中心飾りとし、先端部が肥厚する唐草を左右に配置する。段頸で、頸貼り付け技法である。剥離材としてキラ粉を使用する。女瓦部の凹面は丁寧な横方向のナデ調整で、凸面は粗い縦方向のナデ調整である。頸部は丁寧にナデ調整で仕上げる。焼成は良好で燻されている。胎土は密で、僅かに白色砂粒を含む。

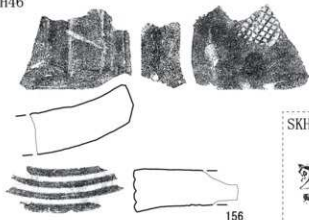
SKH48 (第52図 - 158)

均整唐草文字瓦である。上へと巻く箬手を6個以上規則正しく配置する。直線頸で、凹面は粗い布目の残り、一部ナデ調整を施す。凸面は粗い斜方向の縄目叩きである。側面に布目が及んでおり、一枚作りである。焼成は軟質で、胎土はやや密で、1～5mm程度の茶褐色砂粒を多量に含む。

SKH49 (第52図 - 159)

均整唐草文字瓦である。中心飾りは宝珠文で、箬手状の唐草が1転し、さらに唐草が伸びやかに展開し、SKH22に類似するが中心飾りが異なる。段頸で、瓦当貼り付けと考えられるが、粘土の継目が複数認められる。離れ砂を用いる。焼成は良好で、一部燻されている。胎土は密で、僅かに白色の砂粒を含む。

SKH46



156

SKH47



157

国分寺所蔵

SKH48



158

SKH49



159

SKH50



160

SKH51



161

SKH52



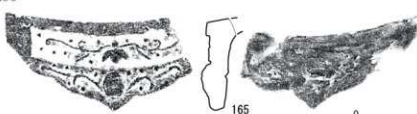
162

SKH53



163

SKH55



165

SKH54



164



第52図 字瓦 SKH46～55 (S=1/4)

SKH50 (第 52 図 - 160)

SKH22 の大型品である。段顎で、瓦当貼り付け技法と考えられ、瓦当裏面はナデ調整である。離れ砂を用いている。凹面は粗い布目である。1mm 程の砂粒を密に含むが、胎土は全体的に密である。

SKH51 (第 52 図 - 161)

破片のため、詳細は不明であるが、段顎で折り曲げ技法と考えられる。焼成は硬質で、胎土は密で、砂粒はほとんど含まない。

SKH52 (第 52 図 - 162)

文様の詳細は不明であるが、SKH36 に類似した文様である可能性がある。瓦当貼り付け技法の可能性がある。表面は燻されており、胎土はやや粗で、1mm 程の白色砂粒を多量に含む。

SKH53 (第 52 図 - 163)

字瓦で、文様は不明であるが、蕨手の形状、側縁部の幅から、近世瓦である。顎貼り付け技法である。焼成は軟質で、黄褐色を呈する。胎土はやや密で 1～3mm 程度の茶褐色砂粒を含む。

SKH54 (第 52 図 - 164)

破片であるため、詳細は不明であるが、胎土・焼成から古代に位置づけられると推測される字瓦である。上下外区を設けないことから平安期に入るものと推測される。色調は灰色で、焼成は軟質である。

SKH55 (第 52 図 - 165)

滴水字瓦で、外縁の下部には大きな宝珠を中心飾りとし、両側に唐草文を配置する。瓦当には中心飾りとして上下逆の三葉文状の文様を配置し、両側に唐草文を配置し、その周辺に珠文を配置する。段顎である。瓦当裏面は横方向のナデ調整によって仕上げる。焼成は軟質で、胎土は密で、1mm 以下の白色、茶色砂粒を多量に含む。

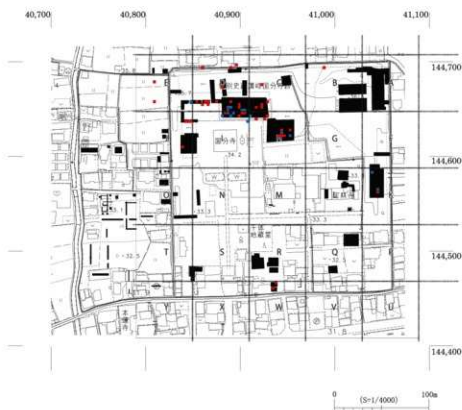
註

- (1) 花谷浩氏の御教示による。

SKH01A



SKH01B

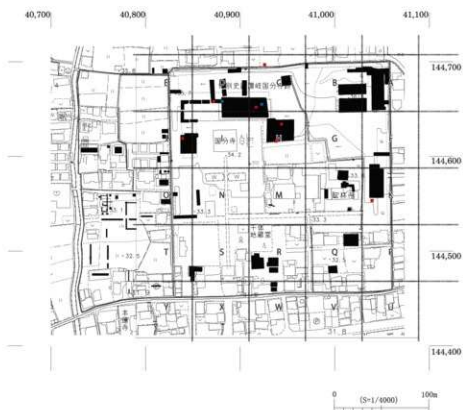


第 53 図 宇瓦出土位置図 SKH01A・01B (S=1/4000)

SKH01C



SKH02



第 54 図 宇瓦出土位置図 SKH01C・02 (S=1/4000)

SKH03

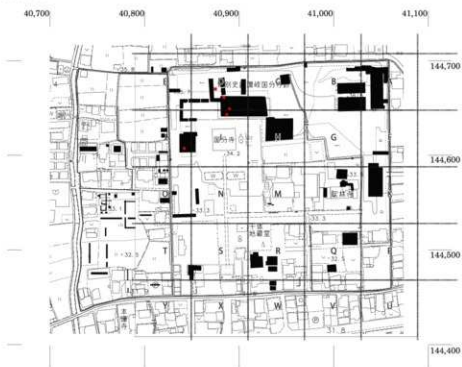


SKH05

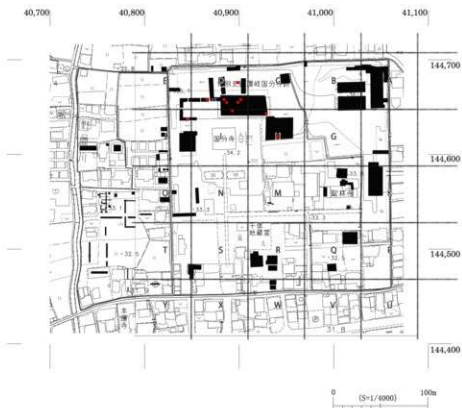


第 55 図 宇瓦出土位置図 SKH03・05 (S=1/4000)

SKH06



SKH07



第 56 図 宇瓦出土位置図 SKH06・07 (S=1/4000)

第2表 宇瓦出土位置一覧表

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH04	CH-48	1
2	SKH04	DA-53	1
3	SKH04	CE-53	1
4	SKH04	IB-02	1
5	SKH04	HD-13	1
6	SKH04	IB-02	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH08	DA-45	1
2	SKH08	DT-00	1
3	SKH08	DR-01	1
4	SKH08	DP-12	2
5	SKH08	HC-14	1
6	SKH08	DR-07	1
7	SKH08	EQ-00	1
8	SKH08	DQ-08	1
9	SKH08	FB-16	1
10	SKH08	JN-12	1
11	SKH08	DJ-14	1
12	SKH08	JD-12	1
13	SKH08	CS-17	1
14	SKH08	ID-18	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH09	EI-13	1
2	SKH09	DB-49	1
3	SKH09	EH-14	1
4	SKH09	CQ-19	1
5	SKH09	DM-09	1
6	SKH09	EH-14	1
7	SKH09	EC-14	1
8	SKH09	DQ-13	1
9	SKH09	DR-03	1
10	SKH09	DK-13	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH10	CT-17	1
2	SKH10	IA-07	1
3	SKH10	EG-13	1
4	SKH10	DR-19	1
5	SKH10	DQ-18	1
6	SKH10	IA-04	1
7	SKH10	IA-05	1
8	SKH10	不明	2
9	SKH10	DQ-12	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH11A	DB-48	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH11B	DA-45	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH12	DM-00	2
2	SKH12	DS-08	1
3	SKH12	CP-17	1
4	SKH12	EC-14	1
5	SKH12	JD-00	1
6	SKH12	DR-12	1
7	SKH12	HC-18	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH13	WA-11	1
2	SKH13	HB-13	1
3	SKH13	IA-05	1
4	SKH13	DS-02	2
5	SKH13	OH-47	1
6	SKH13	IB-03	1
7	SKH13	OR-01	1
8	SKH13	DS-03	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH14	HB-13	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH15	HB-13	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH16	CR-13	1
2	SKH16	DR-00	1
3	SKH16	JD-00	1
4	SKH16	JJ-03	1
5	SKH16	FB-14	1
6	SKH16	DM-00	1
7	SKH16	CR-17	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH17	JJ-63	1
2	SKH17	DP-12	2
3	SKH17	不明	1
4	SKH17	DR-06	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH18	CQ-15	1
2	SKH18	DQ-03	1
3	SKH18	CR-15	1
4	SKH18	DQ-15	1
5	SKH18	DB-49	1
6	SKH18	DR-06	1
7	SKH18	DS-06	1
8	SKH18	HA-18	1
9	SKH18	IB-03	1
10	SKH18	DQ-14	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH19	DT-24	1
2	SKH19	DR-00	1
3	SKH19	IB-01	1
4	SKH19	DS-07	1
5	SKH19	DT-03	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH20	DT-03	1
2	SKH20	DS-06	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH24	DB-49	1

番号	型式	グリッド名	点数
1	SKH34	不明	1
2	SKH34	不明	1
3	SKH34	IA-05	1

第4節 男瓦

男瓦の分類は第一段階として「玉緑式男瓦」か「行基式男瓦」に分け、分類を行った。その後、各型式において技法や法量を中心に分類を行い、調整や胎土等の分類ごとの特徴について明らかにしたい。特に、玉緑式男瓦は屋根に葺く際に玉緑式男瓦同士がずれなく組み合わせる必要があると考え、連結面すなわち狭端面(玉緑幅)と組み合わせる広端面側の計測を可能な限り行った。

完形等の狭端面幅と広端面幅の法量を比較できる資料は極わずかであったため、傾向をつかむことは容易ではないが、およそ狭端面と広端面の幅が同一であったり、狭端面と比べ広端面が+1～2cm広がる程度の差である。そのため、セット関係になりうる玉緑式男瓦の組み合わせは狭端面と同法量であるものがセット関係になると推測している。また、玉緑部の長さは成型台の規模を表すものと考えられるため、玉緑長も併せて計測した。そのため、玉緑式男瓦は玉緑長と狭端面(玉緑幅)を0.5cm単位で計測し、分類を行った(【例】玉緑長5.0cm・狭端面14.0cm)。分類ごとに明確な特徴を特定できる種類は少なかったが、特定できる技法や特徴は明記したい。その他に分類別に当てはまらなくても技法等の詳細が分かるものは列記したい。その他に玉緑部の技法等は大脇氏の分類を参考にした(大脇1991)。また、玉緑形は、側面と平行する玉緑形aと斜めにカットする玉緑形bとする。

行基式男瓦に関しては法量を中心に分類した。しかし、第1章第1節で記したように、遺物の残存状況がよくないものは今回の分類作業を実施できずに収納しているため、全体の数量検証ができていないことから第3表で示す玉緑式男瓦の分類別出土量は傾向として表したい。

1) 玉緑式男瓦

記述は基本的に狭端面幅が狭いものから記述をする。各種類の出土量や分析ごとの出土量は第3～5表にまとめている。

3.5-12.5cmの166は凹面に布目痕が、凸面にナデ整形が見られる。玉緑の成型は技法Dである。玉緑形aと考えられる。色調は灰白色で焼成は良好である。玉緑の形や焼成胎土の状況から古代に位置づけられると考えられ、創建期のもものと比較すると小型の個体と考えられる。

5.0-12.5cmの167は凹面に糸切痕(コビキA)が

見られ、幅広い調整を1度入れる。凸面は縦方向のナデ整形である。玉緑の形状は玉緑形bである。色調は灰色で焼成を呈している。焼成や形状、サイズから中世頃に見られる瓦の特徴をしていることから同様の時期のものと考えられる。同時期に位置づけられるものとして168・169は同様の特徴や法量であることから同時期のもものと考えられる。

4.0-13.0cmは170・171である。171の法量は長辺約27.2cm×狭端面幅約13.0cm×広端面幅約17.5cmである。凹面は布目痕と糸切痕、側面側に調整を1度入れる。凸面は荒いナデである。粘土板桶巻作りと考えられる。色調は灰色で焼成は良である。

3.5-13.5cmの172の長辺は約34.5cmである。凹面は布目痕と糸切痕、凸面はナデ整形が見られる。凸面の整形や側面のケズリ成型が荒い。色調は浅黄褐色で焼成は軟質である。胎土に白色粒を多量に含む。各部位の調整が荒いことや胎土が粗く軟質であることから創建期よりは新しく、平安時代に入るものと考えられる。

4.5-13.5cmの173の法量は長辺約31.0cm×狭端面幅13.5cm×広端面16.3cmである。凸面はナデ調整で、凹面は布目痕と糸切痕、粘土板合わせ目痕、調整1度が見られる。粘土板桶巻作りである。糸切痕は瓦の中心を起点に放射状に広がる。側面、広端面はケズリ1度による成型である。

4.0-14.0cmは175～177である。176・177は凸面に縄縦系の縄叩き後にナデ調整を施している。

4.5-14.0cmは178～181である。180は側面に分割痕があり、無調整である。粘土板桶巻作りである。玉緑の成型は技法Aである。凹面の特徴で側面側にバリ状の粘土痕を残し、調整はしないことが挙げられる。色調は灰白色で焼成は良である。この法量のもので玉緑成型が技法Cのものもある(180)。180は側面に分割痕があり、無調整であることからこの分類の特徴と考えられる。

3.5-14.5cmの184の法量は長辺約34.1cm×狭端面幅約14.5cm×広端面幅約16.2cmである。この分類の標準的なサイズである。凹面に布目痕、凸面に縄叩き(種類不明、縄縦系)後にナデ調整を入れる。側面は分割痕があり、無調整である。粘土板桶巻作りである。色調は灰色で焼成は良である。

5.0-14.5cmの185は凹凸面の側面側に調整を入れていないため、側面成型時に生じた粘土のバリが残っている。

4.0-15.0cmは186・187である。187の法量は長辺約32.0cm×狭端面幅15.0cmである。凹面に布目痕と糸切痕、粘土板合わせ目痕、凸面に横方向のナデ整形が見られる。粘土板桶巻作りである。側面と広端面ともにケズリ1度の成型である。色調は灰色で焼成は硬質である。

6.0-15.0cmの189の法量は長辺約32.0cm×狭端面幅約15.0cm×広端面幅約18.0cmである。凸面はナデ整形で、凹面は布目痕と粘土板合わせ目痕が見られる。粘土板桶巻作りである。側面はケズリ1度の成型である。色調は灰色で、胎土に6mm近くの大型の粒子を含むが基本的には小型で少量の粒子しか入らない。焼成は良である。

7.0-15.0cmである190は凹面に布目痕と糸切痕、調整1度が見られ、凸面はナデ整形である。玉縁の成型は技法Aである。

4.5-15.5cmの192の法量は長辺約32.3cm×狭端面幅約15.5cm×広端面幅約15.5cmである。凹面は布目痕、布かがり痕、凸面はナデ整形が見られるが、一部種類は不明だが、縄縋系の叩き痕が見られる。側面はケズリ1度である。玉縁の成型は技法Aである。色調はにぶい橙色で焼成は良である。

5.5-15.5cmは193・194である。193の法量は長辺約33.6cm×狭端面幅約15.5cm×広端面幅約16.5cmである。凹面に布目痕と糸切痕、凸面にナデ整形が見られる。色調は灰色で焼成は良である。194の長辺は約32.3cmである。凸面はナデ整形で、凹面は布目痕と糸切痕、布かがり痕、粘土板合わせ目痕が見られる。粘土板桶巻作りである。広端面は無調整である。色調は灰白色で胎土に赤色粒を含む。焼成は良である。

6.0-15.5cmは195である。法量は長辺約32.3cm×狭端面幅約15.5cm×狭端面幅16.5cmである。狭端面と広端面の幅の差が少ない個体である。この種類のものは同様の法量になるものが多いことから、この種類の一般的なサイズと考えられる。凹面に布目痕と布かがり痕、凸面にナデ整形が見られる。色調は灰白色で焼成は良で、他の個体も類似したものが多く。

7.5-15.5cmは196である。鉈瓦の瓦当部が剥がれ落ちたものである。凹面は布目痕、瓦当面側（広端面）はナデ整形が見られる。凸面はナデ整形が見られる。側面はケズリ1度の成型がされ、布目痕が残る。一本作りと考えられ、焼成や胎土の特徴や広端面が約15.5cmであることから瓦当径が同等のものであるSKM03AかSKM06が外れたと推測する。

4.0-16.0cmの197の法量は長辺約33.1cm×狭端面幅16.0cm×広端面幅16.7cmである。凸面に縄叩き（種類不明、縄縋系）後にナデ調整を施す。凹面は布目痕と布かがり痕、糸切痕が見られる。色調は灰色で焼成は良好である。

5.0-16.0cmは198～202である。200の長辺は約32.7cmである。凹面に布目痕、凸面に縄叩き（種類不明、縄縋系）にナデ調整を施す。側面は分割線があり、無調整である。粘土板桶巻作りと考えられる。玉縁の成型は技法Aで凸面に詰めた粘土の単位が明瞭に見える。201は凹面に布目痕が確認でき、凸面はナデ整形し、一部に種類は不明だが縄縋系の叩き具の痕跡が見られる。側面は分割線が見られ、無調整である。粘土板桶巻作りと考えられる。玉縁の成型は技法Aである。色調は灰色で焼成は良好である。202の法量は長辺約32.0cm×狭端面幅16.0cm×広端面幅約17.5cmである。狭端面と広端面の幅の差が小さい個体である。凹面に布目痕、糸切痕、凸面にナデ整形が見られる。凸面に灰被りが見られる。側面成型時に生じた粘土のバリが見られる。色調は灰色で焼成は良である。

また、198は唯一凸面から分割線を入れ、側面無調整の粘土板桶巻作りの個体である。一方で199の側面はケズリ1度の成型がある。凹面は布目痕と調整1度を入れ、粘土板合わせ目痕が見られる。粘土板桶巻作りである。凸面はナデ整形である。5.0-16.0cmの種類は側面の状況から2種類に分類できると考えられ、いずれも粘土板桶巻作りであることが特徴として挙げられる。

5.5-16.0cmは203～205である。法量は長辺約33.6cm×狭端面幅約16.0cm×広端面幅約17.0cmである。狭端面と広端面の幅の差が大きい個体である。他の個体もこの法量になるものが多く、この種類の基準となると考えられる。205は凸面に縄叩き（種類不明、縄縋系）後にナデ整形を施す。ベースとなる粘土板にくぼみがあり、粘土塊で埋めた痕跡がある。凹面は布目痕と糸切痕、布かがり痕が見られる。色調はにぶい黄橙で焼成は軟質である。203は凹面に布目痕と布継ぎ足し痕が見られる。また、側面側にバリ状の粘土痕が見られる。凸面にはナデ調整されている。色調は灰色で焼成は良好である。

6.0-17.5cmの207の法量は長辺約33.3cm×狭端面幅17.5cmである。他に比べ、大型品と考えられる。しかし、点数は2点とかなり少量である。凹面は布目痕が見られ、凸面はナデ整形が見られる。玉縁の成

型は技法Aである。色調は灰白色で、焼成は良である。図化していないが狭端幅が一回り大きい18.0cmサイズのものも点数は1点のみである。

3.5cm・玉縁幅不明の208は玉縁の成型が技法Dと考えられる。

4.0cm・玉縁幅不明の209は側面に分割痕が見られ、無調整であることから粘土板桶巻作りであると考えられる。色調は灰色で焼成は良である。玉縁の成型は技法Aと考えられる。

7.0cm・玉縁幅不明の211は側面に布目痕が見られ、一本作りと考えられものである。玉縁の成型は技法Dである。

212は玉縁の境目に落下防止の受けがあり、中世以降のものと考えられる。

2) 行基式男瓦

行基式男瓦は長辺の法量から約30.0cm台のA種、約31.0cm台のB種、約33.0～34.0cm台のC種に分類できる。

行基A（第77図）

A種は長辺約30.0cm台で狭端幅と広端幅は個体によって差が大きく、一定の幅を求めるのは難しい（213・214）。凹面は布目痕と粘土紐痕が見られる。よって粘土横紐巻（一木）作りと考えられる。凸面はナデ整形が見られる。側面はケズリ1度の成型である。色調は灰色やにぶい黄褐色等多数確認し、胎土も黒色粒や茶色粒等あり、ヴァリエーションが見られることから、より細分できると考えられる。焼成も良好なものと軟質なもの種類がある。

行基B（第78図）

B種は長辺約31.0cm台のものである。215は長辺約31.3cm×狭端幅約13.0cm×広端幅約14.7cmである。凹面には布目痕と糸切痕が見られる。粘土板作りである。凸面は、種類は不明だが縄目きによる整形後にナデ整形を行う。色調は灰色系で胎土に5mm前後の石英を含む等胎土がやや粗目である。焼成は良のものが多く。

行基C（第78・79図）

C種は長辺約33.0～34.0cm台のものである。216・217は長辺約33.1cm×狭端幅約17.1cm×広端幅約26.2cmである。凹面には布目痕と糸切痕が見ら

れる。粘土板作りである。凸面はナデ調整をするが216のように種類は不明だが縄目き痕跡が見られる。側面はケズリ1度の成型である。色調は灰色～にぶい黄褐色で焼成は良である。

分類不能の男瓦（第79図）

219は凸面に格子目（正格子A）が見られる。技法は粘土板桶巻作りである。色調は灰白色で焼成は良好である。220は凸面に平行目（平行K）が見られる。色調は灰色で焼成は良好である。

3) 小結

中世瓦の特徴として、凹面側に幅広の調整1度を入れること。狭端面と広端面の幅がほぼ等しいこと。玉縁形bであること。種し焼きをしているものがあり、焼成は良好なものが多いこと。胎土は僅かに白色粒を含む程度で精良であること。この4点が挙げられる。これに加え、傾向として狭端幅が13.5cm以下のものしか確認できていない。

凹面の側面側にバリ状の痕跡を残し、調整をしない個体（194等）は粘土板桶巻作りで法量や色調・胎土が近似することから、1～2種類の成型台を使用したと推測され、それに伴いこの特徴で製作に関わった工人は1～2人に限定されると推測される。

男瓦のいずれもナデ整形するが、叩き具の痕跡が残るものの種類は判別できないが縄縦系ものがほとんどである。もちろん正格子A、平行Kの個体も確認しているが、凹面に残存している叩き具は縄縦系であり、主体的に使用したと推測される。

連結面高は遺物観察表で示している通り、いずれも1.0～2.0cmに収まり、特に1.5cm±0.1cm以内のものが半数以上を占めることから、連結面高はいずれの種類も厳に規格化された可能性がある。やはり、連結部分の雨漏りを防ぐ意図と推察される。

玉縁の形は側面と玉縁部が一直線である玉縁形aであるものが大半である。玉縁形aは凹凸面や焼成等の特徴から創建期～古代末の種類に見られる特徴である。一方、玉縁部を斜めに切り、その側面を調整する玉縁形bは前述したように中世以降に見られる形である。古代から中世にかけて玉縁の形状が変化すると考えられる。

第3表 男瓦分類別出土量一覧表

玉縁長(cm)	玉縁幅(cm)	点数	備考
3	9	1	中世のみ
5	11	2	中世のみ
4.5	11.5	1	
3.5	12.5	1	
3	13	1	
3.5	13	2	
4	13	1	
4.5	13	6	中世あり
5	13	8	
3.5	13.5	3	中世あり
4	13.5	5	
4.5	13.5	17	
5	13.5	4	
5.5	13.5	9	中世あり
6	13.5	2	
6.5	13.5	1	
3.5	14	1	
4	14	10	
4.5	14	10	
5	14	15	
5.5	14	7	
6	14	1	
7	14	1	
3.5	14.5	1	
4	14.5	12	
4.5	14.5	7	
5	14.5	9	
5.5	14.5	7	
6	14.5	7	
6.5	14.5	1	
3.5	15	1	
4	15	4	
4.5	15	14	
5	15	14	
5.5	15	8	
6	15	3	
7	15	1	
4	15.5	7	
4.5	15.5	18	
5	15.5	12	
5.5	15.5	9	
6	15.5	1	
6.5	15.5	4	
4	16	7	
4.5	16	9	
5	16	12	
5.5	16	6	
6	16	6	

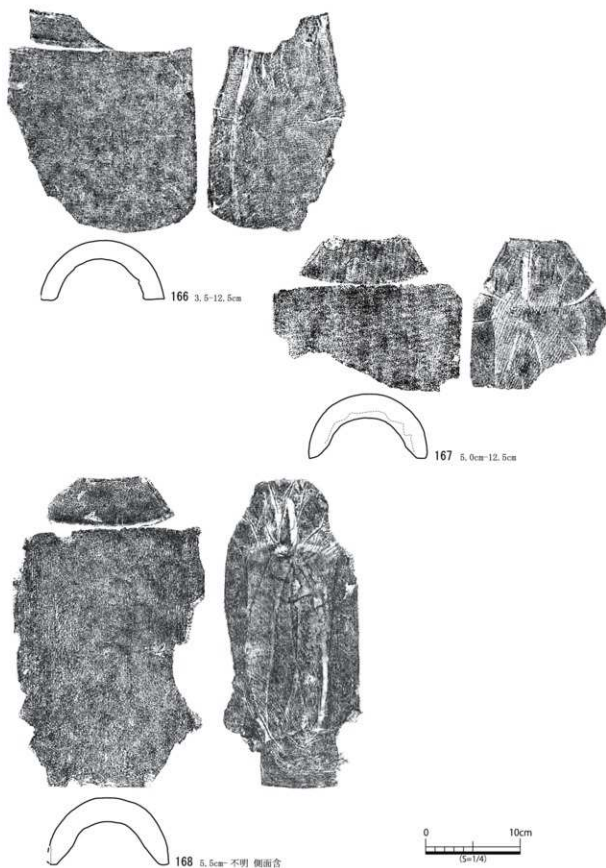
玉縁長(cm)	玉縁幅(cm)	点数	備考
3.5	16.5	1	
4	16.5	2	
4.5	16.5	6	
5	16.5	5	
5.5	16.5	1	
6	16.5	3	
6.5	16.5	1	
4	17	4	
4.5	17	1	
5	17	1	
5.5	17	3	
6	17.5	1	
3.5	18	1	

第4表 男瓦玉縁長別出土量一覧表

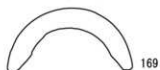
玉縁長(cm)	点数	備考
3	2	中世のみ
3.5	11	中世あり
4	52	
4.5	89	わずかに中世
5	82	わずかに中世
5.5	50	わずかに中世
6	24	
6.5	7	
7	2	

第5表 男瓦玉縁幅別出土量一覧表

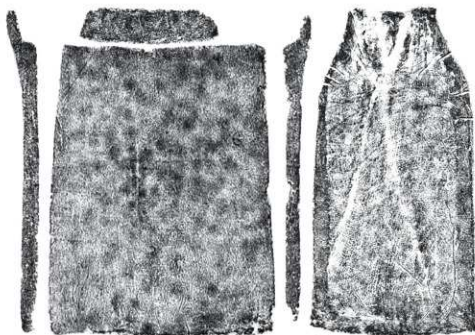
玉縁幅(cm)	点数	備考
9	1	中世のみ
11	2	中世のみ
11.5	1	
12.5	1	
13	18	中世あり
13.5	41	中世あり
14	46	
14.5	44	
15	45	
15.5	51	
16	40	
16.5	18	
17	9	
17.5	1	
18	1	



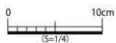
第57図 男瓦① (S=1/4)



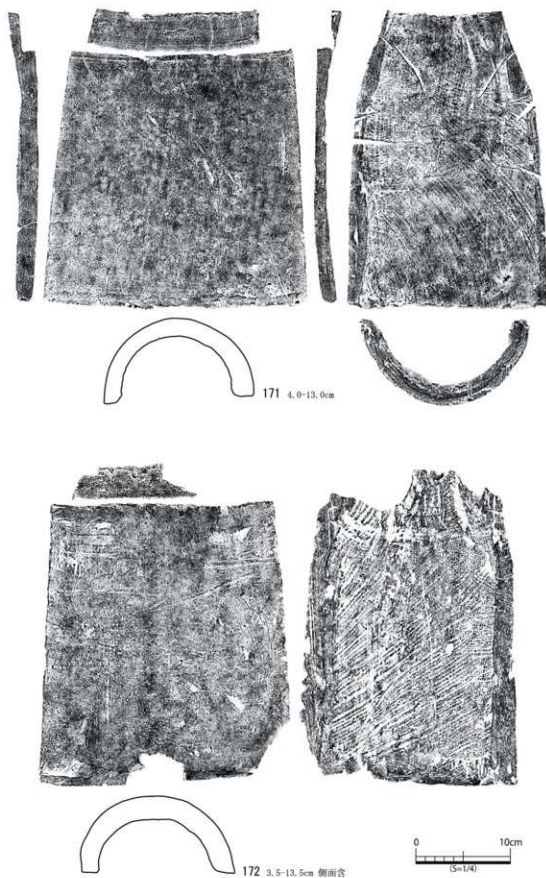
169



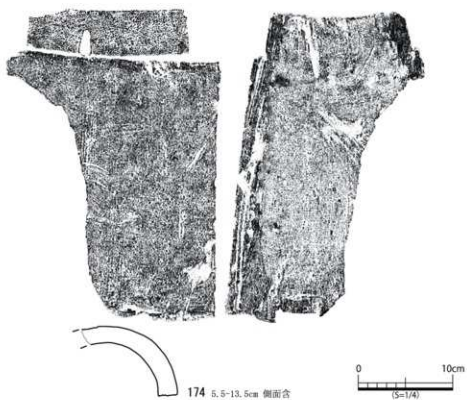
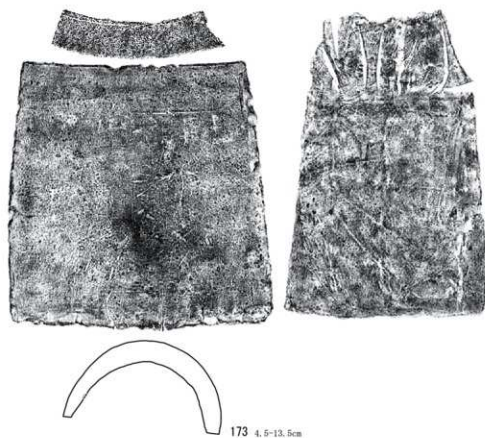
170 4.0-13.0cm



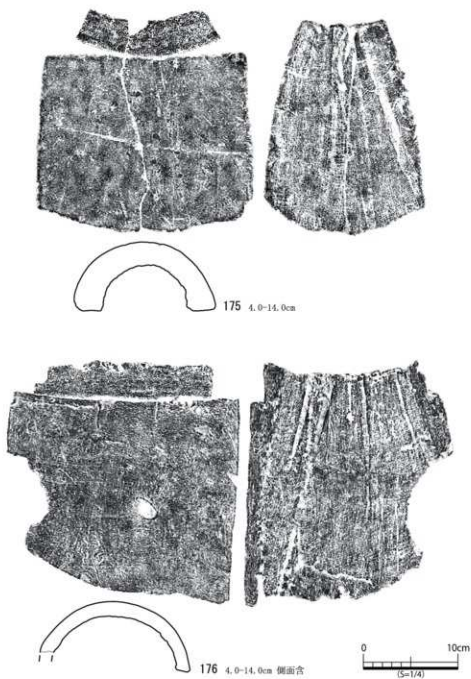
第58図 男瓦② (S=1/4)



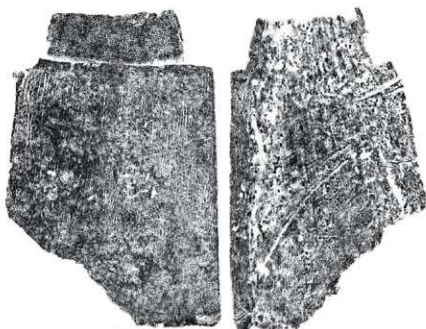
第 59 図 男瓦③ (S=1/4)



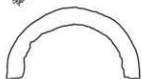
第60図 男瓦④ (S=1/4)



第61図 男瓦⑤ (S=1/4)



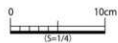
177 4.0-14.0cm 側面含



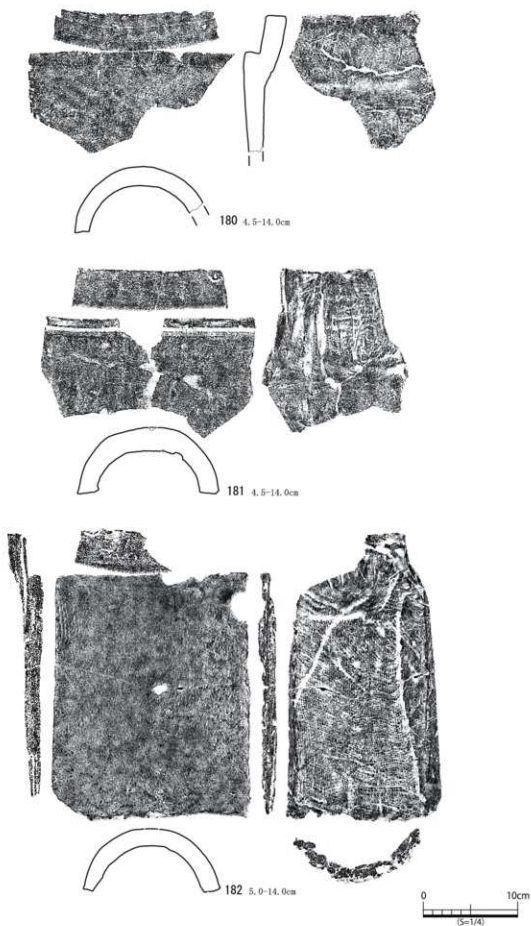
178 4.5-14.0cm



179 4.5-14.0cm



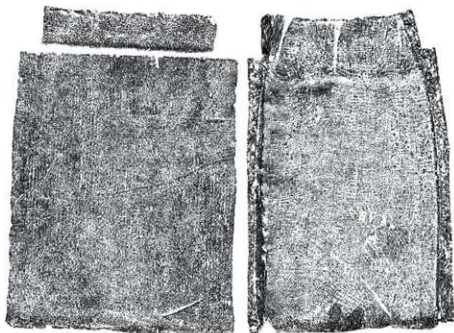
第 62 図 男瓦⑥ (S=1/4)



第63図 男瓦⑦ (S=1/4)



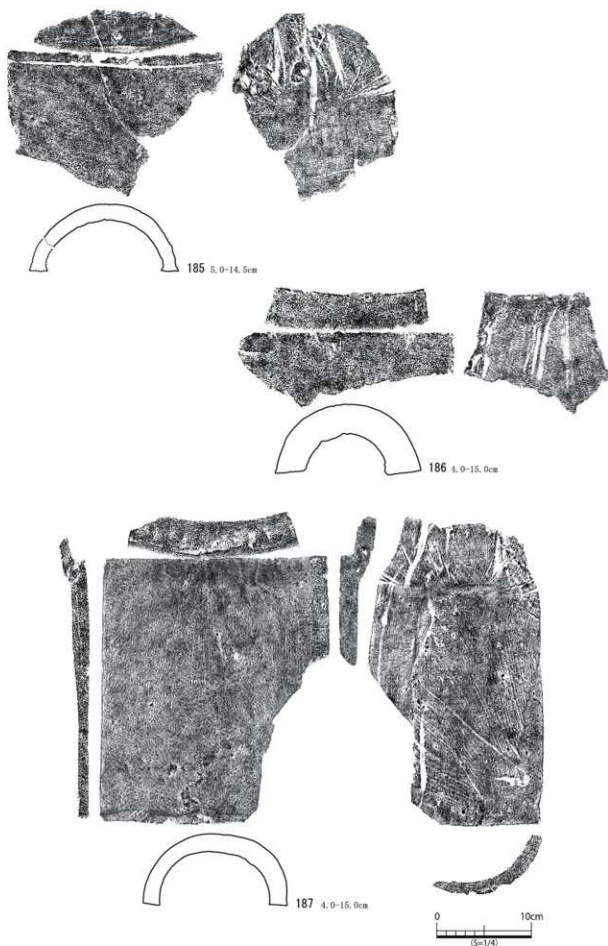
183 5.5-14.0cm



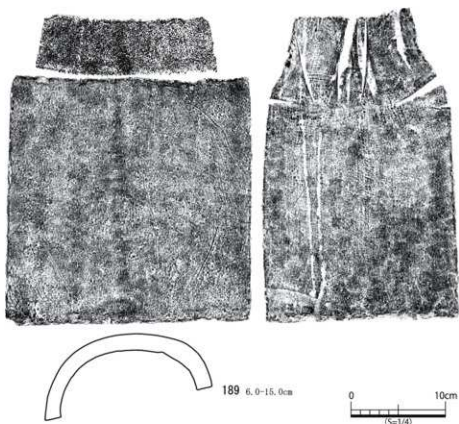
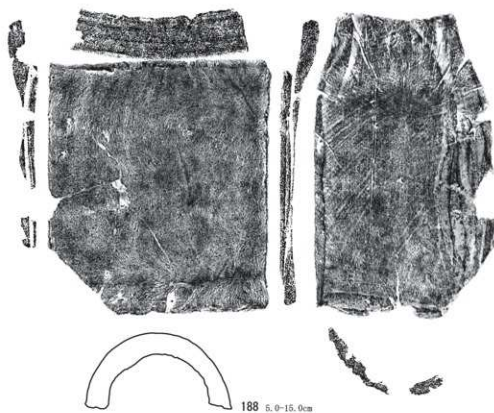
184 3.5-14.5cm 側面含



第64図 男瓦® (S=1/4)



第65図 男瓦⑨ (S=1/4)



第66図 男瓦⑩ (S=1/4)